

博 士 論 文

人生ストレス経験への青年期における意味づけ方生成過程並びに支援等促進要因に関する研究

—青年期の SOC 形成促進に向けて—

The process of giving meaning to stressful life experiences and the factors promoting it: promoting the formation of adolescents' sense of coherence

2017年度

日本福祉大学大学院
福祉社会開発研究科
社会福祉学専攻博士課程

学籍番号:14DA0022

氏 名:小野田(藤津)加奈子

2017年7月7日

論文要旨

学籍番号： 14DA0022

氏名：小野田（藤津）加奈子印

◆論文題目

人生ストレス経験への青年期における意味づけ方生成過程並びに支援等促進要因に関する研究 ―青年期のSOC形成促進に向けて―

◆要旨

1. 本研究の目的

本研究の目的は、青年期のストレス対処・健康生成力概念であるSOC形成をいかに促進していくのかという観点から、その要因として人生ストレス経験への意味づけ方を取り上げ、その内容や生成過程、SOC形成との関連を検証し、さらには支援者が意味づけ方生成過程においてどのような支援を行っていくことが健康生成論的に効果的かという実例を示すことである。

上述した本研究の目的を達成するために、以下の2つの研究課題を設定する。①青年期後期にあたる青年を対象とし、子ども時代の親の子育ての質、並びに青年期の人生ストレス経験への意味づけ方を明らかにした上で、これらの意味づけ方と青年期のSOC形成との関連を明らかにしていく。②青年期の人生ストレス経験への意味づけ方の生成過程を明らかにした上で、その過程における、支援者の種類、効果的支援内容等を記述的に明らかにしていく。

2. 本研究の枠組み

本研究は、2つの調査に関する5つの分析を含む全8章（序章と終章を含む）からなる。序章で目的を述べ、第1章では先行研究の検討を行い、先行研究の中で明らかにされていないこと等を整理した。

第2章から第4章においては、2014年度に実施した質問紙調査のデータ（大学生270名を対象とした量的調査）を用いて、3つの分析を行う。第2章では子ども時代の親の子育ての質への意味づけ方尺度を開発する。そして、第3章では、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方尺度を開発する。そして、第4章では、この2つの意味づけ方と青年期の

SOC 形成との関連性の検証を行う。

第 5 章及び第 6 章においては、2015 年度に実施した面接調査のデータ（大学生 6 名を対象とした質的調査）を用い、2 つの分析を行う。第 5 章では、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程、並びにその過程における支援者による支援内容を検討する。その際、混合研究法を用い、第 3 章の量的研究結果を併合して考察を行う。第 6 章では、第 5 章の分析結果を基に、青年の意味づけ方生成に関する支援者の実例、並びに各支援者の支援内容を明らかにする。終章では、本研究で明らかになったこと、支援者による支援方法への示唆並びに本研究の限界と今後の展望について述べる。

3. 第 1～6 章までの概要

第 1 章：先行研究の検討

本章では、先行研究のレビューから、青年期後期にあたる青年を対象とした先行研究において明らかにされていないこととして以下の 5 つを挙げた。1 つ目は、子ども時代の親の子育ての質への意味づけ方を包括的に測定評価する尺度が殆どないことである。2 つ目は、青年期に直面した人生ストレス経験への意味づけ方を測定する尺度が国内では殆どないことである。3 つ目は、子育ての質への意味づけ方、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方及び青年期の SOC との関連を総合的に検証した実証研究が殆どないことである。4 つ目は、混合研究法を用い、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方を生成していく過程、並びにその過程における支援者の効果的支援内容が明らかにされていないことである。5 つ目は、青年期の人生ストレス経験に対し意味づけ方を生成していく過程における、支援者の種類、各支援者の支援内容について、男女差を含めて、包括的に検討した研究があまり行われていないことである。

第 2 章：子ども時代の親の子育ての質への意味づけ方尺度作成 —量的研究法を用いて—

本章では、青年期後期の SOC と関連する、子ども時代の親の子育ての質への意味づけ方尺度（以下、子育ての質尺度）を作成する。2014 年 12 月～2015 年 1 月、A 県の B、C 大学に在籍する青年期後期に属する大学生 635 名に対し質問紙調査を行い、322 名から回答が得られた（回収率 50.7%）。このうち、著しい不備のなかった 270 名を有効回答とした。質問紙では、①属性（性別・年齢）、②子育ての質の予備尺度、③SOC-13（把握可能感、処理可能感、有意味感）を尋ねた。因子分析の結果、「親からの支援と愛情表現」、「親からの意思決定の尊重」の 2 因子が抽出された。また、子育ての質尺度及び各下位尺度の Cronbach の α 係数は.88～.92 であったことから、本尺度の信頼性が示された。さらに、外的基準である SOC-13 及び下位尺度の処理可能感、有意味感、子育ての質尺度及び各下位尺度との間に有意な正の弱から中等度の相関を示したため ($r=.15\sim.32$, $p < .001$)、本尺度の基準関連妥当性が示された。子育ての質尺度の各下位尺度を独立変数、SOC-13 及び各下位尺度を従

属変数とする重回帰分析を行ったところ、SOC-13 及び処理可能感、有意味感において有意なモデルが示されたことから、本尺度の構成概念妥当性が示された。

第3章：青年期の人生ストレス経験への意味づけ方尺度作成 ー量的研究法を用いてー

本章では、青年期のストレス経験への意味づけ方尺度（以下、人生ストレス経験への意味づけ方尺度）を作成することである。調査時期及び対象者は第2章と同じである。質問紙調査では、①属性（性別・年齢）、②青年期のストレス対処等経験の種類・深刻度、③②のストレス対処等経験への意味づけ方尺度の予備尺度、④SOC-13 を尋ねた。因子分析の結果、「人生ストレス経験からの成長」、「人生の目的の明確化」、「周囲との関係性の再認識」の3因子が抽出された。これらは、先行研究を支持し、かつ青年期の特徴と合致していたため、本尺度の構成概念妥当性が示された。人生ストレス経験への意味づけ方尺度及び各下位尺度についての Cronbach の α 係数を算出した結果、.88～.94 であったことから、本尺度の信頼性が示された。また、外的基準である SOC-13、人生ストレス経験の深刻度及び全7つの人生ストレス経験の種類との相関係数を算出した結果、有意な正の中等度から強い相関 ($r=.29\sim.49$) を示したことから、本尺度の基準関連妥当性が示された。

第4章：青年期の SOC と人生ストレス経験への意味づけ方との関連 ー量的研究法を用いてー

本章では、子育ての質への意味づけ方、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方、並びに青年期の SOC 間の関連を明らかにする。調査時期及び対象者、並びに質問紙調査の内容は、第2章、第3章と同じである。共分散構造分析の結果、子育ての質への意味づけ方は、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方に有意な正のパス (.55) を示し、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方は、青年期の SOC に有意な正のパス (.64) を示した。したがって、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方が青年期の SOC 形成を直接的に促進すること、並びに子育ての質への意味づけ方が、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方を媒介して、青年期の SOC 形成を間接的に促進することが示唆された。

第5章：青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程並びにそれへの支援者による効果的支援内容 ー質的研究法を用いてー

本章では、質的研究法によって、青年期の人生ストレス経験に対し青年期後期の青年が行う意味づけ方生成過程並びに支援者による支援内容を明らかにし、第3章の量的研究の結果と併合し、混合研究法に基づき考察を行う。2015年11月～12月、H県のI大学、J大学の青年期後期に属する青年期後期に属する大学生6名に対し、半構造化面接を行った。面接では、青年期の人生ストレス経験の内容等について尋ねた。修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach; M-GTA) を用いて分析し、第3章の量的

研究結果と併合した混合研究法の視点から考察を行った。分析の結果、青年は人生ストレスやストレスへの〈効果的対処の実現〉、その後時間を経る中で行われる〈意味づけし直しの試み〉の中で、青年期の人生ストレス経験に対して〈肯定的意味づけ方の生成〉だけでなく、〈否定的意味づけ方の生成〉を行っていた。さらに、〈支援者による効果的支援内容〉は、〈肯定的意味づけ方の生成〉だけでなく、〈効果的対処の実現〉にも影響を与え、意味づけ方生成過程を長期的に支えていた。

第6章：青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成に関する青年の支援者の種類並びに各支援者の支援内容の実例 ―質的研究法を用いて―

本章では、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成に関する青年の支援者の種類、各支援者の支援内容を明らかにする。調査時期、対象者及び調査方法は第5章と同じである。第5章のM-GTAによる分析を基に分析を行った結果、インフォーマルな支援者として、友人、母親等の5種類、フォーマルな支援者として、担任教師・ゼミの教員、学生相談室のカウンセラー等の6種類が挙げられた。そして、インフォーマルな支援者である友人は多くの種類の支援を行うが、その中でも特に「他愛無い雑談」は特徴的な支援であることが示された。フォーマルな支援者である担任教師・ゼミの教員、学生相談室のカウンセラーは、〈他の支援者による支援の促進〉を共通して行うことが示された。さらに、インフォーマル及びフォーマルな支援者に共通する支援内容として、「気持ちの理解」が挙げられた。

終章：総合考察

本研究で新たに明らかになったこととして、第2章～第6章の結果をまとめた。そして、支援者が人生ストレス経験への青年による意味づけ方生成に対し、どのような支援を行っていきべきかについて示唆を行った。

4. 本研究の限界と今後の展望

本研究の限界として、開発した尺度の信頼性・妥当性を今後さらに検証していく必要があること、本研究では横断的研究法を用いたため、子育ての質への意味づけ方、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方が青年期のSOCに影響を及ぼすという因果関係までは言及できないこと等を挙げた。

Abstract of Doctoral Dissertation

Student NO. : 14DA0022

Surname, First name : Kanako, Onoda(Fujitsu)

【Title】

The process of giving meaning to stressful life experiences and the factors promoting it: promoting the formation of adolescents' sense of coherence

【Abstract】

1. Objective

This research focused on the factors promoting the formation of adolescents' sense of coherence (SOC), which is an important concept in stress coping and salutogenesis. We supposed that the meanings made of stressful life experiences are among the factors promoting SOC. Moreover, we clarified the contents and process of making meaning of stressful life experiences, the relationship between the meanings and adolescents' SOC, and the contents of effective support in salutogenesis.

We established two research questions. First, by targeting late adolescents (18 years old to late twenties), we elucidated the meanings made of the Quality of Parenting of Children aged up to 12 years (MQPC) and of Adolescent Stressful Life Experiences (MASIE). Moreover, we clarified the relationships among MQPC, MASIE, and adolescents' SOC. Second, we elucidated the process of MASIE as well as the adolescents' supporters and the contents of effective support they provided during the process.

2. Framework of this study

Our research report comprises eight sections (including the introduction and final chapter) with five experimental studies. In the introduction, we have described the objectives of the study. In Chapter 1, we reviewed the previous studies and proposed five problems. In Chapters 2-4, we described the quantitative research on 270 university students in their late adolescence, that we conducted in 2014 and the three analyses we performed thereafter. In Chapter 2, we explained the development of the MQPC scale. In Chapter 3, we described the development of the MASIE scale. In Chapter 4, we examined the relationship between the MQPC, the MASIE, and adolescents' SOC.

In Chapters 5-6, we described the qualitative research that we conducted by targeting six university students in their late adolescence, administered in 2014 and the two analyses we performed thereafter. In Chapter 5, the analysis

of the process of MASIE and the contents of support provided by the supporters in the process of MASIE is elucidated. Moreover, we discussed in the view of a mixed method, including the quantitative survey described in Chapter 3. In Chapter 6, we clarified who the supporters were for the adolescents, and what contents of support they provided, based on the analysis in Chapter 5. In the final chapter, we discussed the notable results of the investigation, suggested how supporters support adolescents' making the meanings to stressful life experiences and explained the limitations of this research and suggested future projects.

3. Summary of each chapter (Chapters 1 to general discussion)

Chapter 1: Review of evidence in previous studies

In this chapter, we reviewed the previous studies and listed five research problems targeting late adolescents. The five research problems are as follows:

- 1) Not developing the MQPC scale and examining its relationship to SOC
- 2) Not developing the MASIE scale and evaluating its validity and reliability
- 3) Not developing the relationships among MQPC, MASIE, and adolescents' SOC
- 4) Not elucidating the process of MASIE and the contents of support provided by the supporters in the process of MASIE using qualitative research
- 5) Not clarifying who the supporters were for the adolescents in the process of MASIE, what contents of support they provided, and sex difference

Chapter 2: Development and validation of the MQPC scale: Relationship with Adolescents' SOC

— Quantitative research —

In this Chapter, we discussed how the MQPC scale was developed and examined its relationship to the SOC. Questionnaires including a preliminary version of the MQPC scale questionnaire were distributed to 635 undergraduates and responses were obtained from 322 participants (collection rate = 50.7%) in 2014. There were 270 valid responses (169 women, $M_{\text{age}} + SD = 20.3 \pm 1.07$ years). A factor analysis (least-squares method with promax rotation) revealed two factors: "parents' support and expression of affection for children" and "parents' respect for children's decision making." Cronbach's α coefficients for the total scale and two subscales of the MQPC scale ranged from .86 to .92. The total score and two subscales of the MQPC scale showed significant positive correlations with the SOC-13 scores, manageability, and meaningfulness ($r=.15\sim.32$, $p < .001$). The reliability, criterion-related validity, and construct validity of the MQPC scale were verified.

Chapter 3: Development and validation of MASIE scale

— Quantitative research —

In this Chapter, we discussed the development of the MASIE scale and evaluated its validity and reliability. Questionnaires including a preliminary version of the MASIE scale questionnaire were distributed to 635 undergraduates and responses were obtained from 322 participants (collection rate = 50.7%) in 2014. A factor analysis (least-squares method with promax rotation) revealed three factors: “growth from stressful life experiences,” “clarification of the purpose in life,” and “appreciation for human relationships.” Cronbach’s α coefficients for the total scale and three subscales of the MASIE scale ranged from .88 to .94. The total score and three subscales of the MASIE scale showed significant positive correlations with the SOC-13 scores ($r = .29-.49$, $p < .001$). “Clarification of purpose in life” showed a significant negative correlation with stressful life experiences severity levels ($r = -.14$, $p < .05$). However, the “course and employment,” “school record and ability,” and “health” stressful life experiences did not significantly correlate with the MASIE scale’s total score or any of the three subscales. The MASIE scale was found to be both reliable and valid.

Chapter 4: Relationship between older adolescents’ SOC and meanings made through meaning-making of stressful life experiences

— Quantitative research —

In this Chapter, we examined the relationship between the MQPC, MASIE, and adolescents’ SOC. Questionnaires were administered as described in Chapters 2 and 3. Using structural equation modeling, this study verified its hypotheses. The MQPC was positively related to the MASIE, which in turn was positively related to adolescents’ SOC. The MASIE directly promoted adolescents’ SOC, while the MQPC indirectly promoted adolescents’ SOC.

Chapter 5: The process of the MASIE and the effective contents of support by supporters in the process of the MASIE

— Qualitative research —

In this Chapter, we described the qualitative research to elucidate the process of MASIE, and the contents of the support provided by the supporters in the process of the MASIE. We conducted semi-constructed interviews with six university students. We analyzed the process of MASIE and the contents of the support by supporters in the process of MASIE, using the modified grounded theory approach (M-GTA). Moreover, based on the quantitative survey described in Chapter 3, we discussed from the perspective of a mixed method. As a result of M-GTA, adolescents did <making positive meaning> and <making negative meaning> through <effective coping> with life stressors and stress and <re-

meaning-making> for a long time. Moreover, <effective supports provided by supporters> had good effect on <making positive meaning> and <effective coping>-namely, the whole process of making meaning of stressful life experiences.

Chapter 6: The contents of the supporters in the process of MASIE, and the support provided by them during this process

— Qualitative research —

In this Chapter, we clarified who the supporters were for the adolescents, and what kind of support they provided. We conducted semi-constructed interviews with six university students who were the same participants in the interview mentioned in Chapter 5. Using the interview data analyzed in Chapter 5, we abstracted the supporters and their support contents. We found friends, mothers, and so on as informal supporters and school and lab teachers, counselors, and so on as formal supporters. Moreover, friends provided various support, especially chatting. Lab teachers and counselors did <promotion of support from other supporters>. Both informal and formal supporters provided understanding of feelings.

Final Chapter: general discussion

In the final chapter, we discussed the notable results of the investigation as described in chapters 2-6. Furthermore, we suggested how supports facilitate adolescents in making meaning of stressful life experiences.

4. Significance of this research and future projects

Our research has limitations. First, we must verify the reliability and validity of the MQPC and MASIE scales in the future. Second, as we used cross-sectional analysis to investigate the relationships among MQPC, MASIE, and adolescents' SOC, we could not confirm any causal relationship.

目次

序章 本研究の目的と構成

第1節 本研究の目的	1
1. 本研究の目的と課題を設定するにあたっての視点	1
2. 本研究の目的と課題	2
第2節 本研究の構成	3
第3節 研究方法	4
第4節 本研究における用語の定義と解説	6

第1章 先行研究の検討

第1節 先行研究の収集方法	9
第2節 青年の意味づけ方生成に関する先行研究	10
1. 青年期の自我同一性形成の特徴	10
2. ライフコースとライフヒストリー	12
第3節 青年期のSOCに関する先行研究	14
1. レジリエンスに関する先行研究	14
2. 青年期のSOCに関する先行研究	15
3. 人生ストレス経験への意味づけ方と青年期のSOC形成との関連	17
4. 青年期のSOC形成と関連する子育ての質への意味づけ方に関する先行研究	18
5. 青年期における人生ストレス経験への意味づけ方とSOCとの関連性に関する先行研究	20
6. 子育ての質への意味づけ方と青年期の人生ストレス経験への意味づけ方間の関連	23
第4節 人生ストレス経験への意味づけ方及びその生成過程に関する先行研究	23
1. 人生ストレス経験への意味づけ方及びその生成過程に関する理論研究	23
2. 人生ストレス経験への意味づけ方生成過程に関する実証研究	26
第5節 青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成に関する青年の支援者の種類とその支援内容に関する先行研究	30
1. 青年の支援者の種類に関する先行研究	30
2. 各支援者による支援内容に関する先行研究	31
第6節 考察	34
1. 先行研究で明らかにされていること	34
2. 先行研究で明らかにされていないこと	34

第2章 子ども時代の親の子育ての質への意味づけ方尺度作成

—量的研究法を用いて—

第1節	目的	36
第2節	対象と方法	36
1.	研究対象者	36
2.	方法	36
第3節	結果	38
1.	回収率と対象者の属性	38
2.	因子分析の結果	38
3.	信頼性の検証	40
4.	基準関連妥当性の検証	40
5.	構成概念妥当性の検証	41
6.	男女差の検証	41
第4節	考察	42
第5節	本研究のまとめと限界	44

第3章 青年期の人生ストレス経験への意味づけ方尺度作成

—量的研究法を用いて—

第1節	目的	45
第2節	対象と方法	45
1.	研究対象者	45
2.	方法	45
第3節	結果	48
1.	回収率と対象者の属性	48
2.	因子分析の結果	48
3.	妥当性の検証	50
4.	信頼性の検証	52
第4節	考察	52
1.	尺度の妥当性について	52
2.	尺度の信頼性について	54
第5節	本研究のまとめと限界	55

第4章 青年期のSOCと人生ストレス経験への意味づけ方との関連

—量的研究法を用いて—

第1節	目的	56
第2節	対象と方法	56
1.	研究対象者	56
2.	方法	56

第3節	結果	60
1.	回収率及び対象者の属性	60
2.	要因間の相関関係	60
3.	因果的関連性モデル（最終モデル）の適合度と要因間の関連性の検討	61
第4節	考察	62
1.	要因間の相関関係	62
2.	子育ての質への意味づけ方，青年期の人生ストレス経験への意味づけ方並びに青年期のSOC間の関連	63
第5節	本研究のまとめと限界	65

第5章 青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程並びにそれへの支援者による効果的支援内容

—質的研究法を用いて—

第1節	目的	66
第2節	対象と方法	66
1.	研究対象者	66
2.	方法	66
第3節	結果	67
1.	概念及び結果図	69
2.	ストーリーライン	70
第4節	考察	72
1.	青年期の人生ストレス経験への意味づけ方の内容	75
2.	青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程	76
3.	青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程への支援者による効果的支援内容	77
第5節	本研究のまとめと限界	78

第6章 青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程における青年の支援者の種類並びに各支援者の支援内容の実例

—質的研究法を用いて—

第1節	目的	80
第2節	対象と方法	80
1.	研究対象者	80
2.	方法	80
第3節	結果	83
1.	支援者の種類	84

2. 各支援者の支援内容	84
3. 各支援者及び支援内容の男女差の検討	86
第4節 考察	86
1. 支援者の種類の実例	86
2. 各支援者の支援内容	89
3. 各支援者等の種類及び支援内容の男女差の傾向	91
第5節 本研究のまとめと限界	91

終章 総合考察

第1節 本研究で明らかにされたこと	93
1. 人生ストレス経験への意味づけ方と青年期のSOC形成との関連	93
2. 青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程並びに支援者による効果的支援内容等	95
第2節 人生ストレス経験への青年期における意味づけ方生成過程での支援方法に関する示唆	97
第3節 本研究の限界と今後の展望	101
1. 本研究の限界	101
2. 今後の展望	103
謝辞	103
引用文献	105
資料	114

序章 本研究の目的と構成

第1節 本研究の目的

1. 本研究の目的と課題を設定するにあたっての視点

青年期の中で、青年はストレスフルな人生出来事及び状況である人生ストレッサーに直面し、ストレスを抱えることが想定される。そして、この人生ストレッサーやストレスに対し、効果的な対処ができないことによって、その後の人生の中で否定的影響を受け続ける青年も存在する（藤田ほか 2009）。よって、青年が人生ストレッサーやストレスに対して効果的に対処し、後述する首尾一貫感覚（Sense of Coherence; SOC）を形成していくことは、青年期のみならずその後の人生の中で、青年が自分らしくいきいきと生き、自己実現を図っていくことを可能にするという意味で重要である。

人生ストレッサーやストレスに直面した際の効果的対処には、問題を解決しようとする行動的対処や、ストレスを低減させようとする情緒的対処が存在する（Lazarus & Folkman =1984: 335-6）。しかし、人生ストレッサー直面時から時間を経る中で、自身が直面した人生ストレッサーやストレス、その後の対処を含めた一連の経験（宅 2005）、すなわち人生ストレス経験について何度も振り返り、なぜ自分に起こったのか（Park & Folkman 1997）、自身の対処の仕方が妥当だったかなどに対して後悔や自責感をもち続ける青年も存在すると考えられる。このような場合は、人生ストレス経験に対して、自分が成長できた、人生において大切なことに気付くことができた、人生の目標が見つかったなど、青年が自分なりの意味づけ方を生成し、首尾一貫したライフストーリーを構成していくことも、人生ストレッサーやストレスへの効果的対処となり得る（Gan et al. 2013）。しかし、青年の人生ストレス経験への意味づけ方の内容や生成過程について、国外では研究が行われているが、国内での研究は殆どない。

ストレス対処・健康生成力概念として、首尾一貫感覚（Sense of Coherence; SOC）が存在する（Antonovsky 1979: 183; Antonovsky=2001: 19; Mittelmark et al. 2017: 71）。SOCとは、Antonovskyによる健康生成論とSOC概念の提唱以降の国内外における3000編以上の実証研究に基づけば、ストレスフルな人生出来事や人生状況に直面しながらも、その人のもつ内的及び外的対処資源を認識し、活用して、それらに効果的な対処を行い、心身の健康を守るばかりか、人間的成長・発達の糧にすら変えて、健康でいきいきとした人生を創りあげていくことを可能にする力（山崎 2011b; Eriksson 2017: 91-5）と再定義することができる。SOCは把握可能感、処理可能感、有意味感の3要素から成り、人生ストレス経験に対し自分なりの意味づけ方を生成する有意味感が基となり、人生ストレス経験を理解する把握可能感、内的及び外的対処資源を用いた対処方法が分かり、対処できるという処理可能感につながると考えられている（Antonovsky=2001: 26-7）。

こうしたSOCは、その人の個人的心理的側面だけでなく、社会的側面にも目を向け、内的

外的両方の人生ストレスと対処資源に着目し、働きかけることを通して生まれ、向上するとされる点で、社会学的概念であり (Eriksson 2017 : 91-5) , エンパワメントやストレスなどソーシャルワーカーの支援方法の枠組みとも類似する点で (山崎 2011b : 9) , 社会福祉学におけるキーワードと重なる概念であると言える。

そして、先行研究より (Antonovsky 1979 : 184) , 青年の SOC によって、人生ストレス経験に対する意味づけ方生成が促進される一方、人生ストレス経験への意味づけ方を生成していくことは SOC 形成と関連する良質な人生経験であり、この結果生成された意味づけ方は内的及び外的対処資源への気付きとなり、SOC 形成が促進されるという双方向的な関係が想定される。しかし、この人生ストレス経験への意味づけ方と青年期の SOC 形成との双方向的な因果的関連について示唆されているが (戸ヶ里 2011b : 118) , 実証的には明らかにされていない。

また、この人生ストレス経験への意味づけ方生成は、高校卒業後～20 代後半の青年期後期 (宅 2010 : 12 ; 戸ヶ里 2011a : 44) に行われやすいことが示されている (松本 2009 ; 中村ら 2011) . しかし、青年のみで意味づけ方を生成していくことは難しいため (松井・笹井 2013) , ソーシャルワーカーを含め様々な支援者による支援が必要となる (狭間 2001 : 141 ; Germain & Gitterman=2008 : 57 ; 原 2012 ; 松井・笹井 2013 ; Fenstermacher 2014) . しかし、青年が人生ストレス経験に対し意味づけ方を生成していく過程において、支援者がどのような支援を行うことが効果的なのか、また、どのような支援者が存在し、各支援者がどのような支援を行っているのかという実例を示した研究は殆どない。

2. 本研究の目的と課題

本研究の目的は、青年期のストレス対処・健康生成力概念である SOC 形成をいかに促進していくのかという観点から、その要因として人生ストレス経験への意味づけ方を取り上げ、その内容や生成過程、SOC 形成との関連を検証し、さらには支援者が意味づけ方生成過程においてどのような支援を行っていくことが健康生成論的に効果的かという実例を示すことである。そのために、青年を対象とした量的調査及び質的調査を用いる。

上述した本研究の目的を達成するために、以下の2つの研究課題を設定する。①青年期後期にあたる青年を対象とし、重要な人生ストレス経験として、子ども時代の親の子育ての質、並びに青年期の人生ストレス経験を取り上げ、これらに対し生成された意味づけ方を明らかにした上で、これらの意味づけ方と青年期の SOC 形成との関連を明らかにしていく。②重要な人生ストレス経験の一つとして、青年期の人生ストレス経験を取り上げ、これへの意味づけ方の生成過程を明らかにした上で、生成過程における支援者の効果的支援内容を明らかにしていく。さらに、青年にはどのような支援者が存在し、各支援者がどのような効果的支援を行っているのかという実例についても明らかにしていく。

第2節 本研究の枠組み

本研究では、上記の3つの研究課題を達成するために、2つの調査に関する5つの分析を計画・実施している。そして、これらを含む全8章（序章と終章を含む）から構成されている。図1は、本研究において検証を行う、人生ストレス経験に対する青年の意味づけ方と青年期のSOC形成、並びに支援者による効果的支援との関係が表してある。

第1に、第2章～第4章において、2014年度に実施した質問紙調査による量的データ（以下、調査1）を用いて、3つの分析を行う。第2章では、重要な人生ストレス経験への意味づけ方の1つである、子ども時代の親の子育ての質への意味づけ方の内容を明らかにする（以下、調査1分析1）。第3章では、重要な人生ストレス経験への意味づけ方の1つである、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方を明らかにする（以下、調査1分析2）。第4章では、子育ての質への意味づけ方、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方と青年期のSOC形成との関連を明らかにする（以下、調査1分析3）。

第2に、第5章及び第6章において、2015年度に実施した面接調査による質的データ（以下、調査2）を用い、2つの分析を行う。第5章では、大学生6名を対象に、人生ストレス経験への意味づけ方として青年期の人生ストレス経験への意味づけ方を取り上げ、これが生成されていく過程、生成された意味づけ方の内容、さらにこの生成過程における支援者による効果的支援内容を検討する（以下、調査2分析1）。その際、質的量的研究法を用いた混合研究法を用い（Creswell & Plano Clark=2010:5）、第3章の量的データによって明らかにされた青年期の人生ストレス経験への意味づけ方の結果、並びに第5章の質的データによって明らかにされた青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程及び意味づけ方の内容の結果を併合して考察を行う。第6章では、第5章の分析に基づき、意味づけ方生成過程において、どのような支援者が存在するのか、さらに各支援者がそれぞれの青年に対してどのような効果的支援を行っているのかという事例について明らかにしていく（以下、調査2分析2）。

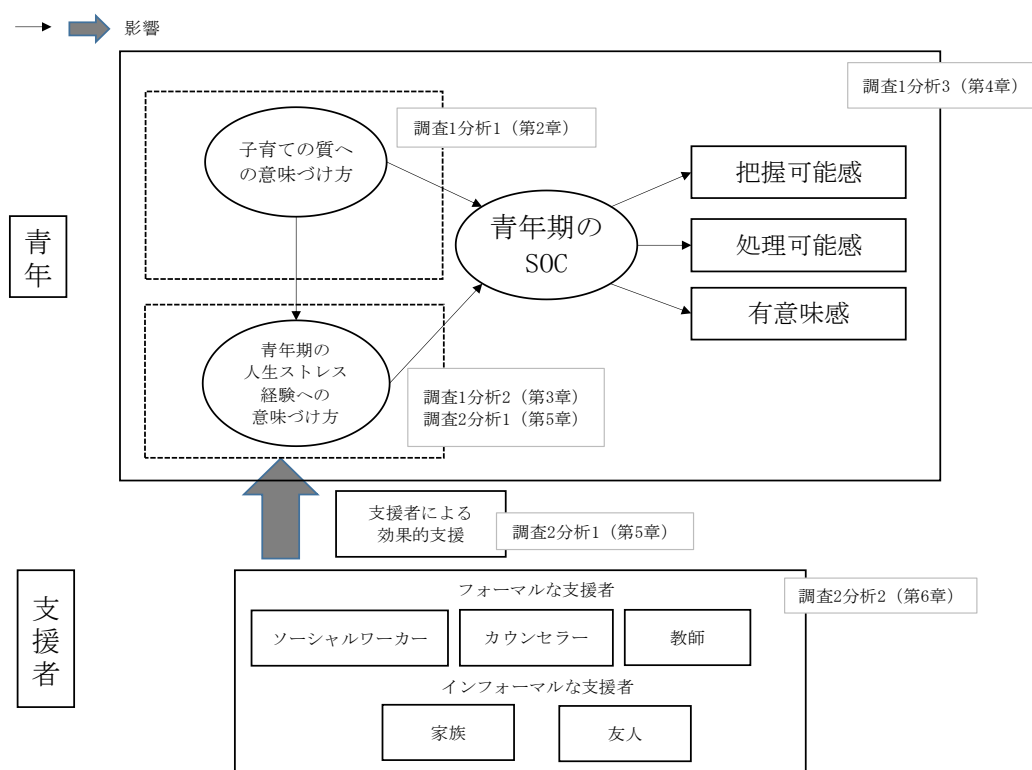


図1 人生ストレス経験に対する意味づけ方，青年期のSOC形成，並びに支援者による効果的支援との関係予想図

第3節 研究方法

本研究の，実証研究（第2章～第6章）に用いたデータの研究方法を以下に示す．第2章～第4章の大学生を対象とした実証研究は，2014年度に実施した質問紙調査である調査1に基づいている．これは，2014年12月から2015年1月にかけて，A県のB，C大学に在籍する大学生635名を対象にして，大学講義開始直前または終了直後に自記式質問紙を用いた調査を行い，即日及び配布後4週間以内に回収を行った．その結果，322名から回答が得られ（回収率50.7%），著しい回答の欠損のない270名（有効回答回収率42.5%）を対象とした調査である．この調査データについて，3つの分析を行い，第2章～第4章にまとめた．統計解析は統計ソフトのR（version 3.2.4）（R Development Core Team 2016）を使用し，有意水準は5%未満とした．

第5章及び第6章の大学生を対象とした実証研究は，2015年度に実施した半構造化面接である調査2に基づいている．これは，先述した2014年12月から2015年1月にかけて行った調査1の対象者である大学生270名の中で，面接調査の内容を説明した上で最終的に調査参加同意の得られた6名を対象とした調査である．そして，この調査データを修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach; M-GTA）（木下2003；2007；2014）を基に分析した．データは修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

(Modified Grounded Theory Approach; M-GTA) (木下 2003 ; 2007 ; 2014) を用いて分析した。M-GTA は、ヒューマンサービス領域における、人と人との直接的やりとりに関係した、プロセスとしての現象を明らかにするのに適している(木下 2003 : 89-91) 。そして、本研究はこのような現象を明らかにするものであるため、M-GTA を選択した。

M-GTA における分析では、研究テーマをデータに即して分析していくために絞り込んだ分析テーマ(木下 2007 : 144) , 分析結果の適応可能範囲、一般化可能範囲である分析焦点者(木下 2007 : 157) の 2 つの視点が重要になる。本研究の分析テーマは、「青年期後期にあたる青年が、青年期の期間の中で直面した人生ストレス経験に対し、支援者による効果的支援を受けながら、意味づけ方を生成する過程」である。また、本研究の分析焦点者は、「青年期の期間の中で人生ストレスに直面したことがある、青年期後期にあたる青年」である。

この分析テーマと分析焦点者の 2 つの視点からデータを分析していき、データから解釈によって生成する分析上の最小単位である概念、複数の概念の関係からなるカテゴリー、必要に応じて両者の間にサブカテゴリーを設定した(木下 2014 : 139) 。データから概念を生成する際に、分析ワークシートを用いた。これは、各概念に対して作成されるもので、概念名、定義、概念に関連するデータである具体例(ヴァリエーション) 、浮かんだ疑問や解釈上のアイデアを記入する理論的メモの 4 つの欄から構成される(木下 2014 : 143-4) 。そして、新たな概念が見出せない状態である理論的飽和化に達した段階で(木下 2007 : 223) , 概念やカテゴリー等の関係性を結果図に記し、その関係性をストーリーラインとして言語化した(木下 2007 : 226-9) 。

また、第 5 章においては、第 3 章で明らかにされた青年期の人生ストレス経験への意味づけ方について、その生成過程を明らかにし、その意味づけ方の内容を再検証している。よって、第 5 章は、第 3 章で明らかにされた青年期の人生ストレス経験への意味づけ方の内容に関する補足的役割を担うデータであると考えられる。このように、量的及び質的データを収集することを混合的研究(Creswell & Plano Clark=2010 : 5) と呼ぶ。この中心的前提は、質的研究及び量的研究のいずれかを用いるよりも、両方を用いる方が研究課題の理解を促進すると考えられることである(Creswell & Plano Clark=2010 : 5-6) 。さらに、その 1 つのタイプのデータがもう 1 つのタイプのデータを基にした研究の支援的役割を担う場合、これを埋め込みデザイン(embedded design) と呼ぶ(Creswell & Plano Clark=2010 : 74) 。したがって、第 5 章では、埋め込みデザインによる混合研究法の視点から、上記の 2015 年度に実施した質的研究である調査 2 分析 1 の結果、並びに第 3 章において 2014 年度に実施した質問紙調査である調査 1 分析 2 の結果を併合し(Creswell & Plano Clark=2010 : 178) , 考察を行った。

第 6 章の大学生を対象とした実証研究では、第 5 章と同様に、2015 年度に実施した半構造化面接である調査 2 のデータを用いた。ここでは、第 5 章において M-GTA を基に分析したカテゴリーの中で、支援者による支援内容に関する〈支援者による効果的支援内容〉、〈

他の支援による支援の促進>というカテゴリの中での各概念の分析ワークシートの具体例の中のデータを基に、青年の支援者の種類、そして各支援者がそれぞれの青年に対して行っている支援内容を抽出し、整理した。

第4節 本研究における用語の定義と解説

1. 首尾一貫感覚 (Sense of Coherence; SOC)

ストレスfulな人生出来事や人生状況に直面しながらも、その人のもつ内的及び外的対処資源を認識し、活用して、それらに効果的な対処を行い、心身の健康を守るばかりか、人間的成長・発達の糧にすら変えて、健康でいきいきとした人生を創りあげていくことを可能にする力（山崎 2011a ; Eriksson 2017 : 91-5）と定義した。

2. 子ども時代

先行研究（木村ら 2001 ; Kroger=2005 : 30 ; 戸ヶ里 2011a : 41）に基づき、0歳から小学校卒業の12歳頃までの期間を子ども時代と定義した。

3. 子ども

上記の子ども時代にあたる乳幼児及び子どもを子どもと定義した。

4. 青年期

先行研究（戸ヶ里 2011a : 44）に基づき、上述した子ども時代以降の12歳前後から20代後半を青年期と定義した。

5. 思春期

先行研究（松本 2009 ; 戸ヶ里 2011 : 44）に基づき、青年期の中で、青年期後期以前の12歳前後から高校卒業時までを思春期と定義した。

6. 青年期後期

先行研究（宅 2010 : 12 ; 戸ヶ里 2011a : 44）に基づき、青年期の中で、高校卒業以降から20代後半を青年期後期と定義した。

7. 青年

上記の青年期に属する者を青年と定義した。青年期の中でも、上述した思春期、青年期後期の青年の区別をする必要がある場合は、適宜そのどちらの時期の青年を指すのかを明示することにした。

8. 人生出来事及び状況

先行研究 (Antonovsky=2001:35-7) に基づき、時間と場所のはっきりした出来事を人生出来事、並びに持続的かつ比較的永久的で連続的な現象を人生状況と定義した。そして、この2つを総称したものを人生出来事及び状況と定義した。

9. 人生ストレスラー

先行研究 (Antonovsky=2001:152-6) に基づき、脅威と評価され、緊張、さらにはストレスを引き起こし得る刺激をストレスラーと定義した。そして、人生において直面するストレスラーを、人生ストレスラーと定義した。人は人生出来事や状況に対して肯定的及び否定的な複合的評価を行うため (Lazarus & Folkman=1984:34) , あらゆる人生出来事及び状況は、否定的評価を付与されたストレスラーという側面も有すると考えられる。

10. ストレス

先行研究 (Antonovsky=2001:152-6) に基づき、人生ストレスラーにより生じた緊張状態が転化した人側の反応やダメージをストレスと定義した。

11. 人生ストレス経験

先行研究 (Lazarus & Folkman=1984:34 ; 宅 2005) に基づき、人生において直面したストレスラーやストレス、それらへの対処、その後の適応という経験を人生ストレス経験と定義した。

12. 子ども時代の親の子育ての質

先行研究 (小川 1991) に基づき、親が乳幼児や子どもに対し行う子育て、すなわち親の態度や行動の質を親の子育ての質と定義した。そして、上記の子ども時代の時期に行われた親の子育ての質を、子ども時代の親の子育ての質と定義した。子育ての質は人生ストレス経験という側面を有していると考えられるため (Lazarus & Folkman=1984:34) , 人生ストレス経験に含まれる。

13. 意味づけ方生成

先行研究 (Park 2010) より、人生の秩序となる信念や、目標、目的、性格、コーピングスタイルなどの包括的意味 (Park & Folkman1997 ; Park & Blumberg 2002 ; Park 2008) と、ストレスフルだと感じ得る人生出来事や状況への評価との乖離を解消するための試みとして意味づけが存在する。本研究では、意味づけを試み、意味づけ方が生成されることを、意味づけ方生成と定義した。

14. 意味づけ方生成

そして、先行研究（宅 2005 ; Park 2010）より、人生ストレス経験に対し意味づけを行った結果生成されたものを意味づけ方と定義した。

15. 支援者

意味づけ方生成を促進する支援を行う人物を支援者と定義した。先行研究より、青年の支援者には、教師（戸ヶ里 2015）やカウンセラー（Neimeyer et al. 2008 ; Park & Gutierrez 2013）、ソーシャルワーカー（狭間 2001 : 161）等のフォーマルな支援者、並びに家族（林・小林 2006 ; Moscardino et al. 2010 ; O' Connor et al. 2011 ; Blattner et al. 2013 ; Hazel et al. 2015）、友人（Moscardino et al. 2010 ; Brewer & Sparkes 2011 ; 中村ら 2011 ; 大谷・粕谷 2014 ; 戸ヶ里 2015）等のインフォーマルな支援者が含まれると考えられる。

16. 支援

上記の支援者が行った、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成促進するような行為を支援と定義した。

第1章 先行研究の検討

第1節 先行研究の収集方法

青年期，青年の首尾一貫感覚（Sense of Coherence；SOC），青年の過去への意味づけ方，意味づけ方生成に関する支援の4つのテーマについての国内及び国外の先行研究についてレビューを行った。その際，国内データベース「Cinni（国立情報学研究所NII論文情報ナビゲータ），MAGAZINEPLUS，医学中央雑誌web，メディカルオンライン，Medical Finder」，国外データベース「EBSCO Discovery Service(EDS)」，日本福祉大学図書館のOPACを使用し，それぞれ下記の手続きを踏まえ行った。

第1に，青年期に関する国内及び国外の先行研究について，日本福祉大学図書館のOPACを使用しレビューを行った。「青年期」をキーワードに検索を行った結果，416件の文献が抽出された。その中で，本研究の表題及び目的に該当する3件を選定した。また，この文献に掲載されていた文献として1件を選定した。また，国内データベース「Cinni（国立情報学研究所NII論文情報ナビゲータ），MAGAZINEPLUS，医学中央雑誌web，メディカルオンライン，Medical Finder」を使用し，「青年期 自我同一性」をキーワードに検索し，その結果検索された文献の中で，抄録のみのものを除き，最終的に本研究の表題及び目的に該当する1件を選定した。

第2に，青年のSOCについての国内及び国外の先行研究について，以下の手続きをふまえてレビューを行った。国内データベース「Cinni（国立情報学研究所NII論文情報ナビゲータ），MAGAZINEPLUS，医学中央雑誌web，メディカルオンライン，Medical Finder」を使用し，青年の首尾一貫感覚（Sense of Coherence；SOC）に関する文献について，「青年，首尾一貫感覚 or Sense of Coherence or SOC」をキーワードに検索し，その結果検索された316件をさらなる検索対象とした。そして，論文の選定については，青年の首尾一貫感覚（Sense of Coherence；SOC）に関する文献316件について，抄録のみのものを除き，最終的に本研究の表題及び目的に該当する10件を選定した。また，日本福祉大学図書館のOPACを使用して，「首尾一貫感覚 or Sense of Coherence or SOC」をキーワードに検索し，本研究の表題及び目的に該当する3件，並びにこの中で本研究の表題及び目的に該当する引用文献について選定した。また，国外の先行研究のレビューに基づく文献1件も選定した。

第3に，青年の過去への意味づけ方についての国内及び国外の先行研究について，以下の手続きをふまえてレビューを行った。国内の先行研究については，国内データベース「Cinni（国立情報学研究所NII論文情報ナビゲータ），MAGAZINEPLUS，医学中央雑誌web，メディカルオンライン，Medical Finder」を使用し，「青年，意味」をキーワードに検索し，その結果検索された6797件をさらなる検索対象にした。さらに「ストレス or 人生ストレス」をキーワードに加え，検索し，191件が該当した。このうち，抄録のみのものを除き，最終的に本研究の表題及び目的に該当する6件を選定した。

次に、国外の先行研究については、国外データベース「EBSCO Discovery Service(EDS)」を使用し、「adolescence, meaning」をキーワードに検索し、その結果検索された 49,496 件をさらなる検索対象にした。なお、この文献 49,496 件については、Park (2010) のレビュー論文に掲載されている論文(2010 年以前)よりも後に報告されている文献を抽出した。そして、論文の選定については、この文献 49,496 件について、さらに「making, stress or stressor」をキーワードに加え、検索し、30,171 件が該当した。このうち、抄録のみのもので除き、本研究の表題及び目的に該当する 27 件を選定した。また、選定した文献の中で引用されている文献の中で、本研究の表題及び目的に該当する文献についても選定した。さらに、Park (2010) のレビュー論文の内容及び本研究の表題及び目的に該当する引用文献についても選定した。

第 4 に、意味づけ方生成への支援に関する国内及び国外の先行研究について、以下の手続きをふまえレビューを行った。国内の先行研究については、国内データベース「Cinni (国立情報学研究所 NII 論文情報ナビゲータ)、MAGAZINEPLUS、医学中央雑誌 web、メディカルオンライン、Medical Finder」を使用して、「意味、支援」をキーワードに検索し、検索された 1274 件をさらなる検索対象とした。そして、この 1274 件について、さらに「青年」をキーワードに加えて検索し、抄録のみのもので除き、最終的に本研究の表題及び目的に該当する 4 件を選定した。

次に、国外の先行研究について、国外データベース「EBSCO Discovery Service(EDS)」を使用し、「stress or stressor, meaning, making, support」をキーワードに検索し、その結果検索された 4,272,794 件をさらなる検索対象にした。なお、この文献については、Park (2010) のレビュー論文に掲載されている論文(2010 年以前)よりも後に報告されている文献を抽出した。さらに、「adolescence」をキーワードに加え、検索し、4,269,589 件が該当した。このうち、抄録のみのもので除き、最終的に本研究の表題及び目的に該当する 12 件を選定した。また、日本福祉大学図書館の OPAC を使用しレビューを行い、本研究の表題及び目的に該当する 1 件並びにこの中の引用文献の中で、最終的に本研究の表題及び目的に該当するものについても選定した。

第 2 節 青年期の意味づけ方生成に関する先行研究

1. 青年期の自我同一性形成の特徴

青年期は、自我同一性を形成させていく時期である。青年期とは、12 歳前後から 20 代後半を指す(戸ヶ里 2011a : 44)。そして、この前半部分を思春期(戸ヶ里 2011a : 44)、後半部分の高校卒業以降から 20 代後半を青年期後期と呼ぶ(宅 2010 : 12 ; 戸ヶ里 2011a : 44)。

Erikson (=1973 : 111-2) は、青年期において、それまでに頼っていた不変性と連続性のすべてが問題になるとしている。自分自身の不変性・連続性とは、自分が自分であるという

一貫性をもっており、時間的連続性をもっているという感覚である（谷 2001）。そして、青年は成長と発達の中で、自身の内部の生理的な変化に直面し、自己の社会的役割を統合しようと試みるようになる。新しい連続性と普遍性の感覚を得るために、青年は子ども時代の危機の多くと改めて向き合う必要がある。このような統合は、自我同一性というかたちで行われる。自我同一性の感覚とは、内的な不変性と連続性を維持する各個人の能力、すなわち個人の自我が、他者に対する自己の意味の不変性と連続性とに一致する経験からうまれた自信のことをさす。このように確証された自己評価（self-esteem）は、確かな未来に向かって歩いていくことを自分は学びつつあるという確信、つまり、自分が理解している社会的現実の中にはっきり位置付けることができるような人格を自分は発達させつつあるという確信につながっていくとされている。

Erikson (=1973) のこのような考え方に基づき谷 (2001) は、自我同一性の感覚において重要なものとして、自分自身の斉一性（不変性のことをさす）・連続性、対他的同一性、対自的同一性、心理社会的同一性の4つを挙げている。第1に、自分自身の斉一性・連続性とは、自分が自分であるという一貫性をもっており、時間的連続性をもっているという感覚である。第2に、対他的同一性とは、他者からみられている自分自身が、本来の自分自身と一致しているという感覚である。第3に、対自的同一性とは、自分自身が目指すべきもの、望んでいるものなのを明瞭に意識されている感覚である。第4に、現実の社会の中で自分自身が意味づけられるという、自分と社会との適応的結びつきの感覚を「心理社会的同一性」とした。

Blos (=1971 : 243) は、自我を「自己防衛をめざす機能のはたす精神的過程を統合したもの」と定義し、「内的衝動を統御して、外界との間を調整する機能を果たす」と述べている。そして、思春期の自我は根本的な再構成の危険にさらされ、一時的な不適応行動や精神作用を示すとした (Blos=1971 : 251)。思春期前期、思春期後期のこのような葛藤や混乱の時期を過ぎ、思春期後期は統合の時期であると言われている。自我の統一を確立し、その内部における連続性を保つことによって、性格を形成し、資力を提供する (Blos=1971 : 184)。思春期後期には、「主観的に自分の道と感ずる最終的な決定」に達し、「これが自分だという言葉によって最もよく表される、自己の目的意識と自覚の、積極的でより自明な明快さが現れる」 (Blos=1971 : 182)。この思春期後期は高校卒業以降を指すため (宅 2010 : 12)、ここでの思春期とは、本研究での青年期に該当する。

また、山岸 (1990 : 26) は、青年期を、過去を受容し、そこから自身の生き方を形成し、実現していく中で、自我同一性を形成していく時期だとしている。

以上より、青年期の自我同一性とは、過去の危機と向き合い、それを受容する中で、それまでとは異なる新たな自分が自分であるという感覚や、目的意識、自分の生き方を形成し、周囲との関係性を築いていくことを周囲にも表現できることによってうまれる自信をさすと考えられる (Blos=1971 : 182 ; Erikson=1973 : 111-2 ; 山岸 1990 : 26)。そして、この自

我同一性の形成は、高校卒業以降から 20 代後半までの青年期後期に行われると言われてい
る (Blos=1971 : 184) .

2. ライフコースとライフストーリー

青年は、幼少期から青年期に至るまでに、時間と場所のはっきりした出来事である人生出
来事、並びに持続的かつ比較的永久的で連続的な現象である人生状況
(Antonovsky=2001:35-7) , すなわち人生出来事や状況を多く経験する。青年が経験する人
生出来事や状況はそれぞれ異なっている。このように、様々な環境の中で、出産や誕生から
年をとるまでのそれぞれの人間がたどる独自の発達、すなわち無限の変化に富んだ人生経
験をライフコースと呼ぶ (Germain & Gitterman=2008 : 27) .

Giele & Elder (=2003 : 49-52) によると、ライフコースには以下の 4 つの要素が関連し
ているという。第 1 に、時空間上の位置がある (Giele & Elder=2003 : 49) . これは歴史と
文化を示す (Giele & Elder=2003 : 52) . 個人及び社会行動は、異なる複数の水準にある社
会的並びに物理的な文脈を多層的に含んでいるが、各個人の経験は独自のものである。そし
て、個人の位置の一般的側面と独自の側面の双方が個人の経験に影響を及ぼすため、個人の
経験は時間を組み込みつつ社会的並びに個人的にパターン化されると考えられている。

第 2 に、結び合わされる人生 (社会的結合) がある (Giele & Elder=2003 : 50) . これは
社会関係を示す (Giele & Elder=2003 : 52) . 社会的行為の全ての水準 (文化的、制度的、
社会的、心理学的、そして社会生物学的) は、同じ経験を共有している他の人たちとの接触
の結果として互いに作用し、また互いに影響を与えあう。

第 3 に、人間行為力 (個人の目標志向性) がある (Giele & Elder=2003 : 50) . これは個
人の発達を示す (Giele & Elder=2003 : 52) . すべての力学的なシステムは時間の流れにお
いて継続し、個人は自らの必要を充たすために、自身の行動を環境に適応させていく。そし
て、経済的に安定すること、満足を求めること、苦痛を回避することなど、自らの必要を充
たそうとする個人や集団の動因は、積極的に意思決定を行わせ、自らの生活を組織化してい
くことにつながる。

第 4 に、人生のタイミング (戦略的適応) がある (Giele & Elder=2003 : 51) . これは年
齢、時代、コーホートの交互作用を示す (Giele & Elder=2003 : 52) . 人々も集団もその目
的を達成するため、外部の人生出来事のタイミングに反応し、行動を意図し、利用できる資
源を用いて人生出来事に対処し、行動を実行する。したがって、人生出来事のタイミングは、
個人もしくは集合体の目標を達成するための受動的または能動的な適応と考えられる。

そして、タイミングという通風口を通して、上記の個人の社会的位置、文化遺産、友人関
係やネットワーク、さらに個人的な動機づけ、これらすべてのものが収束し、個々人の具
体的な人生出来事や状況への適応として経験され (Giele & Elder=2003 : 52) , ライフコース
軌道の差異へとつながっていく。

そして、このライフコース軌道の差異は、個人的時間、社会的時間を表していると言える (Germain & Gitterman=2008 : 29) . 社会的時間とは、家族、集団、地域社会での集合的な生活問題が生じる時機を言う (Germain & Gitterman=2008 : 30) . そして、個人的時間とは、与えられた歴史的、文化的文脈の下での経験や意味づけ方、そして、ライフコース全体にわたる個人的、環境的要素の所産であり、自分で生成したライフストーリーや語りの中に反映されている (Germain & Gitterman=2008 : 29) .

ライフストーリーとは、個人が歩んできた自分の人生の中で、意味があると思っている人生出来事や状況について選択的に語られたストーリーである (桜井 2002 ; 60) . そして、このライフストーリーは、この人生出来事や状況に意味づけ方を生成していく人生行路である (Germain & Gitterman=2008 : 57) . ライフストーリーには、インタビュアーのインタビューによって引き出された語りだけでなく、たまたま発話された人生 (生活) を表象する独り言も含まれる. ライフストーリーと類似した概念にライフヒストリーがあるが、これは、ライフストーリーを含む上位概念であって、個人の人生や出来事を伝記的に編集して記録したものである (桜井 2002 : 58) . よって、ライフストーリーとライフヒストリーは類似しているが、同一の概念ではない.

ライフストーリーの中で選択的に語られる、ライフコースの中で直面する人生出来事や状況の中で特に重要なものとして、それまでの人生の中で直面した人生ストレスやストレス及びそれへの対処がある (Germain & Gitterman=2008 : 29 ; Elder & Giele=2013 : 36-7) . 人生ストレスとは、脅威と評価され、緊張、さらにはストレスを引き起こし得る刺激を意味する (Antonovsky=2001 : 152-6) . そして、ストレスとは、人生ストレスにより生じた緊張状態が転化した (Antonovsky=2001 : 152-6) 人側の反応やダメージを意味する.

人は人生出来事や状況に対して肯定的及び否定的な複合的評価を行うため (Lazarus & Folkman=1984 : 34) , あらゆる人生出来事や状況は、肯定的評価を付与されるだけでなく、否定的評価を付与された人生ストレスであり、ストレスを生じさせているという側面も有すると考えられる. つまり、あらゆる人生出来事や状況、それへの対処、並びに適応の経験は、程度の差はあるかもしれないが、人生ストレス経験という側面をもつと考えられる.

人生ストレスやストレスは、人のその後の人生に影響することが指摘されている (Elder & Giele=2013 : 36-7) . しかし、人生ストレスに直面し、ストレスを感じた場合でも、それらに対し効果的な対処を行うことができた場合、人生ストレスやストレスからライフコースへの否定的な影響を抑えることができると考えられる. よって、人生ストレスやストレスに対して効果的な対処を行っていくことが重要となる.

人生ストレスやストレスへの対処の方法には、認知的あるいは行動的な課題解決を導くための問題中心の対処、並びに情動反応を抑制するための情動中心の対処が存在する (Lazarus & Folkman=1984 : 335-6) . しかし、人生ストレスに直面時から時間を経る中

で、自身が直面した人生ストレスやストレス、その後の対処を含めた一連の経験（宅 2005）、すなわち人生ストレス経験について何度も振り返り、自身の対処の仕方などに対し後悔や自責感をもち続ける青年も存在すると考えられる。このような場合は、人生ストレス経験に対して、自分が成長できた、人生において大切なことに気付くことができた、人生の目標が見つかったなど、青年が自分なりの意味づけ方を生成することによって、人生ストレス経験を自身のライフストーリーに統合していくことも、人生ストレスやストレスへの効果的対処となり得る（Gan et al. 2013）。

そして、意味づけ方を生成することによって、青年の人間的成長が促進されると言われている（Neimeyer et al. 2008）。さらに、宅（2010：229）は、人生ストレス経験に対して、肯定的な意味づけ方を生成することは、自我同一性の形成を意味するとも述べている。よって、青年がライフコース上で直面した人生ストレス経験に対しライフストーリーを生成することは、人間的成長、特に自我同一性を形成することだと考えられる。そして、さらには、人生ストレス経験が青年のライフコース軌道に否定的な影響を及ぼすことを防ぎ得るといふ意義もあると考えられる。

Sales et al.（2013）のレビュー論文によると、青年期は、自我同一性及びウェルビーイングの形成と関連する意味づけ方生成について語る能力を発達させていく時期だとし、青年期の中で社会的に発達することで、自己内省や視点の獲得ができ、認知的スキルが高まることにより、一貫しており、複雑な因果関係の語りができるようになることが指摘されている。また、実証研究の中で（松本 2009；中村ら 2011）、青年期の中でも、高校卒業後から20代後半の青年期後期（宅 2010：12；戸ヶ里 2011a：44）に意味づけ方が生成されることが報告されている。よって、青年期の中でも特に青年期後期にあたる青年は、人生ストレス経験に対し意味づけ方を生成し、それを周囲に語るできるようになっていると考えられる。これは、意味づけ方生成と関連する自我同一性の形成が青年期後期に行われること（Blös=1971：184）とも符合している。

第3節 青年期のSOCに関する先行研究

1. レジリエンスに関する先行研究

人生ストレスやストレスに対し効果的に対処していくことに関連する概念には、様々なものが存在する。代表的な概念の1つに、レジリエンスがある。レジリエンスは個人の内的な性格特性及び、個人のおかれた環境への適応プロセス全体も含めて包括的にとらえられた概念である（高辻 2002）。そして、レジリエンスには、一貫した定義が形成されていない。しかし、様々な定義の中には、主に以下のような共通点がある。第1に、レジリエンスが逆境にも関わらず肯定的な適応をすることを意味する点である（Luthar et al. 2000）。第2に、レジリエンスがストレスに対して耐えたり、傷つかない強さではなく、傷つきながらも対処していく性質を意味する点である（小塩ら 2002）。第3に、レジリエンス

は、適応の過程 (Luthar et al. 2000), 能力 (Cicchetti et al. 1993), 結果 (Rutter 1987) を意味し, 研究者によって焦点を当てる側面が異なる点である。

レジリエンスを構成する要因についても様々なものが含まれており, 研究者によって焦点を当てる側面が異なる。すなわち, 個人要因のみを挙げるもの (Rutter 1985), 個人要因を生得的, 獲得的なものに分けるもの (小花和 2004 : 11 ; 平野 2010), 環境要因も含めるもの (Grotberg 1995) など様々である。レジリエンスを測定する尺度についても, 心理要因だけを含むもの (小塩ら 2002 ; 石毛・無藤 2005), 環境要因をも含めるもの (Hiew et al. 2000) などがある。この個人要因とは, 個人の内的及び個人的強さ, 個人によって獲得される社会的及び対人関係的能力であり, 環境要因とは環境によって与えられる外的サポート及び資源である (Grotberg 1995 ; 小花和 2004 : 11)。

しかし, このレジリエンスには主に以下の2点の問題点が存在すると考えられる。1つ目は, レジリエンスには様々な関連要因が考えられるために, レジリエンスという概念が意味する特徴が曖昧になっている点である。2つ目は, レジリエンスが意味づけ方生成に特に焦点を当てた概念ではないという点である。先述したように, 青年期において青年は, 人生ストレス経験に対し自分なりの肯定的な意味づけ方を生成することによって, これを自身のライフストーリーに統合していくことが求められている (Erikson=1973 : 111 ; 宅 2005 ; Neimeyer et al. 2008) 。よって, 人生ストレスやストレスへの効果的な対処方法として, 意味づけ方を生成することに焦点をあてた概念が重要だと考えられる。レジリエンスにおいても, 自己と人生の肯定 (荒木 2002) という意味づけ方と関連する要因が指摘されている。しかし, 研究者によって重視する側面が異なっているため, レジリエンスが特に意味づけ方を生成することに重きを置いた概念とは言えない。

2. 青年期の SOC に関する先行研究

そして, 人生ストレスやストレスへの効果的な対処に関する概念の中で, 人生ストレスに対する自分なりの意味づけ方を見出す感覚を重視したものの一つに, 首尾一貫感覚 (sense of coherence; SOC) がある (Antonovsky 1979 : 183 ; Antonovsky=2001 : 19) 。SOC はストレス対処力 (山崎 2011 : 3), 生き抜く力 (吉井 2007 : 43), ストレス対処・健康生成力概念 (Mittelmark et al. 2017 : 71) とも言われている。SOC とは, Antonovsky による健康生成論と SOC 概念の提唱以降の国内外における 3000 編以上の実証研究に基づけば, ストレスフルな人生出来事や人生状況に直面しながらも, その人のもつ内的及び外的対処資源を認識し, 活用して, それらに効果的な対処を行い, 心身の健康を守るばかりか, 人間的成長・発達の糧にすら変えて, 健康でいきいきとした人生を創りあげていくことを可能にする力 (山崎 2011b ; Eriksson 2017 : 91-5) と再定義することができる。

そして, SOC は, 健康生成論に基づいた概念である。健康生成論とは, 以下のような特徴をもつ (Antonovsky=2001 : 16-7) 。第1に, 人々を健康か疾病かのどちらかに振り分ける

のではなく、多次元的な健康—健康破綻の連続体上のどこにいるのかという見方をする。第2に、ある疾病の原因にのみ着目するのではなく、病気を含めたひとりの人間の全体的なストーリー（身の上）を探る。第3に、何によって疾病になったのか、すなわち人生ストレスに着目する代わりに、健康—健康破綻の連続体上において、自分の位置を少なくとも維持するか、あるいは健康の極側に移動させることにかかわる健康要因を問う。第4に、人生ストレスはあまねく存在するものであり、人生ストレスの影響は必ずしも病理的なものではなく、人生ストレスの特性や緊張の首尾よい解決によっては健康的なものにも十分なりうるとみなされる。第5に、環境への生体の積極的な適応を促進するとみなされるものを探ることが重視されている。第6に、疾病生成論的研究で見出される逸脱ケースに常に着目することによって、疾病生成論的研究から得られるデータ以上のものが得られると考えられている。

そして、人を健康の極側に移動させる健康要因の1つとして、SOCが存在する(Antonovsky=2001:16)。SOCは、①環境の刺激を理解できる感覚である把握可能感、②刺激への対処に十分な資源を自由に使える感覚である処理可能感、③生きていくことで生じる問題にはかかわる価値があると思える感覚である有意味感の3つの要素から成る(Antonovsky=2001:21-3)。人生ストレス経験に対し自分なりの意味づけ方を生成する有意味感が基となり、人生ストレス経験を理解する把握可能感、内的及び外的対処資源を用いた対処方法が分かり、対処できるという処理可能感につながると考えられている(Antonovsky=2001:26-7)。

青年期のSOCに関する実証研究においても、有意味感の重要性が報告されている。大学生を対象とした量的研究においては、有意味感が不機嫌・怒り感情、抑うつ・不安感情、身体的反応等のストレス反応を低減することが明らかにされている(藤里・小玉 2009)。また、大学生を対象とした量的研究において、主観的健康観と有意味感との正の関連が報告されている(Nishiyama et al. 2016)。さらに、大学生を対象とした量的研究において、有意味感が人生における目的を高め、処理可能感が自律性を高めることが示された一方、把握可能感が強いほど、抑うつ・不安を感じにくく、人生に対して満足感を感じやすいが、新たな経験には開かれにくいこと(人格的成長と負の関連)が明らかになった(藤里 2015)。

SOCは、その人の個人的心理的側面だけでなく、社会的側面にも目を向け、内的外的両方の人生ストレスと対処資源に着目し、働きかけることを通して生まれ、向上するとされる点で、社会学的概念であり(Eriksson 2017:91-5)、エンパワメントやストレングスなどソーシャルワーカーの支援方法の枠組みとも類似する点で(山崎 2011a:9)、社会福祉学におけるキーワードと重なる概念であると言える。

SOCは、生きていく中で経験する良質な人生経験によって形成されると言われている。良質な人生経験とは、人生ストレスに直面し、後述する対処資源であるGRRsを動員し、ストレスにつながり得る緊張処理を成功させ、健康な状態にいたるという流れに伴う経験を指す(戸ヶ里 2008:42)。この良質な人生経験には、①共有された価値観やルールや習

慣に基づく一貫性, ②負荷が過小でも過大でもないバランスのとれた負荷, ③好ましい結果が得られたことに自分自身も参加・参与したという結果形成への参加の 3 つがある (Antonovsky=2001 : 24 ; 山崎 2008 : 21) . これらの人生経験はそれぞれ, 把握可能感, 処理可能感, 有意味感を形成すると言われている (Antonovsky=2001 : 24) . また, 乳幼児や子どもの場合, 家族から大切だと思われている感覚, 困った時相談できる家族がいるという感覚等からなる情緒的親密性 (emotional closeness) という人生経験も指摘されている (Sagy & Antonovsky 2000) .

SOC の高い人は, 対処資源である汎抵抗資源 (Generalized Resistance Resources; GRRs) を多く有し (山崎 2008 : 19) , この GRRs を動員して (Antonovsky 1979 : 123 ; 山崎 2008 : 20-1) , 人生ストレスやストレスへの効果的対処を行うことができる (山崎 2008 : 15) . そして, GRRs が失われることは汎抵抗欠損 (General Resistance Deficits; GRD) と呼ばれ, この状態こそが人生ストレスであると考えられている (戸ヶ里 2008a : 42) .

Idan et al. (2017 : 57-65) は, GRRs には個人, 家族, コミュニティの生態学的レベルがあるとし, 個人レベルの GRRs には, 情緒的親密さと愛着関係, 個人の性格や資源, 個人のソーシャルサポート, 遺伝的要因の 4 つがあるとされている. また, 家族レベルの GRRs には, 親の資源, 家族の属性的資源, 家族の雰囲気の原因の 3 つがあるとされている. コミュニティレベルの GRRs には, 学校環境, コミュニティがあるとされている.

そして, 青年を対象とした実証研究の中で, GRRs に含まれるサポートと SOC との正の関連が報告されている. 13 歳から 18 歳の青年を対象とした量的研究において, 同級生や教師からのサポートは, 学校関連のストレスを低減させ, SOC を形成し, さらに SOC が健康を高めることが明らかにされている (Gracia-Moya et al. 2013) . また, 大学生を対象とした量的研究においても, SOC 形成にはソーシャルサポートが重要となることが明らかにされている (Kase et al. 2016) .

3. 人生ストレス経験への意味づけ方と青年期の SOC 形成との関連

そして, 人生ストレス経験に対して意味づけを行っていくことは, 人に健康をもたらし得る, 人生ストレスやストレスへの効果的対処であり, SOC 形成要因である良質な人生経験であると言える (戸ヶ里 2008a : 42) . そして, 意味づけの結果生成された意味づけ方は, 対処資源である GRRs への気付きや形成を意味すると考えられる. なぜならば, 意味づけ方には, アイデンティティの変化 (Neimeyer & Anderson 2002 : 47-51 ; Gillies & Neimeyer 2006 ; Park 2010) , 人生ストレスへの対処など行動全般の指針となる人生の目的の明確化 (Tedeschi & Calhoun 1996 ; McMillen & Fisher 1998 ; Holland et al. 2010 ; Park 2010 ; Martinez et al. 2012 ; Gan et al. 2013 ; Hibbert 2013) , 人間関係の再認識 (Tedeschi & Calhoun 1996 ; McMillen & Fisher 1998 ; 坂口 2002 ; Kunkel et al. 2014) などがあり, これらはそれぞれ先述した GRRs, すなわち性格, 資源等への気付き, 並びにその新たな

形成と類似していると考えられるからである。そして、GRRs は対処資源として機能し、SOC を形成する要因だと言われている (Antonovsky 1979 : 123 ; 山崎 2008a : 21) 。 よって、人生ストレス経験に対する意味づけ方についても、SOC 形成を促進していくと考えられる (戸ヶ里 2008b : 61-2) 。

特に、青年期はこの SOC を形成していく時期だと言われている (山崎 2011b) 。 そして、Antonovsky (=2001 : 118) は、自我同一性を形成する中で青年期の SOC 形成がされると考えている。この青年期の自我同一性形成は、人生ストレス経験への意味づけ方生成と関連があることが指摘されていた (宅 2010 : 229) 。 したがって、青年期の SOC 形成は、人生ストレス経験に対し意味づけ方を生成し、自我同一性を形成していく中で、促進されていくと言える。

一方、人生ストレス経験に直面する時点で既に SOC の高い人は、人生ストレス経験に対し意味づけ方を生成できるため (戸ヶ里 2011b : 118) ， 青年が有する SOC が高い程、人生ストレス経験に対する肯定的な意味づけ方生成を促進していくという関連についても存在すると考えられる。よって、青年期の SOC と人生ストレス経験に対する意味づけ方との間には双方向の関連が想定される。しかし、SOC は抽象的概念であることから、SOC そのものに働きかけることは難しい。よって、本人と他者との間で共有できる間主観的な要因によって SOC を形成していくことが必要である。そして、人生ストレス経験に対する意味づけ方は、周囲の支援などを受けながら (原 2012) ， 自分自身で生成していくことが可能な要因である。よって、人生ストレス経験に対する意味づけ方が青年期の SOC を形成していくという関連を明らかにすることは、今後これらへの意味づけ方を生成するための支援者による具体的支援方法の構築につながるため重要である。

しかし、SOC 形成要因に関連する先行研究の多くは成人を対象としたものであり (笹原 2015) ， 青年期の SOC 形成に直接焦点を当てた研究は少ない。よって、青年期の SOC 形成と関連する要因として、人生ストレス経験への意味づけ方に直接的に注目し、両者の関連を直接みた研究は殆どないと言える。これらを明らかにすることによって、青年が SOC を形成し、人生ストレスやストレス状況下において、苦しみを抱えながらも、それを成長の糧にし、自分らしく、いきいきと生きていくために重要な要因が示唆されることが考えられる。また、人生ストレスに直面することは自身にとって否定的影響だけでなく、自身の SOC 形成とも関連していくことを示すことは、人生ストレスやストレスに苦しむ青年にとって、苦しみの中を生き抜く希望にもつながり得ると考えられる。さらに、青年を支援する支援者によって、青年期の SOC を形成するためには、どのような意味づけ方生成を支援していけば良いのかということを示すという意義もあると考えられる。

4. 青年期の SOC 形成と関連する子育ての質への意味づけ方に関する先行研究

青年期の SOC 形成において、重要な人生ストレス経験として、以下の 2 つの人生ストレ

ス経験が想定される。第1に、青年期以前の幼少期や子どもの頃の親が乳幼児や子どもに対し行う子育て、すなわち親の態度や行動（小川1991）が存在する。この親の子育てはGRRsの源泉に存在し（Antonovsky 1979：123）、良質な人生経験を提供することで、彼らのSOCを形成していくと考えられている（Antonovsky=2001：109-15）。また、親の子育てについても、肯定的及び否定的な複合的評価がなされると想定されるため（Lazarus & Folkman=1984：34）、人生ストレス経験として位置づける。

この乳幼児や子どもの年齢として、0歳から12歳（木村ら 2001；戸ヶ里 2011a：41）が想定される。Kroger（=2005：30）は、青年期前期の思春期、すなわち12歳前後からの時期（戸ヶ里 2011a：44）以前を、子ども時代と表現している。よって、本研究においても、0歳から12歳の時期を子ども時代と呼び、この時期にあたる者を子どもと呼ぶ。

先行研究では、虐待など良質ではない子育てと適応との負の関連が報告されることが多かった。しかし、健康生成論に基づき、どのような良質な子育てを行っていくことが健康要因となり、青年の健康を促進するのかという視点に立った先行研究はあまりない。そして、Antonovsky（=2001：109-15）は、このような視点に立ち、子ども時代の親の子育ての質（以下、子育ての質）と子どもの良質な人生経験及びSOCとの関連について以下のように示唆している。第1に、子どもからの働きかけに対し彼らが望んだ結果を与えることで、子どもは結果形成への参加の人生経験をでき、有意味感が高められる。この際、親が子どもに対し大事に思っていることを伝え、子どもにとってその経験が肯定的な感情の中に深くとどめられているかどうか重要である。第2に、親が子どものやりたいことに対し、無視や拒否をあまりせず、激励やそれはだめだがこれは良いというような方向づけをすること、親が子どもの発達レベル以上に高い要求をせず子どもに選択させることで、子どもはバランスのとれた負荷の人生経験ができ、処理可能感が高められる。第3に、子どもは時間の経過とともに自分の世界が絶えず変化しているのではなく、頼れるものだという確信をもつ、すなわち一貫性の人生経験をすることで、親からの応答は慣れた日常的なものとなり、把握可能感が高まると言われている。

そして、先行研究における理論的示唆（戸ヶ里 2008b：61-2；戸ヶ里 2011b：118）より、青年が子ども時代の親の子育ての質について振り返り、その肯定的な側面に着目し、評価すること、すなわち意味づけ方を生成すること（Park 2010）も青年期のSOC形成と関連していると考えられる。実証研究では、子ども時代の親からの支援（木村ら 2001）、良好な家族関係（Volanen et al. 2004）、親からの愛情（Garcia-Moya et al. 2012）という青年の意味づけ方と青年期のSOCとの正の関連が実証されている。

しかし、先行研究では既存の尺度（木村ら 2001；Garcia-Moya et al. 2012）や独自に作成した項目（Volanen et al. 2004）を用いており、青年期のSOCと関連する、子育ての質への意味づけ方を包括的に測定評価する尺度は殆どない。このような尺度を開発することによって、青年の成長のために重要な子育ての質への意味づけ方が明らかになる。さらに、

支援者が青年に対して行う効果的支援方法を考える際、このような尺度は青年の意味づけ方の状態を把握するアセスメント機能をもつと考えられる。

5. 青年期における人生ストレス経験への意味づけ方と SOC との関連性に関する先行研究

第 2 に、青年期の SOC 形成において重要な人生ストレス経験への意味づけ方として、青年期に直面した人生ストレス経験への意味づけ方がある。青年期は、さまざまな人生ストレスに直面し、ストレスを感じる事が想定されており (Blos=1971 : 270 ; Antonovsky=2001 : 117 ; 宅 2010 : 3) , これらの人生ストレスやストレスからの影響を受けやすい時期である (山下 2010 : 200) . そして、青年はこの青年期の人生ストレス経験に対し、意味づけ方を生成することが明らかになっている (Tedeschi & Calhoun 1996 ; Holland et al. 2010 ; 宅 2010) .

さらに、先行研究 (戸ヶ里 2008b : 61-2 ; 戸ヶ里 2011b : 118) より、青年期の人生ストレス経験に対し意味づけ方を生成することと青年期の SOC 形成には正の関連があると示唆されている。実証研究においても、Darling et al. (2007) が、女子大学生がストレスに対し、意味づけ方を生成することを含む様々な対処は、情動的健康、身体的健康、QOL を媒介して SOC に正の影響を及ぼしていることを明らかにした。

青年を対象とした、意味づけ方に関する実証研究として以下のようなものがある。Park (1998) は、ストレスを経験する中での成長をストレス関連成長 (Stress-Related Growth) と定義づけ、大学生を対象とした 1 因子からなるストレス関連成長尺度を作成した。

Tedeschi & Calhoun (1996) は大学生を対象とした量的研究の中で、青年期中の過去 5 年間に直面した人生ストレスに対して、①他者とのつながり (relating to others) , ②新たな可能性 (new possibilities) , ③人間的強さ (personal strength) , ④心の変化 (spiritual change) , ⑤人生の再認識 (appreciation of life) の 5 因子の心的外傷後成長 (posttraumatic Growth) が認められることを明らかにしている。

McMillen & Fisher (1998) は、大学生を対象とした量的研究の中で、過去 5 年以内に経験した人生ストレスに関する有益性発見尺度を開発し、①高められたセルフエフィカシー (enhanced self-efficacy) , ②増加したコミュニティへの親密さ (increased community closeness) , ③増加したスピリチュアリティ (increased spirituality) , ④増加した思いやり (increased compassion) , ⑤増加した他者への信頼 (increased faith in people) , ⑥ライフスタイルの変化 (lifestyle changes) , ⑦高まった家族への親密さ (enhanced family closeness) , ⑧物質的に得たもの (material gain) を重要な要因として挙げている。

宅 (2005) は、高校生を対象とした量的研究において、時期を特定しない、自分自身、家庭/家族、学校/勉強、人間関係の 4 領域の人生ストレス経験ごとに、その人生ストレス経験への意味づけ方が自己成長感をもたらす違いを明らかにしている。すなわち、自分自身に

関する経験では、肯定的な側面に焦点を当て、出来事のもつメッセージをキャッチすることが成長感をもたらすこと、家庭／家族に関する経験では、出来事を経験した自己に対する評価及び出来事のもつメッセージをキャッチすることが成長感をもたらすこと、学校／勉強に関する経験では、出来事を経験した自己に対する評価が成長感をもたらすこと、人間関係に関する経験では、肯定的な側面に焦点を当て、出来事を経験した自己に対する評価、出来事のもつメッセージをキャッチすることが成長感をもたらすことが明らかにされている。

Holland et al. (2010) は、大学生を対象とした量的研究において、過去2年以内の青年期のストレスフルな人生経験の統合尺度 (The Integration of Stressful Life Experiences Scale) を開発し、①世界に根差すこと (footing in the world) , ②わかりやすさ (comprehensibility) という2因子が報告されている。世界に根差すこととは、人生ストレスに直面した後世界に方向づけられたあるいは方向づけられていないと感じる程度である。また、わかりやすさとは、人生経験を理解する方法が分かる、あるいは見つけられる程度である。

Gan et al. (2013) は、平均年齢約18歳の青年668名を対象とした量的研究において、過去1年以内に直面した人生ストレスへの意味づけ方に焦点を当てた対処を測定する尺度を開発し、①状況的信念の変化、②包括的信念の変化、③目標の変化、④意味づけ、⑤長期間の防衛的戦略、⑥資源の理性的な使用、⑦受容、⑧ヒューリスティックな思考の8次元を明らかにしている。

Kunkel et al. (2014) は206名の大学生を対象とした量的研究を用い、時期を特定しない人生ストレスへの肯定的な意味づけ方として、意味理解、受容あるいは理解なく諦めること、ポジティブな再評価を通して有益性を再認識すること、役割と人間関係の再編成の4つを明らかにした。

また、青年以外の者を対象とし、その意味づけ方を明らかにする実証研究が多数みられる。坂口 (2002) は、死別経験者を対象とした有益性発見尺度を開発し、いのちの再認識、自己の成長、人間関係の再認識という3因子を明らかにしている。

Chiba et al. (2014) は、精神疾患を抱える人々を対象として、意味づけ方に含まれる有益性発見を測定する尺度を開発し、①人間関係での成長／人間関係についての気づき、②人間的な成長／人生における価値の変化、③精神疾患への関心を育むこと、理解すること、④健康に関連した行動的变化／自己管理、⑤社会における新しい役割を見つけること、⑥信心深さが育まれること等を重要な要因として挙げている。

木村・山崎 (2014) は、障害児の親を対象とした量的研究の中で、1因子からなる Perceived Positive Change (PPC) 尺度を開発した。これは、知覚された肯定的変化を意味し、肯定的意味づけ方に含まれると考えられる。この尺度の項目には、精神的な強さや家族や友人との関係等の肯定的変化に関するものが含まれていた。

Gillies et al. (2014) は、162名の成人の死別経験者を対象とした質的研究において、

30のカテゴリーからなる意味づけ方を抽出し、グリーフセラピー (grief therapy) の役立つコードブックを作成した。その中では、成長や受容、視野の広がりなど、肯定的な意味づけ方がある一方で、後悔や否定的感情、理解できなさ、自分を見失うことなど否定的な意味づけ方も報告されていた。

Gillies et al. (2015) は、死別経験に関する意味づけ方を測定する尺度を開発し、The Grief and Meaning Reconstruction Inventory (GMRI) を作成し、永続的な絆 (continuing bonds)、個人的成長 (personal growth)、安心感 (sense of peace)、虚しさ (emptiness) と無意味感 (meaninglessness)、価値づけられた人生 (valuing life) の5つの因子が抽出された。

上述したように、青年による人生ストレス経験への意味づけ方を明らかにするために様々な実証研究が行われている。しかし、これらの先行研究には、主に以下の3点の問題点が存在する。1つ目は、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方を明らかにした研究が国内では少ない点である。先述したように、青年期は様々な人生ストレス経験に直面し (Blos=1971 : 270 ; Antonovsky=2001 : 117 ; 宅 2010) 、その人生ストレス経験からの影響を受けやすい時期であるため (山下 2010 : 200) 、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方に焦点を当てる必要がある。しかし、国外では青年期の人生ストレス経験への意味づけ方を明らかにした研究がみられるが (Tedeschi & Calhoun 1996 ; McMillen & Fisher 1998 ; Holland et al. 2010 ; Gan et al. 2013) 、国内では殆どない。

先述したように、人生ストレス経験に意味づけ方を生成していくことは、青年期の自我同一性の形成過程とも解釈できると指摘されている (宅 2010 : 229) 。そして、上記の実証研究で指摘されている人生ストレス経験に対する青年による意味づけ方は、この自我同一性形成と類似していると考えられるものが多数みられる。例えば、自我同一性の中の過去と向き合い、受容すること (Holland et al. 2010 ; Gan et al. 2013 ; Kunkel et al. 2014) 、自分が自分であるという感覚の形成 (Tedeschi & Calhoun 1996 ; McMillen & Fisher 1998 ; Kunkel et al. 2014) 、目的意識や自分の生き方の形成 (Tedeschi & Calhoun 1996 ; McMillen & Fisher 1998 ; Holland et al. 2010 ; Gan et al. 2013) 、周囲との関係性の形成 (Tedeschi & Calhoun 1996 ; McMillen & Fisher ; 1998 ; Kunkel et al. 2014) が指摘されている。よって、青年が影響をより受けやすい、青年期の人生ストレス経験に対する意味づけ方を明らかにすることは、自我同一性形成の過程を明らかにしていくという意義もあると想定される。また、後述する支援者が青年の意味づけ方生成を支援する際、青年の意味づけ方の度合いを把握するアセスメント機能をもつという意義もあると考えられる。

この際、青年期後期にあたる青年を対象とする必要があると考えられる。前述したように、特に青年期に入るにつれて、人生ストレス経験への意味づけ方が生成され、それを伝えることが可能になっていくと想定される (Sales et al. 2013) 。そして、実証研究の中で、青年期の中でも、高校卒業後から20代後半の青年期後期 (松本 2009 ; 中村ら 2011) に意味

づけ方が生成されることが報告されているからである。

また、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方は、その経験の深刻度と関連していることが想定される。宅（2010：212）は、人生ストレス経験の深刻度が青年にとって低すぎたり、高すぎる場合、意味づけ方が生成され辛いことを理論的に示唆している。また、実証研究においても上記のことを示す結果がみられる。Park et al.（1996）は、大学生を対象とした量的研究の中で、肯定的意味づけ方であるストレス関連成長の予測変数は、人生ストレス経験の深刻度であることを明らかにしている。

さらに、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方は、その経験の種類によっても異なることが想定される。宅（2005）は、人生ストレス経験を自分自身のこと、家庭／家族のこと、学校／勉強のこと、人間関係のことに分類し、生成される意味づけ方が異なることを明らかにしている。よって、青年期の人生ストレス経験の種類によって、生成される意味づけ方が異なっていることが想定される。

6. 子育ての質への意味づけ方と青年期の人生ストレス経験への意味づけ方間の関連

さらに、先述した2種類の人生ストレス経験への意味づけ方間の関連については、子育ての質への肯定的な意味づけ方を生成する青年ほど、青年期の人生ストレス経験に対し肯定的な意味づけ方を生成すると想定される。子育ての質はGRRsの源泉にあると言われている（Antonovsky=1979：123；山崎 2008：20）。よって、この子育ての質の肯定的側面に基づき生成された意味づけ方は、上述したGRRsの気づきや形成に相当する、青年期の人生ストレス経験への肯定的意味づけ方と正の関連を有していると考えられるからである。しかし、先述した人生ストレス経験への意味づけ方と青年期のSOC間の関連だけでなく、この人生ストレス経験の意味づけ方間の関連についても十分に検証されていない。

第4節 人生ストレス経験への意味づけ方及びその生成過程に関する先行研究

1. 人生ストレス経験への意味づけ方及びその生成過程に関する理論研究

また、人生ストレス経験への意味づけ方及びその生成過程に関して様々な理論研究についても行われてきた。以下でこれらについてみていく。

従来、喪失に関する意味づけ方生成に関する研究が多く行われており、死の5段階説（Kubler-Ross=1971：14-64）など様々な段階説が提唱されてきていた。しかし、エビデンスがほとんどないなどの批判（Neimeyer & Harris 2016）から新たに構築された代表的な理論の一つとして、意味再構成理論（Meaning Reconstruction Theory）がある（Neimeyer & Anderson 2002：47-51；Gillies & Neimeyer 2006）。この理論では、人は、未来に関する見方、世界観などからなる世界を理解するために役立つ意味構造（meaning structure）を有しており、喪失を喪失前の意味構造に一致させると苦痛は低くなるが、一致させることができないと苦痛が高くなる。そして、意味探求への従事（engages a searching for meaning）

が生じ、意味づけを経て、喪失前の意味構造が見直され、意味づけ方が作り直される (Gillies & Neimeyer 2006) .

意味づけの結果生成された意味づけ方の中には、人生ストレス経験の原因を理解する意味理解 (sense making) , 人生ストレス経験から有益性を発見する有益性発見 (benefit finding) , 新しいアイデンティティを作り上げていくアイデンティティの変化 (identity change) に加え (Neimeyer & Anderson 2002 : 47-51 ; Gillies & Neimeyer 2006) , 目標や人間関係のある側面に価値を見出し、今後追求することを決める生きる意味 (life significance) , 生きる意味を追求する枠組みの人生の目的 (purpose in life) があるとされている (Hibberd 2013) これらの各要素間には関連があると考えられている (Hibbert 2013) . そして、この意味づけ方は、意味づけを行う中で変化していくこととされている (Neimeyer & Anderson 2002 : 49) .

さらに、喪失だけではなく、様々な人生ストレス経験への意味づけ方生成に関する理論として、意味づけモデル (Meaning-Making Model) も提唱されている (Park & Folkman 1997 ; Park 2010) . ここでは、包括的意味 (global meaning) と状況的意味 (situational meaning) の2種類の意味が重要であると考えられている (Park 2010) .

包括的意味とは、①秩序となる信念、すなわち世界や自己、世界における自己についての信念、②目標による目的、③性格、④コーピングスタイル (Park & Folkman 1997 ; Park & Blumberg 2002 ; Park 2008) がある。秩序となる信念を測定する尺度として、The World Assumptions Scale (WAS) (Janoff-Bulman 1989) が用いられることが多い (Park & Blumberg 2002) . これは、①人々への博愛、②世界への博愛、③自己価値、④自己統制可能感、⑤統制可能感、⑥無作為、⑦運、⑧正義という8つの一般的な信念の領域を測定する。また、性格には、neuroticism (不安や抑うつのようなネガティブな影響を経験すること) , constructive thinking (適応的な認知的、行動的な問題解決アプローチを反動的に使うこと) , optimism (ポジティブな結果について一般的な期待をもつこと) , mastery (自分の人生をコントロールできると知覚している程度) , religiosity (主な動機として、宗教を持っている程度、宗教について他の目的を得るために有用だとみなしている程度) が想定されている (Park & Blumberg 2002) . また、コーピングスタイルには、積極的なコーピング (active coping) , 計画 (planning) , 肯定的な再評価 (positive reappraisal) , 情緒的なソーシャルサポート (emotional social support) , 行動的離脱 (behavioral disengagement) , 受容 (acceptance) , 宗教的コーピング (religious coping) , 否認 (denial) , 気晴らし (self-distraction) , 気持ちの発散 (venting) が想定されている (Park & Blumberg 2002) .

状況的意味とは、人生ストレスに直面する中での意味のことである。人は特に人生ストレスに直面した時、脅威の程度などについての意味の評価を行う。この評価と、既存の包括的意味とが一致しない場合苦悩が生じる。この意味の評価と包括的意味との乖離を

解消するために意味づけ (meaning making) が引き起こされる。この意味づけの過程では、①自動的／意図的、②同化／調節、③一貫性の探求／重要性の探求、④認知的処理／情動的処理が想定される。

第1に、自動的過程とは、自動的で無意識的な過程を意味し、意図的過程とは、努力を要するコーピング活動を意味する。第2に、同化とは、既存の包括的意味とより一致するように、状況的意味を変えることを意味し、調節とは既存の包括的意味を変えることを意味する。第3に、一貫性の探求とは、出来事を理解しようとする、あるいは受け入れられるルールあるいは理論のシステムにあわせる試みを意味し、重要性の探求とは出来事の価値を決定することを意味する。第4に、認知的処理とは、人生ストレスの後に起こる、本質的にはより認知的な、信念の再接続を強調した情報処理を意味し、情動的処置とは感情の経験や探索を強調した、より情緒的な情報処理を意味する。そして、これらの意味づけには何度も繰り返し考える反芻が想定されている (Park & Folkman 1997)。

そして、意味づけによって生成されたものが、意味づけ方 (meanings made) である。この意味づけ方は、分かるという感覚 (sense of having “made sense”), 受容 (acceptance), 再原因帰属や因果関係の理解 (re-attributions/causal understanding), 成長や肯定的な生活の変化 (perceptions of growth or positive life changes), アイデンティティの変化 (changed identity), 人生ストレスの意味の再評価 (reappraised meaning of the stressors), 包括的信念の変化 (changed global beliefs), 包括的目標の変化 (changed global goals), 人生における意味の回復あるいは変化 (restored/changed sense of meaning in life) からなる (Park 2010)。そして、この意味づけ方によって、包括的意味が新たに形成されていく (Park 2010)。

これら2つの理論は、意味づけ (meaning making) 研究として包括して考えられるようになってきている (Holland et al. 2014)。意味づけ研究の2つの理論では、異なる点もみられるが、人生ストレスに直面してから意味づけ方が生成されるまでの過程が示されており、意味づけを通して、状況的意味と包括的意味の間の差異を減らすことによって、より良い適応をもたらすと考えられている点で、共通している (Park 2008)。これらの意味づけ研究の理論では、意味づけ方生成の過程並びに意味づけ方の内容が詳細に整理されており、非常に有益な知見を与える理論であると考えられる。

上記の理論研究を基にした実証研究もみられる。大学生 130 名を対象とした量的研究においては、人生ストレスが包括的意味である信念や目標を侵害する程度が大きい程、PTSD になりやすいことを明らかにし (Park et al. 2012), 意味づけモデルを支持する結果がみられた。一方、Park & Gutierrez (2013) は、189 名の大学生を対象とした量的研究において、自尊感情に関する信念という包括的意味と、人生ストレスについて目標を侵害するものと評価する状況的意味は、それぞれ独立してウェルビーイングと関連していることを実証しているおり、意味づけモデルとは異なる結果が示されている。

しかし、この意味づけ研究の理論での知見 (Park & Folkman 1997 ; Neimeyer & Anderson 2002 ; Gillies & Neimeyer 2006 ; Park 2010 ; Hibbert 2013) をふまえ、人生ストレス経験への意味づけ方の内容を明らかにする実証研究はあまりない。特に、先述したように、青年期は様々な人生ストレス経験に直面し (Blos=1971 : 270 ; Antonovsky=2001 : 117 ; 宅 2010) , その人生ストレス経験からの影響を受けやすい時期であるため (山下 2010 : 200) , 青年期の人生ストレス経験への意味づけ方を明らかにしていく必要がある。

2. 人生ストレス経験への意味づけ方生成過程に関する実証研究

また、意味づけ方を生成していく過程に関する実証研究についても、様々な視点から国内外で行われてきている。以下で説明をしていく。

第1に、意味づけや反芻と抑うつ、自尊感情、ウェルビーイングなど適応に関連する変数との関連が実証研究や実証研究のレビューの中で報告されている。Park et al. (1996)は、ストレス関連成長の予測変数として、肯定的な再意味づけ等を明らかにしている。また、Linley & Joseph (2004) のレビュー論文では、反芻は、すべて成長という肯定的意味づけ方と正の相関があることが報告されており、反芻は外傷体験後の崩れた世界観を立て直すために必要な認知的処理を示すと指摘されている。さらに、この反芻の種類として意図的反芻と自動的反芻があるとし、積極的に行われる意図的反芻は意味づけ方の生成を促進する要因であると考えられている (上條・湯川 2016a) 。そして、大学生を対象とした量的研究において、自動的反芻はストレスや抑うつを高めるが、同時に意味づけ方を導く適応的な側面ももつことが示されている (上條・湯川 2016a) 。

一方、Kiang & Fulgni (2010) は、579名の青年を対象とした量的研究の中で、意味づけ方を探すという意味づけは、自尊感情やウェルビーイングと負の関連を示すことを明らかにしている。また、Sales et al. (2013) は、15歳～21歳の女性の青年を対象とした量的研究において、意味づけに関する語りと抑うつ症状に正の関連があることが示された。

第2に、意味づけ方と適応と関連する変数との関連についても様々な研究がなされている。Currier et al. (2006) は大学生を対象とした量的研究によって、喪失の肯定的な意味づけ方を見出すことに失敗すると、複雑な悲嘆につながることを明らかにしている。また、Kiang & Fulgni (2010) は、579名の青年を対象とした量的研究の中で、生成された肯定的意味づけ方は、自尊感情、学業成績、ウェルビーイングと正の関連を示すことを明らかにしている。Simon et al. (2010) は、子ども時代に性的虐待を受けた14歳から21歳の108名の青年を対象とした半構造化面接データを量的に分析する中で、虐待の記憶、感情及び認知を効果的に処理し、一貫した説明を行うことができる、すなわち虐待に対し意味づけ方を生成し、ライフストーリーに統合している青年は、精神医学的症状や性的当の問題をあまり報告しないことを明らかにしている。また、You (2016) は、大学生を対象とした量的研究で、希望をもつという肯定的意味づけ方が、学業への取り組みに正の影響を及ぼすことを明ら

かにしている。

一方で、意味づけ方と適応と関連する変数との負の関連を報告する研究もみられる。レビュー論文では (Park 2010 ; Cho & Park 2013) , 人生ストレス経験からの成長という意味づけ方と適応との正の関連について、支持する研究と支持しない研究が混在することが指摘されている。Waters et al. (2013) は、225名の大学生を対象とし得られた記述データ及び質問紙データによる量的研究によって、人生ストレス経験からの成長という肯定的意味づけ方と心的外傷後ストレス障害 (post-traumatic stress disorder; PTSD) の間に正の関連があることを明らかにしている。

このように、意味づけ及び意味づけ方と適応と関連する変数との間の関連について、相反する研究結果がみられる。この原因について、Pasupathi (2013) は、レビュー論文の中で、意味づけ方生成の過程を一時点で調査していることが原因だとし、苦痛は意味づけを引き起こし、意味づけ方は長い時間をかけて生成されていくものだと指摘している。

そして、このような問題点を受け、人生ストレス経験直面時から意味づけを行い、意味づけ方を生成していく過程全体を検証する実証研究もみられる。量的研究では、上條・湯川 (2016b) が、大学生を対象とした回顧法等に基づく量的研究において、人生ストレス経験に関する反芻や意味づけ、意味づけ方の内容や、反芻と意味づけの間の関連について明らかにしている。また、先述したように、意味づけモデル (Park & Folkman 1997 ; Park 2010) の検証も行われているが、包括的意味と人生ストレスラーの意味の評価の不一致、意味づけ、並びに適応との間の関連が殆ど支持されていない (Park 2008) 。

また、質的研究では、青年期後期、すなわち高校卒業以降から20代後半 (宅 2010 : 12 ; 戸ヶ里 2011a : 44) に、幼少期から続く人生ストレス経験を否定的にも肯定的にもならず受容していく傾向が指摘されている (松本 2009) 。小学校低学年で糖尿病を発症した現在22~28歳の青年4名を対象とした質的研究では、糖尿病について、成長や強くなったという意味づけ方を生成していることが明らかにされている (中村ら 2011) 。さらに、Fenstermacher (2014) の18歳~21歳の8人の流産を経験した青年を対象とした質的研究では、予期せぬ妊娠に驚き否定したり抵抗したりする一方、喪失を通して苦しむ衝撃の後に新しい人生のために備えていくことや、怒りや悲しみなど様々な感情を経験することにつながり、時間を経る中で、周囲に助けを求め、記憶を心の中でとどめ、人間関係を維持しながら意味を探し求め、なぜなのか問うようになる中で、新しい人生の見方を得ることにつながることを明らかにしている。

このように、意味づけ方生成過程全体を明らかにするため、質的及び量的研究が行われてきているが、以下の3点の問題点が存在する。1つ目は、意味づけ方生成過程全体に焦点を当てた実証研究自体が少なく、意味づけ方生成過程の解明が十分には行われていない点である (Park 2010 ; 堀田・杉江 2013) 。意味づけ研究では有益な知見が得られているにも関わらず、それを支持しない実証研究も見られる (Park 2008) 。このため、意味づけ研究の

理論を検証し、再構築を行っていく必要があるが、研究が少ないため十分な検討が行われていない。

2つ目は、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程を明らかにした実証研究があまりない点である。先述したように、青年期は様々な人生ストレス経験に直面し (Blos=1971 : 270 ; Antonovsky=2001 : 117 ; 宅 2010) , その人生ストレス経験からの影響を受けやすい時期であるため (山下 2010 : 200) , 青年期の人生ストレス経験への意味づけ方に焦点を当てる必要がある。しかし、青年が青年期に直面した人生ストレス経験に焦点を当て、どのような反芻、意味づけを経て、意味づけ方を生成していくかという過程全体を明らかにした実証研究は殆どない。

3つ目は、肯定的意味づけ方だけでなく、否定的意味づけ方も含めた意味づけ方の実態を明らかにした実証研究が殆どない点である。先述したように、肯定的意味づけ方だけでなく、後悔や否定的感情、理解できなさ、自分を見失うこと (Gillies et al. 2014) , 虚しさや無意味感 (Gillies et al. 2015) 等の否定的意味づけ方についても報告されている。しかし、上述したように、意味づけ理論や意味づけ方の内容に関する実証研究では肯定的意味づけ方に着目し、それを明らかにしているが、否定的意味づけ方の内容やそれと肯定的意味づけ方の関係についてまでは十分に検討されていない。そして、これは意味づけ方生成過程に着目した研究についても同様のことが言える。

この3つの問題点の原因の1つとして、意味づけ方生成過程に関する国内外の実証研究では、量的研究か質的研究のいずれかの方法を用いていることが考えられる。量的研究は研究者の研究デザインに基づいた事前決定型のアプローチであるため (Creswell=2007 : 21) , 研究デザインに関して多くの人々に共通する傾向は把握できるが、研究者の研究デザインに関連しない、対象者がもつ傾向までは捉えることができないと考えられる。特に、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程に関する研究の場合、量的研究を用いることで、先述したように、意味づけ方の内容について意味づけ研究の理論 (Park & Folkman 1997 ; Neimeyer & Anderson 2002 : 47-51 ; Gillies & Neimeyer 2006 ; Park 2010 ; Hibbert 2013) に基づく研究デザインを設定し、それについて多くの青年が共通してもつ傾向について明らかにできると考えられる。そして、前述したように、意味づけ方の内容に関する多くの尺度が実際に開発されている。しかし、その意味づけ方が生成されるまでには、長い時間の中で、複雑な過程を経ることが想定されるため (Park 2010 ; Fenstermacher 2014) , その過程全体を含む変数を量的研究で調査することは難しいと考えられる (Park 2010) 。

一方、質的研究はオープンエンドの質問形式を用いて得られたデータを基に解釈を行っていくアプローチである (Creswell=2007 : 21) 。青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程に関する研究の場合、質的研究では、対象者の発言データを基に、複雑な意味づけ方生成過程全体、並びに量的研究では明らかにされなかった意味づけ方の内容を明らかにすることができると考えられる。一方、量的研究のように、意味づけ研究の理論 (Park &

Folkman 1997 ; Neimeyer & Anderson 2002 : 47-51 ; Gillies & Neimeyer 2006 ; Park 2010 ; Hibbert 2013) に基づいた意味づけ方の内容を想定し、それについて多くの青年が有する意味づけ方の内容について明らかにすることは難しいだろう。

このように、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程に関する研究の場合、量的あるいは質的研究のどちらかの方法を用いるだけでは不十分だと考えられる。そして、このような場合に、量的及び質的データを収集することを混合的研究と呼ぶ (Creswell & Plano Clark=2010 : 5) 。質的研究及び量的研究を用いるという混合研究法の方が、いずれかを用いるよりもさらなる研究課題の理解を促進すると考えられている (Creswell & Plano Clark=2010 : 5-6) 。

青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程に関する研究の場合、意味づけ研究の理論 (Park & Folkman 1997 ; Neimeyer & Anderson 2002 : 47-51 ; Gillies & Neimeyer 2006 ; Park 2010 ; Hibbert 2013) に基づく意味づけ方の内容について多くの青年が共通して有する傾向を量的研究で明らかにした上で、質的研究の中で、その意味づけ方の生成過程及び意味づけ方の内容について個々の青年の実態を把握していくことが可能になると考えられる。そして、このような混合研究法にタイプは、1つのタイプのデータがもう1つのタイプのデータを基にした研究の支援的役割を担う、埋め込みデザイン (embedded design) と言われている (Creswell & Plano Clark=2010 : 74) 。すなわち、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方の生成過程及びその意味づけ方の内容を検証する質的研究のデータは、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方の内容を検証する量的研究データを基にした支援的役割を担っていると考えられる。

青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程を明らかにする意義として、以下の4点が考えられる。1つ目は、青年期の自我同一性形成方法への示唆を行うことができる点である。自我同一性の形成は青年期後期には達成されやすいと言われているが、青年の中には自我同一性を形成できないままにいる者もいることが先行研究のメタ分析で指摘されている (Kroger et al. 2010) 。前述したように、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程は自我同一性形成の過程とも言われている (宅 2010 : 229) 。よって、意味づけ方生成過程を明らかにすることによって、どのように自我同一性を形成していくかという自我同一性形成過程への示唆が可能であると考えられる。

2つ目は、ストレス対処・健康生成力概念である首尾一貫感覚 (Sense of Coherence; SOC) (Antonovsky 1979 : 183 ; Antonovsky=2001 : 19 ; Mittelmark et al. 2017 : 71) 形成方法への示唆を行うことができる点である。詳細については後述するが、先行研究 (Darling et al. 2007 ; 戸ヶ里 2008b : 61-2 ; 戸ヶ里 2011b : 118 ; Barni & Danioni 2016) より、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成は、ストレス対処・健康生成力概念である首尾一貫感覚 (Sense of Coherence; SOC) (Antonovsky 1979:183;Antonovsky=2001:19;Mittelmark et al. 2017 : 71) の形成と正の関連を有することが想定される。よって、青年期の人生ス

トレッサー生成過程を明らかにすることによって、青年期の SOC 形成方法が示唆されると考えられる。

3 つ目は、前述した意味づけ研究の中の意味づけモデル (Park & Folkman 1997; Park 2010) を支持しない研究結果も見られるため (Park 2008) , 意味づけ方生成過程全体を改めて検証することによって、理論構築への提言につながると考えられる。

4 つ目は、この青年期に直面した人生ストレス経験への意味づけ方生成過程を明らかにすることは、後述する支援者が青年の意味づけ方生成を支援する際、意味づけ方生成過程の中のどの段階で支援を行っていくことが効果的かを示すことができる点である。

第 5 節 青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成に関する青年の支援者の種類とその支援内容に関する先行研究

1. 青年の支援者の種類に関する先行研究

青年期の青年が自分自身だけで人生ストレス経験に対する意味づけ方を生成していくことは容易なことではない。また、青年の自分なりの意味づけ方生成では、問題の原因理解が不十分になるという指摘もされている (松井・笹井 2013) 。よって、青年による意味づけ方生成に対し、周囲の支援者による支援が必要とされる (狭間 2001 : 141 ; Germain & Gitterman=2008 : 57 ; 原 2012 ; 松井・笹井 2013 ; Fenstermacher 2014) 。人生ストレス経験への意味づけ方は常に書き換えられていくが、その過程は他者との相互作用によって促進され (山田 2005) , 一貫性を増していくと言われている (Germain & Gitterman=2008 : 57) 。そして、支援者がこの意味づけ方生成を支援してくことは、結果的に青年の SOC 形成を促進していくことにつながると考えられる。

この支援者には、家族、友人、隣人、職場の同僚等を含めたインフォーマルな支援者、並びにソーシャルワーカー、カウンセラー、教師等を含めたフォーマルな支援者が存在する (Maguire=1994 : 14-5) 。先行研究では、意味づけ方生成に関するインフォーマルな支援者として、家族 (Moscardino et al. 2010 ; O' Connor et al. 2011 ; Blattner et al. 2013 ; 林・小林 2006) , 友人 (Moscardino et al. 2010 ; Brewer & Sparkes 2011 ; O' Connor et al. 2011 ; 中村ら 2011 ; 戸ヶ里 2015) が指摘されている。また、フォーマルな支援者として、ソーシャルワーカー (Laird 1995 ; 狭間 2001 : 161) , カウンセラー (Neimeyer et al. 2008 ; Park & Gutierrez 2013) , 教師 (戸ヶ里 2015) が指摘されている。

しかし、先行研究には主に以下の 3 点の問題点が存在する。1 つ目は、支援者の種類が十分には明らかになっていない点である (堀田・杉江 2013) 。例えば、家族 (林・小林 2006 ; Moscardino et al. 2010 ; O' Connor et al. 2011 ; Blattner et al. 2013) とは父親なのか、母親なのか、兄弟なのか、そして、友人 (Moscardino et al. 2010 ; Brewer & Sparkes 2011 ; O' Connor et al. 2011 ; 中村ら 2011) とは同級生なのか、先輩なのか、さらに教師 (戸ヶ里 2015) とは担任なのか、そうでないのか等、青年の支援者の具体的な人物が十分

には明らかにされていない。

2つ目は、支援者の種類に関する男女差の検討が殆ど行われていない点である。大学生において、男性は周囲にあまり頼らないが、女性は周囲に頼りやすいことが示唆されている (Darling et al. 2007)。よって、支援者の存在は男女によって違いがあることが想定されるため、男女差を含めた検討の必要があるが、ほとんどなされていない。

3つ目は、人生ストレス経験への意味づけ方の中でも、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成に着目し、その意味づけ方生成を支援する支援者の実態を包括的に明らかにした研究が少ない点である。上述したように、青年期にさまざまな人生ストレス経験に直面していくことが想定されており (Blos=1971 : 270 ; Antonovsky=2001 : 117 ; 宅 2010 : 3) , 人生ストレッサーからの影響を受けやすい時期である (山下 2010 : 200) 。よって、青年期の人生ストレス経験に対し肯定的な意味づけ方生成をどのように支援していくか考えることは重要である。

そして、これらの問題点の原因のとして、先行研究が主に量的研究に基づいており (林・小林 2006 ; Moscardino et al. 2010 ; O' Connor et al. 2011 ; Blattner et al. 2013 ; 戸ヶ里 2015) , 研究者の研究デザインに含まれない青年の支援者の種類を把握しきれていないことが考えられる。よって、青年にどのような支援者がいるのかを明らかにするためには、対象者の発言データを基にした質的研究を行い、詳細な内容を聞き取ることが重要だと考えられる。そして、このように青年期に直面した人生ストレス経験への意味づけ方生成を支援する各支援者の種類を、男女の違いも含めて、明らかにすることは、青年への支援体制を整えていく方法が示唆されるという意義があると考えられる。

2. 各支援者による支援内容に関する先行研究

さらに、青年の支援者が、青年期の人生ストレス経験に対する青年の意味づけ方生成をどのように支援していくべきかに関連する先行研究も行われている。国外の研究では、青年のメンター (mentor) という存在が重要だとされている。メンターとは、青年の指導者、代弁者、ロールモデルとして機能し、青年の自己への信頼や、能力の使用、未来に焦点を当てることを促進する存在である (Bowers et al. 2016) 。そして、意味づけ方生成の支援者についても、このメンターと類似している役割があると考えられる。

また、意味づけ方生成には、時間の経過が必要となることが示されている (Park & Folkman 1997 ; Davis 2000 ; 山田 2005 ; Park 2010 ; Fenstermacher 2014) 。さらに、人生ストレス経験による否定的影響は、人生出来事や状況への直面時以降の人生においても続く可能性があるため、支援者は人生出来事や状況への直面時以降の人生における経験やそれへの意味づけ方にも注目していく必要があると指摘されている (松井・笹井 2012) 。

そして、インフォーマルな支援者とフォーマルな支援者の支援内容の特徴が異なると言われている (小松 1988) 。Gartner & Riessman (=1985 : 129) は、インフォーマルな支援

者の支援内容について、以下のように述べている。すなわち、インフォーマルな支援者の支援は、①感情と気持ちを強調する、②経験、常識的な直観、慣習が中心、③主観的であり、親近感をもち、自ら参加する、④同一視する、⑤その時に応じて自発的にパーソナリティを表現する、⑥自らをそのグループの中の者とみなすインサイダー志向、⑦経験に即した実践、⑧時間をかける、直接的に責任が問われる、という特徴を持っていると言われている。

一方、フォーマルな支援者の支援は、①知識、洞察、基本原則、理論及び構造を強調する、②系統的、③客観的であり、距離を保ち見通しを立て、自己覚知を重視し、感情転移をコントロールする、④感情移入をするが、統御された暖かさである、⑤一定の基準に基づいて行う、⑥自らをそのグループの外の者とみなすアウトサイダー志向、⑦理論的方向性をもった実践、⑧慎重な時間制限をし、系統的な評価を行う等の特徴を持っていると言われている (Gartner & Riessman=1985 : 129) 。

また、先行研究では、各フォーマルな支援者の支援内容が示されている。第1に、カウンセラーの支援内容について、Park & Gutierrez (2013) は、カウンセラーが自尊感情のような包括的意味、並びに人生ストレスについて目標等を侵害するものと認識する状況的意味の両方にアプローチしていく必要性を指摘した。

第2に、ソーシャルワーカーの支援方法についても指摘されている。クライアントとの対話の中でソーシャルワーカーが、クライアントが人生ストレス経験の肯定的な側面に気付き、自分なりの肯定的な意味づけ方を生成していくための支援を行うことは、ストレンクス視点アプローチである (狭間 2001 : 161) 。そして、ソーシャルワーカーが共感的・積極的傾聴をするにつれて、意味づけ方に基づくライフストーリーはますます一貫性を増すと言われている (Germain & Gitterman=2008 : 57) 。

Laird (1995) は、ソーシャルワーカーが意味づけ方生成への支援を行う際に必要な姿勢として、ソーシャルワーカーとクライアントとの対話の過程の中で見出される局域的な意味づけ方を重要視し、ストレンクスにむすびつくような意味づけ方生成の方法に関する様々な考え方をクライアントに提案することが重要だと述べている (Laird 1995) 。

さらに、ソーシャルワーカーには、クライアントが人生ストレス経験の否定的な影響を抱えながらも、これらの肯定的な側面に気付き、意味づけを行うことができるような問いかけを行うことが求められる (Saleebey 2013 : 107) 。Saleebey (2013 : 107) は、第1に、生き残りの質問 (survival questions) を挙げている。これは、今までの様々な経験の中で、難局にうまく対処してきた時の経験を通して、その方法はどのようなものであったか、また、うまく乗り切ってきたという自信を回復させることを目的とした質問といえる (狭間 2001 : 173) 。第2に、困った時に支援してくれる人々について尋ねるものである支援的質問 (support questions) を挙げている (狭間 2001 : 174) 。第3に、生活の中で困ったことが起こらない状態を想起させようとする質問である例外的質問 (exception questions) を挙げている (狭間 2001 : 174) 。第4に、これからどうしたいのかということを探る可

能性の質問 (possibility questions) を挙げている (狭間 2001:174) . 第5に, 自分自身を尊重された経験に関する質問である尊重する質問 (esteem questions) を挙げている (狭間 2001:175) . 第6に, 過去の人生経験がなぜ生じたかについての理解に関する, 見解の質問 (perspective question) を挙げている. 第7に, 人生をより良くしていくためにできることに関する, 変化の質問 (change question) を挙げている. 第8に, 包括的意味の中で重要な信念に関する, 意味の質問 (meaning question) を挙げている.

しかし, これらの先行研究には主に以下の2点の問題点が存在する. 1つ目は, 青年が意味づけ方を生成していく過程の中で, 支援者がどのような支援を行っていくかという, 青年と支援者との相互作用を含めた検討は十分には行われていない. 上述した意味づけ方生成過程やその結果生成された意味づけ方に関する意味づけ研究の理論においても, 支援者の支援が与える影響については含まれていない (Park & Folkman 1997 ; Neimeyer & Anderson 2002 : 47-51 ; Gillies & Neimeyer 2006 ; Park 2010 ; Hibbert 2013) . よって, 青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程の中で各支援者によるどのような支援が影響しているのかについては, 十分には検討されていないと言える (堀田・杉江 2013) .

上述したように, 青年期にさまざまな人生ストレス経験に直面していくことが想定されており (Blos=1971 : 270 ; Antonovsky=2001 : 117 ; 宅 2010) , その影響を受けやすい時期である (山下 2010 : 200) . よって, この青年期に直面した人生ストレス経験への意味づけ方生成過程に対し, 支援者が共通して行う重要な支援内容を明らかにすることが求められる.

この際, 青年を対象とし, 青年自身が役に立ったと感じる支援内容を明らかにすることが重要である. 先行研究では, 研究者による理論的示唆が多く, 青年自身がどう感じているかが十分には明らかにされていなかった. 研究者や支援者が効果的だと判断した支援を行ったとしても, 青年が効果的だと思わない支援を行っていた場合, その支援は実際には効果的であるとは言えない. そのため, 青年を対象とし, 青年自身が効果的だったと感じた支援内容を明らかにしていくことが重要である.

2つ目は, インフォーマルな支援者及びフォーマルな支援者が, それぞれどのような支援を各青年に対し行っているかという, 個々の支援内容の特徴を明らかにした実証研究が少ないことである. これによって, 支援者と青年との相互作用の中で, 各支援者の支援内容の特徴が明らかになると考えられる. フォーマルな支援者には, 青年のインフォーマルな支援者の支援内容を理解し, それを活用していくことが求められる (小松 1988) . よって, 各支援者の支援の特徴を明らかにすることによって, 支援者を有効的に活用していく方法への重要な知見を与えうると考えられる.

そして, このように支援者が共通して行った支援内容, 並びに各青年に対し行った個々の支援内容を明らかにするためには, 対象者の発言データを基にした質的研究を行うことが重要だと考えられる. 発言データを基にした分析を行うことで, 青年への支援者による支援

内容が明らかになるからである。そして、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程を明らかにする必要があることについて先述したが、この過程を明らかにする際に、どの段階で支援者が共通してどのような支援を行っているかを明らかにすると良いと考えられる。

第6節 考察

1. 先行研究で明らかにされていること

先行研究で明らかにされていることとして、以下の5点が挙げられる。

第1に、青年期のSOC形成と関連する要因として、人生ストレス経験への意味づけ方が示唆されている。そして、その意味づけ方は青年期後期には生成されることが示されている。

第2に、青年期のSOC形成と関連する要因である人生ストレス経験への肯定的意味づけ方の中でも、子ども時代の親の子育ての質への意味づけ方（以下、子育ての質への意味づけ方）が重要であることが明らかにされている。

第3に、青年期のSOC形成と関連する要因である人生ストレス経験への意味づけ方の中でも、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方が重要であることが示唆されている。そして、その意味づけ方の内容について、意味づけ研究（Park & Folkman 1997 ; Neimeyer & Anderson 2002 : 47-51 ; Gillies & Neimeyer 2006 ; Park 2010 ; Hibbert 2013）や国外での実証研究において検討が行われている。

第4に、理論研究や質的及び量的研究の中で、人生ストレス経験に対し、青年がどのような過程を経て意味づけ方が生成されていくのかについて明らかにされている。

第5に、友人、家族、教師、カウンセラー、ソーシャルワーカーなどのインフォーマル及びフォーマルな支援者が、青年の意味づけ方生成を支援していくことが示唆されている。

2. 先行研究で明らかにされていないこと

先行研究で明らかにされていないこととして、以下の5点が挙げられる。

第1に、青年期後期にあたる青年を対象とした、子ども時代の親の子育ての質への意味づけ方を包括的に測定評価する尺度は殆どない。よって、子ども時代の親の子育ての質への意味づけ方の内容は十分には明らかにされていない。

第2に、意味づけ研究での知見（Park & Folkman 1997 ; Neimeyer & Anderson 2002 : 47-51 ; Gillies & Neimeyer 2006 ; Park 2010 ; Hibbert 2013）を踏まえた上で、青年期後期にあたる青年が直面した人生ストレス経験に対する、特徴的な意味づけ方を測定する尺度は国内では殆どない。よって、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方の内容については十分に明らかになっていない。

第3に、青年期後期にあたる青年に焦点を当て、子育ての質への意味づけ方と青年期の人生ストレス経験への意味づけ方との関連や、この2つの意味づけ方と青年期のSOCとの関

連を総合的に検証した実証研究は殆どない。よって、これらの関連については十分には実証されていない。

第4に、混合研究法を用い、青年期の人生ストレス経験に焦点を当て、青年期後期にあたる青年がこれへの意味づけ方をどのように生成していくかという過程、並びにその過程の中で様々な支援者がどのような支援を共通して行っていくのかという検討は行われていない。

第5に、青年期後期にあたる青年が、青年期の人生ストレス経験に対し意味づけ方を生成していく過程において、フォーマル及びインフォーマルな支援者を含めどのような支援者が存在し、各支援者がそれぞれの青年に対し、どのような支援を行っているかという個々の支援者の支援内容について、男女差を含めて、包括的に検討した研究はあまり行われていない。

以上、5つの明らかにされていない点について、序章で述べた研究の枠組みに基づき、次章以降の質的及び量的研究を用いた実証研究の中で明らかにしていくこととする。

第2章 子ども時代の親の子育ての質への意味づけ方尺度作成 —量的研究法を用いて—

第1節 目的

本研究の目的は、青年期後期にあたる青年を対象とし、青年期のSOCと関連する、子ども時代の親の子育ての質への意味づけ方尺度（以下、子育ての質尺度）を作成し、その信頼性および妥当性を検証することである。

第2節 対象と方法

1. 対象

高校卒業後以降から20代後半の青年期後期（宅 2010:12; 戸ヶ里 2011a:44）にあたるA県のB, C大学に在籍する大学生635名を対象者とし、2014年12月～2015年1月の大学講義開始直前または終了直後に質問紙を配布し、即日及び配布後4週間以内に回収を行った。

2. 方法

1) 子育ての質尺度の予備尺度の項目作成

子ども時代の良質な人生経験として、一貫性、バランスのとれた負荷、結果形成への参加（Antonovsky=2001:109-15; 山崎 2008:21）、情緒的親密性（Sagy & Antonovsky 2000）の4つを想定した。そして、これらに関する青年が評価する親の子育てとして、それぞれ①『一貫性に関する子育て』、②『バランスのとれた負荷に関する子育て』、③『結果形成への参加に関する子育て』、④『情緒的親密性に関する子育て』という4つのカテゴリーを設定し、各カテゴリーの項目を作成した。その際、対象者が評価する過去の親の子育てを測定する既存の尺度であるPBI（Parental Bonding Instrument）（Parker, Tupling & Brown 1979; 小川1991）及びEMBU（Egma Minnen av Barndoms Uppfostran）（Perris, Jacobsson & Lindstrom et al. 1980; 染矢・高橋・門脇1996）を参考とし、各カテゴリーと関連していると想定される項目を取り入れた。なお、項目作成にあたっては、保健学の学位を有する教員1名、精神保健福祉士及び臨床心理士の資格を有する大学院生1名で複数回協議を行い、最終的に29項目からなる子育ての質尺度の予備尺度（以下、予備尺度）を作成した（表1）。1点～5点の5件法により回答を求め、得点が高いほど子ども時代の親の子育ての質への意味づけ方が肯定的であると解釈される。

2) 調査内容

①属性、予備尺度、②首尾一貫感覚の順番で回答を求めた。

①属性

性別及び年齢とした。

②首尾一貫感覚（Sense of Coherence; SOC）

首尾一貫感覚 (Sense of Coherence; SOC) (Antonovsky=1979 : 183 ; Antonovsky=2001 : 19) を測るため、SOC-13 (Antonovsky=2001 : 222-5 ; 山崎 1999) を使用した。SOC-13 は先行研究で信頼性及び妥当性が概ね確認されている (戸ヶ里・山崎 2005) 。SOC-13 は、把握可能感、処理可能感、有意味感の 3 つの下位尺度得点からなる。全 13 項目からなる設問に対し、1 点~7 点の 7 件法で回答を求めた。SOC-13 及び把握可能感、処理可能感、有意味感の得点が高いほどそれぞれ SOC 及び把握可能感、処理可能感、有意味感が高いと解釈される。

3) 分析方法

統計解析は統計ソフトの R (version 3.2.4) (R Development Core Team 2016) を使用し、有意水準は 5%未満とした。予備尺度の因子構造をみるために、最小二乗法及びプロマックス回転による探索的因子分析を行った。子育ての質尺度の信頼性を検証するために、Cronbach の α 係数を求めた。尺度の妥当性は、第一に、SOC-13 及び各下位尺度を外的基準に置き、子育ての質尺度及び各下位尺度との相関係数を算出することによって、構成概念妥当性を検証した。先行研究 (Antonovsky=2001 : 109-15 ; 戸ヶ里 2011b : 118) より、SOC-13 及び各下位尺度と子育ての質尺度の間には正の相関が想定される。第二に、子育ての質尺度の各下位尺度を独立変数、SOC-13 及び各下位尺度を従属変数とした重回帰分析を行うことによって、構成概念妥当性を検証した。先行研究 (Antonovsky=2001 : 109-15 ; 戸ヶ里 2008b : 62) より、子育ての質尺度の各下位尺度は SOC-13 及び各下位尺度に対し正の影響を与えると想定される。第三に、妥当性を高める手続きの一つとして、男女間の子育ての質尺度及び各下位尺度の差を、対応のない t 検定あるいはウィルコクソンの符号付順位和検定によって検証した。先行研究 (佐藤 2011 : 146) より、子育ての質尺度及び各下位尺度は、男性よりも女性の方が有意に高いと想定される。

4) 倫理的配慮

協力の得られた上述の 2 校の大学の対象者に、配布文書及び口頭にて、研究の目的、内容及び倫理的配慮について説明し、結果公表に際しての匿名性を保証した。また、データは統計処理をして本研究の目的以外には使用しないこと、参加や撤回などによる不利益は一切ないことを説明した。そして、書面にて対象者の同意を得た。本研究は日本福祉大学大学院の倫理審査委員会において承認を得た上で実施した (申請番号 14-003) 。

表 1 予備尺度の項目表

設問 番号	項目内容
①一貫性に関する子育て(8項目)	
Q1	親はどんな時も、できる限り私の傍についていてくれた。
Q5	親は、私に対していつも一貫した基準にそって対応していた。
Q9	親は、私の手におえないことが生じた時、きちんと責任をとってくれた。
Q13	親は、何を大切だと考えているか、私にはっきり伝えてくれた。
Q17	親は、私が悪いことをした時、過剰に叱ることはなかった。
Q21	親は私を叱る時、きちんと理由を話してくれた。
Q25	親は、兄弟や姉妹と私を区別することなく、皆に対して平等に接してくれた。
Q28	親は、友人を比べて私が劣っている時でも、私を責めることはなかった。
②負荷バランスに関する子育て(7項目)	
Q2	親は、私がやりたいことに対して、無視や拒否をすることが少なかった。
Q6	親は、私のやりたいことを行うことが難しいとき、他のことを提案するなど代替案を出して、私を新たに方向づけてくれた。
Q10	親は、私がやりたいことを達成できた時、褒めてくれた。
Q18	親は、私が困った時助けてくれた。
Q22	親は、学業やスポーツの成績において、私に能力以上の高い期待をもっていなかった。
Q26	親は私に、親のかなえなかった夢をかなえるように期待しなかった。
Q29	親は、私が望む夢をかなえることを応援してくれた。
③結果形成への参加に関する子育て(8項目)	
Q3	親は、私のすることを全てコントロールしようとしなかった。
Q7	親は、私のプライバシーをおかさなかった。
Q11	親は、私を依存させようとしなかった。
Q14	親は様々な関わりを通して、私のことを大切に思っていることを伝えてくれた。
Q15	親は、過保護ではなかった。
Q19	親は、親の意見を押しつけなかった。
Q23	親は、私自身に決定を下させた。
Q27	親は、私が好んでしたいと思うことをさせてくれた。
④情緒的親密性に関する子育て(6項目)	
Q4	親は、私となるべく接する時間をもつようしてくれた。
Q8	親は、私が困った時相談ののってくれた。
Q12	親は、私に優しく、慈愛があった。
Q16	親は、私の抱えている問題や心配に理解を示してくれた。
Q20	親は、私が悲しい時、よく私を慰めてくれた。
Q24	親は、私を褒めてくれた。

第3節 結果

1. 回収率と対象者の属性

調査の回収数は 322 名であった（回収率 50.7%）。その中で回答に著しい不備のなかった 270 名を有効回答とした（有効回答回収率 42.5%）。平均年齢は 20.3 歳，SD=1.07 であった。内訳は、男性 101 名（37.4%），女性 169 名（62.6%）であった。

2. 因子分析の結果

天井効果（平均値+1SD>5）のみられた Q1 の 1 項目を除き、全 28 項目とした。この 28 項目について、重み付きなし最小二乗法、プロマックス回転を用いて探索的因子分析を行

った。スクリープロットを基にした固有値の変動状況（図 1）及び因子の解釈可能性に基づき、2 因子解が最適解であると判断した。そして、2 因子を仮定した因子分析を行った。①因子負荷量が.40 に満たない項目（Q25, Q29），②2 つ以上の因子にわたって.30 以上負荷している項目（Q24）を削除して再度因子分析を行った。その結果、25 項目 2 因子となった（表 2）。2 因子の累積寄与率は 43.150%であり、各因子の固有値は第 1 因子 11.596、第 2 因子 2.174 であった。項目内容より、第 1 因子は「親からの支援と愛情表現」と解釈された。項目内容より、第 2 因子は「親からの意思決定の尊重」と解釈された。

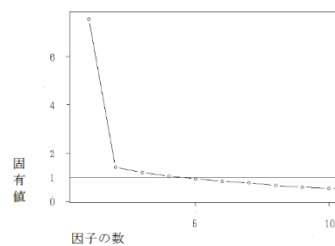


図 1 予備尺度の固有値に関するスクリープロット

表 2 因子分析の結果

項目	因子 I	因子 II
I. 親からの支援と愛情表現 ($\alpha = .922$)		
Q8 親は、私が困った時相談にのってくれた ⁴⁾	.84	-.12
Q18 親は、私が困った時助けてくれた ²⁾	.77	.01
Q14 親は様々な関わりを通して、私のことを大切に思っていることを伝えてくれた ³⁾	.73	.10
Q13 親は、何を大切だと考えているか、私にはっきり伝えてくれた ¹⁾	.71	-.11
Q6 親は、私がやりたいことを行うことが難しい時、他のことを提案するなど代替案を出して、私を新たに方向づけてくれた ²⁾	.71	.10
Q20 親は、私が悲しい時、よく私を慰めてくれた ⁴⁾	.71	-.06
Q16 親は、私の抱えている問題や心配に理解を示してくれた ⁴⁾	.70	.10
Q10 親は、私がやりたいことを達成できた時、褒めてくれた ²⁾	.67	.04
Q4 親は、私となるべく接する時間をもつようにしてくれた ⁴⁾	.66	-.03
Q21 親は私を叱る時、きちんと理由を話してくれた ¹⁾	.61	.09
Q12 親は、私に優しく、慈愛があった ⁴⁾	.55	.09
Q9 親は、私の手に負えないことが生じた時、きちんと責任をとってくれた ¹⁾	.55	.16
Q5 親は、私に対していつも一貫した基準にそって対応していた ¹⁾	.48	.08
II. 親からの意思決定の尊重 ($\alpha = .861$)		
Q19 親は、親の意見を押しつけなかった ³⁾	.09	.76
Q23 親は、私自身に決定を下させた ³⁾	-.13	.75
Q3 親は、私のすること全てをコントロールしようとしなかった ³⁾	-.05	.71
Q27 親は、私が好んでしたいと思うことをさせてくれた ³⁾	.08	.65
Q26 親は私に、親のかなえたかった夢をかなえるように期待しなかった ²⁾	-.14	.54
Q22 親は、学業やスポーツの成績において、私に能力以上の高い期待をもっていなかった ²⁾	-.09	.53
Q28 親は、友人と比べて私が劣っている時でも、私を責めることはなかった ¹⁾	.10	.53
Q11 親は、私を依存させようとしなかった ³⁾	-.03	.50
Q7 親は、私のプライバシーをおかさなかった ³⁾	.23	.48
Q15 親は、過保護ではなかった ³⁾	.25	.48
Q2 親は、私がやりたいことに対して、無視や拒否をすることが少なかった ²⁾	-.06	.47
Q17 親は、私が悪いことをした時、過剰に叱ることはなかった ¹⁾	.13	.44
	固有値	11.596 2.174
	因子寄与率 (%)	25.578 17.571
	累積寄与率 (%)	25.578 43.150
	下位尺度間相関	因子 I 因子 II
	因子 I	1
	因子 II	.62*** 1

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

1) 予備尺度の『一貫性に関する子育て』の項目、2) 予備尺度の『負荷バランスに関する子育て』の項目、3) 予備尺度の『結果形成への参加に関する子育て』の項目、4) 予備尺度の『情緒的親密性に関する子育て』の項目

3. 信頼性の検証

25 項目全ての平均得点を算出し、「子育ての質尺度」得点とした。各 2 因子に相当する項目の平均得点を算出し、それぞれ各下位尺度得点とした。この 2 つの下位尺度得点は有意な正の高い相関 ($r = .62, p < .001$) を示した (表 2)。子育ての評価尺度の信頼性を Cronbach の α 係数を算出することで確認した結果、子育ての質尺度が .93、「親からの支援と愛情表現」が .92、「親からの意思決定の尊重」が .86 であった。

4. 基準関連妥当性の検証

子育ての質尺度及び各下位尺度と、外的基準の SOC-13 及び各下位尺度との相関係数を算出した（表 3）。その結果、SOC-13 及び処理可能感、有意味感は、子育ての質尺度及び各下位尺度との間に有意な正の弱いあるいは中等度の相関を示した ($r=.15\sim.32$)。一方、把握可能感は「親からの意思決定の尊重」と有意な正の弱い相関 ($r=.14, p<.05$) を示したが、子育ての質尺度及び「親からの支援と愛情表現」とは無相関であった。

表 3 相関分析の結果

	SOC-13			
	SOC-13	把握可能感	処理可能感	有意味感
子育ての質尺度	.29 ***	.11	.23 ***	.32 ***
子育ての質尺度 親からの支援と愛情表現	.22 ***	.06	.15 *	.30 ***
親からの意思決定の尊重	.30 ***	.14 *	.27 ***	.28 ***

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

5. 構成概念妥当性の検証

SOC-13 及び各下位尺度を従属変数とし、子育ての質尺度の 2 つの下位尺度「親からの支援と愛情表現」及び「親からの意思決定の尊重」を独立変数とした重回帰分析（強制投入法）を行った（表 4）。その結果、SOC-13 及び処理可能感、有意味感を従属変数とした場合有意なモデルとなった。SOC-13 及び処理可能感へは「親からの意思決定の尊重」が有意な正の影響（SOC-13: $\beta=.26, p<.001$, 処理可能感: $\beta=.17, p<.05$ ）を与えていた一方、「親からの支援と愛情表現」は有意な影響を及ぼしていなかった。有意味感へは「親からの支援と愛情表現」（ $\beta=.20, p<.01$ ）及び「親からの意思決定の尊重」（ $\beta=.16, p<.05$ ）が有意な正の影響を与えていた。しかし、把握可能感を従属変数とした場合、モデルが非有意であった。なお、VIF 値はすべて 2 未満であり、多重共線性の問題は生じていないと判断した。

6. 男女差の検証

男女間の子育ての質尺度及び各下位尺度の差を、対応のない t 検定あるいはウィルコクソンの符号付順位和検定によって検証した（表 5）。その結果、子育ての質尺度及び「親からの意思決定の尊重」について、男性よりも女性の方が有意に高かった ($p<.05$)。

表 4 SOC に対する重回帰分析の結果

		SOC-13			
		SOC-13 β	把握可能感 β	処理可能感 β	有意味感 β
子育ての質 尺度	親からの支援と愛情表現	.06	-.04	-.02	.20 **
	親からの意思決定の尊重	.26 ***	.17 *	.28 ***	.16 *
		$R^2=.084$ $F(2, 267)$ =13.290 p<.001	$R^2=.013$ $F(2, 267)$ =2.828 n. s.	$R^2=.066$ $F(2, 267)$ =10.520 p<.001	$R^2=.096$ $F(2, 267)$ =15.290 p<.001

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

注) R^2 : 決定係数, β : 標準化偏回帰係数

表 5 子育ての質尺度及び各下位尺度に関する男女差の検証結果

変数	得点の範囲	平均値 ± SD		性差 P値
		男性	女性	
1. 子育ての質尺度	1~5	3.51 ± .67	3.64 ± .68	p<.05
2. 親からの支援と愛情表現	1~5	3.59 ± .79	3.68 ± .78	n. s.
3. 親からの意思決定の尊重	1~5	3.42 ± .73	3.60 ± .72	p<.05

注) 検定 : t検定あるいはウィルコクソンの符号付順位和検定

第 4 節 考察

本研究においては、子育ての質尺度（以下、本尺度）の作成を行い、その信頼性及び妥当性を検証した。因子分析の結果、「親からの支援と愛情表現」及び「親からの意思決定の尊重」の2因子を抽出した。第1因子「親からの支援と愛情表現」は、子どもが困った時親が支援し、子どもに対し愛情を態度や言動で表現したという青年の意味づけ方を示していた。「親からの支援と愛情表現」は全4つの予備尺度のカテゴリ項目で構成されていた。そのうち『情緒的親密性に関する子育て』、『負荷バランスに関する子育て』及び『結果形成への参加に関する子育て』の項目は、「親からの支援と愛情表現」の内容を示していた。これは、先行研究 (Sagy & Antonovsky 2000 ; Antonovsky=2001 : 109-15 ; 木村ら 2001 ; Garcia-Moya et al. 2012) と一致していた。そして、「親からの支援と愛情表現」の中の『一貫性に関する子育て』の項目は、親が「親からの支援と愛情表現」を一貫して行っていたことを示していると考えられた。

第2因子「親からの意思決定の尊重」は、親が自身の意見や高い期待を子どもに押し付けず、子どもの独立性や意思決定を尊重したという青年の意味づけ方を示していた。「親からの意思決定の尊重」は『結果形成への参加に関する子育て』、『負荷バランスに関する子育て』及び『一貫性に関する子育て』の項目で構成されていた。そのうち『結果形成への参加に関する子育て』及び『負荷バランスに関する子育て』の項目は、「親からの意思決定

の尊重」の内容を示していた。これは、先行研究 (Sagy & Antonovsky 2000 ; Antonovsky=2001 : 109-15 ; 戸ヶ里 2011b : 116) と一致していた。そして、「親からの意思決定の尊重」の中の『一貫性に関する子育て』の項目は、親が「親からの意思決定の尊重」を一貫して行っていたことを示していると考えられた。

さらに、「親からの支援と愛情表現」は「親からの意思決定の尊重」と有意な正の高い相関 ($r=.62, p<.001$) を示していた。これは、親が子どもに温かく寄り添い、支えていきながらも、子どもの意思決定を尊重することが重要であることを示している。このような親の子育ての質の間の関係性は、子ども時代の親の子育ての質を包括的に測定する本尺度によって新たに明らかになったことである。そして、青年は本尺度の2つの因子によって示された子育ての質に基づき、子ども時代の親が自分に対し肯定的に接してくれたと気づき、子ども時代の親の子育ての質を受容していくこと (山岸 1990 : 26) につながると考えられる。その結果、青年は自我同一性 (山岸 1990 : 26) 及びSOC (Antonovsky=2001 : 118) を形成していくと考えられる。

なお、本尺度の2因子は予備尺度の各4つのカテゴリーの項目が混ざりあっていた。予備尺度では子ども時代の各4つの良質な人生経験と関連する親の子育ての質に着目し、カテゴリーを設定した。しかし、青年期のSOCと関連する子ども時代の親の子育ての質は、各4つのカテゴリーに帰属するものではなく、4つのカテゴリー間にまたがるものであるため、本研究のような結果になったと考えられる。

本尺度及び各下位尺度のCronbachの α 係数は.86～.92であり、高い値を示していた。よって、本尺度は十分な信頼性を示していた。また、相関分析を行った結果、本尺度及び各下位尺度は青年期のSOC-13及び処理可能感、有意味感と有意な正の弱いあるいは中等度の相関 ($r=.15\sim.32$) を示していた。これは、先行研究 (Antonovsky=2001 : 112-4 ; 木村ら 2001 ; 戸ヶ里 2011b : 118-20) と一致していた。よって、本尺度の構成概念妥当性が示された。しかし、青年期の把握可能感は「親からの意思決定の尊重」と有意な正の弱い相関 ($r=.14, p<.05$) を示した一方、本尺度及び「親からの支援と愛情表現」とは無相関であった。有意味感は、把握可能感によって把握した客観的状況に対する主観的な評価や意味づけ方の生成と関連しているため、有意味感と把握可能感は性質を異にしている。そして、本尺度は有意味感と関連が強い (戸ヶ里 2008b : 61-2 ; 戸ヶ里 2011b : 118) と想定されるため、本尺度及び各下位尺度は把握可能感とは関連があまりなかったと考えられる。

さらに、重回帰分析の結果、SOC-13及び処理可能感、有意味感を従属変数とした場合有意なモデルとなった。青年期のSOC-13及び処理可能感に対し、「親からの意思決定の尊重」が有意な正の影響 (SOC-13 : $\beta=.26, p<.001$, 処理可能感 : $\beta=.17, p<.05$) を及ぼしていた。これは先行研究 (Antonovsky=2001:113-4 ; 戸ヶ里 2011b : 118-20) と一致していた。一方、「親からの支援と愛情表現」は青年期のSOC-13及び処理可能感と有意な正の相関 ($r=.15\sim.22$) を示したにも関わらず、重回帰分析では有意な関連が示されなかった。「親

からの支援と愛情表現」と「親からの意思決定の尊重」は有意な正の高い相関 ($r=.62$, $p<.001$) を示したことから、「親からの支援と愛情表現」は「親からの意思決定の尊重」を通して間接的に青年期の SOC 及び処理可能感に影響を及ぼしていると考えられる。さらに、青年期の有意味感へは「親からの支援と愛情表現」 ($\beta=.20$, $p<.01$) 及び「親からの意思決定の尊重」 ($\beta=.16$, $p<.05$) が有意な正の影響を及ぼしていた。これは先行研究での理論的示唆 (Sagy & Antonovsky 2000 ; Antonovsky=2001 : 112-3 ; 戸ヶ里 2008b : 62-3) を実証していた。有意味感はストレスの理解や対処のための資源を得ようとする動機づけの要素であり、SOC の 3 要素の中で最も重要である (Antonovsky=2001 : 26-7)。よって、本尺度の構成概念妥当性が示された。

男女間の本尺度及び各下位尺度の差を、対応のない t 検定あるいはウィルコクソンの符号付順位和検定によって検証した結果、本尺度及び「親からの意思決定の尊重」について、男性よりも女性の方が有意に高かった。これは先行研究 (佐藤 2011 : 116) を支持していた。よって、本尺度の妥当性が示された。

しかし、把握可能感重回帰分析ではモデル自体が非有意になった。これは、上述したように、本尺度は有意味感に影響を与えるものであり (戸ヶ里 2008b : 61-2)、把握可能感は有意味感とは性質が異なるためと考えられる。また、重回帰分析の決定係数が低かったため ($R^2=.066\sim.096$)、今後更なる検証が求められる。

第 5 節 本研究のまとめと限界

本研究では子育ての質尺度 (以下、本尺度) を作成し、その信頼性及び妥当性を検証した。その結果、「親からの支援と愛情表現」及び「親からの意思決定の尊重」という 2 因子が抽出された。そして、本尺度及び各下位尺度の Cronbach の α 係数は .86~.93 であり、信頼性が示された。また、相関分析を行った結果、本尺度及び各下位尺度と SOC 及び処理可能感、有意味感との間に正の相関が確認され、構成概念妥当性が示された。さらに、重回帰分析を行った結果、本尺度の各下位尺度が SOC 及び処理可能感、有意味感に与える正の影響が確認され、構成概念妥当性が示された。そして、対応のない t 検定あるいはウィルコクソンの符号付順位和検定を行った結果、本尺度及び「親からの意思決定の尊重」について、男性よりも女性の方が有意に高いことが確認され、妥当性が示された。

一方で、本研究には限界と課題も存在する。第 1 に、本尺度の信頼性及び妥当性については、今後はサンプルを変えつつ増やして検証を行っていくことが期待される。

第 2 に、子育ての質尺度の重回帰分析の決定係数が低かったことから、青年期の SOC 及び各 3 要素には、子ども時代の親の子育ての質への意味づけ方以外の要因が影響している可能性が考えられる。その一つとして、第 1 章で示したように、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方が考えられるため、第 3 章以降で検証を行っていく。

第3章 青年期の人生ストレス経験への意味づけ方尺度作成 —量的研究法を用いて—

第1節 目的

本研究では、意味づけ研究の意味づけ方 (Park & Folkman 1997 ; Neimeyer & Anderson 2002 : 47-51 ; Gillies & Neimeyer 2006 ; Park 2010 ; Hibbert 2013) を踏まえた上で、青年期後期にあたる青年を対象とし、青年期の人生ストレス経験への青年による意味づけ方を測定する尺度 (以下、人生ストレス経験への意味づけ方尺度) の作成を試み、その妥当性及び信頼性を検証することを目的とする。

第2節 対象と方法

1. 研究対象者

高校卒業後以降から 20 代後半の青年期後期 (宅 2010 : 12 ; 戸ヶ里 2011a : 44) にあたる A 県の B, C 大学に在籍する大学生 635 名を対象とした。

2. 方法

1) 予備尺度の項目作成

青年期の人生ストレス経験への意味づけ方尺度の予備尺度 (以下、予備尺度) を以下の手続きを基に作成した。まず、先行研究 (Gillies & Neimeyer 2006 ; Park 2010 ; Hibbert 2013) を基に、複数の研究者間で質問項目に関する議論を重ねた。そして、人生ストレス経験への意味づけ方として『意味理解』, 『有益性発見』, 『アイデンティティの変化』, 『人生の目的』, 『生きる意味』の 5 つのカテゴリーを想定した。それぞれの項目を作成する際、先行研究 (McMillen & Fisher 1998 ; 坂口 2002 ; 坂口 2008 ; 宅 2005 ; Chiba et al. 2014 ; 木村・山崎 2014) を参考にした。その際、『人生の目的』は PIL (Purpose in Life) テスト (Crumbaugh & Maholick 1964 ; 佐藤 1975) より項目を選定した (Tedeschi & Calhoun 1996) 。最終的に 5 つのカテゴリーごとに合計 30 項目の項目案からなる、予備尺度を作成した (表 1) 。そして、先行研究 (宅 2005) を基に「過去 5 年間の間にかかえたストレス経験の中で、一番深刻であった内容」という指示文を用い、これへの意味づけ方を尋ねた。研究対象者が理解しやすいよう、人生ストレス経験についてストレス経験と端的に表現した。また、過去 5 年以内という期間は、先行研究 (Tedeschi & Calhoun 1996) に基づき、研究対象者が 12 歳前後から 20 歳代後半頃の青年期 (戸ヶ里 2011a : 44) にあたるため設定した。回答は 5 件法で「全くそう思わない (1 点) 」から「とてもそう思う (5 点) 」とした。この得点が高いほど、各項目の示す青年期の人生ストレス経験への意味づけ方を現在見出している度合いが高いと解釈される。

表1 予備尺度の項目表

設問 番号	項目内容
①意味理解 (4項目)	
Q1	私は、この経験に納得できるようになった。
Q6	この経験は、私にとって意味があると思うようになった。
Q11	私は、この経験を受け入れられるようになった。
Q16	私は、この経験がなぜ起きたのかが分かるようになった。
②有益性発見 (8項目)	
Q2	この経験によって、私は強くなった。
Q7	この経験によって、私は成長できた。
Q12	この経験によって、私は自信がついた。
Q17	この経験によって、私は忍耐強くなった。
Q21	この経験によって、私は周囲の人々の温かさが分かった。
Q24	この経験によって、私はより深い人間関係を築くことができた。
Q27	この経験によって、私は周囲の人々に思いやりをもって接するようになった。
Q29	この経験によって、私は家族の大切さに気付いた。
③アイデンティティの変化 (4項目)	
Q3	私は、この経験を何とか切り抜けることができたと思う。
Q8	私は、この経験を乗り越えることができたと思う。
Q13	この経験は、私の中の重要な一部となっている。
Q18	この経験によって、私は今までとは違った、新しい自分変わったと思う。
④人生の目的 (8項目)	
Q4	私の人生は自分の力で十分やっていける。
Q9	私の生き方から言えば、世の中は非常にしっくりくる。
Q14	私には人生の意義、目的、使命を見出す能力が十分にある。
Q19	私には支えとなる家族がいる。
Q22	生きていく上で私には非常にはっきりした目標や計画がある。
Q25	私という人間は目的をもった非常に意味ある存在だ。
Q28	私は人生の目標の実現に向かって着々と進んできている。
Q30	毎日の生活(仕事や勉強など)に私は大きな喜びを見出し、また満足している。
⑤生きる意味 (6項目)	
Q5	この経験によって、私は人生において何が大切なのかが分かった。
Q10	この経験によって、私の人生の優先順位は変わった。
Q15	この経験によって、私は自分の人生は価値のあるものだ気付いた。
Q20	この経験によって、私は1日1日を大切に過ごすようになった。
Q23	この経験によって、私は後悔なく日々の生活を生きたいのだと分かった。
Q26	この経験によって、私は自分の人生をよりシンプルに生きるようになった。

2) 調査内容

2014年12月～2015年1月、大学講義開始直前または終了直後に大学生に対し質問紙を配布し、即日及び配布後4週間以内に回収を行った。調査内容は下記に示す①～④で、質問はこの順に尋ねた。なお、上記の予備尺度は③と④の間で尋ねた。予備尺度の前に人生ストレス経験の種類やその深刻度を尋ねることで対象者がそれらを想起し、人生ストレス経験に対する現在の意味づけ方を回答しやすくなると考えられる。

①属性

性別及び年齢とした。

②人生ストレス経験の種類

人生ストレス経験の種類とは意味づけ方生成を行う対象である人生ストレス経験の内容

であり、人生ストレス経験への意味づけ方との関連が指摘されている(宅 2005)。予備尺度の人生ストレス経験の種類を測定するため、先行研究(嶋 1992;宅 2005)を参考にして、「進路・就職」、「性格」、「友人関係」、「恋愛」、「家族関係」、「成績・能力」、「健康」、「その他」という8つの種類を設定した。各種類の経験がある場合1点、ない場合0点とするダミー変数を作成し、分析に用いた。

③人生ストレス経験の深刻度

予備尺度の人生ストレス経験の深刻度の測定のため、青年期に限定せずこれまで生きてきた中で遭遇した全ての人生ストレス経験と比較した上での深刻度を尋ねた。先行研究では人生ストレス経験の深刻度が強いことと人生ストレス経験への意味づけ方が弱いこととの関連が示されている(Park et al. 1996)。回答は5件法で、「全く深刻ではなかった(1点)」から「とても深刻だった(5点)」とした。この得点が高いほど、2)のストレスサーの深刻度が高いと解釈される。

④首尾一貫感覚 (Sense of Coherence; SOC)

首尾一貫感覚 (Sense of Coherence; SOC) (Antonovsky=1979:123; Antonovsky=2001:19) を測るため、SOC-13 (sense of coherence scale 13-item version) (Antonovsky=2001:222-5;山崎 1999) を使用した。SOC-13は先行研究で妥当性及び信頼性が概ね確認されている(戸ヶ里・山崎 2005)。SOCは人生ストレス経験への意味づけ方との正の関連が指摘されている(戸ヶ里 2008b:61-2;戸ヶ里 2011b:118)。全13項目からなる設問に対し、1点~7点の7件法で回答を求めた。SOC-13の得点が高いほどSOCが高いと解釈される。

3) 分析方法

統計解析は統計ソフトのR (version 3.3.2) (R Development Core Team. 2016) を使用し、有意水準は5%未満とした。

①妥当性の検証

内容的妥当性を検証するために、取り上げた項目で人生ストレス経験への意味づけ方という概念が説明されているかどうかを複数の研究者間で複数回検討した。また、予備尺度の因子構造をみるために、最小二乗法及びプロマックス回転による探索的因子分析を行った。さらに、基準関連妥当性を検証するために、SOC-13、人生ストレス経験の深刻度及び人生ストレス経験の種類を外的基準に置き、人生ストレス経験への意味づけ方尺度及び各下位尺度との相関係数を算出した。また、後述する人生ストレス経験への意味づけ方尺度の3つの下位尺度のうち2つの下位尺度を制御変数とし、残り1つの下位尺度と上記の外的基準との偏相関係数を算出した。そして、人生ストレス経験への意味づけ方尺度の3つの各下位尺度について同様に偏相関係数を算出した。

②信頼性の検証

内的整合性をみるため、Cronbach の α 係数を求めた。また、偶数項目の得点と奇数項目の得点の合計の相関係数を算出する折半法を実施した。

4) 倫理的配慮

協力の得られた上述の 2 校の大学の対象者に、配布文書及び口頭にて、研究の目的、内容及び倫理的配慮について説明し、結果公表に際しての匿名性を保証した。また、データは統計処理をして本研究の目的以外には使用しないこと、参加や撤回などによる不利益は一切ないことを説明した。そして、書面にて対象者の同意を得た。本研究は日本福祉大学大学院の倫理審査を受け承認を得た上で実施した（申請番号 14-003）。

第 3 節 結果

1. 回収率と対象者の属性

調査の回収数は 322 名であった（回収率 50.71%）。その中で回答に著しい不備のなかった 270 名を有効回答とした（有効回答回収率 42.52%）。平均年齢は 20.31 歳，SD=1.14，最低年齢は 18 歳で最高年齢は 27 歳であった。内訳は、男性 101 名（37.41%），女性 169 名（62.59%）であった。過去 5 年間でかかえた一番深刻な人生ストレス経験として、「進路・就職」を選んだ者は 73 名（27.04%），「性格」を選んだ者は 21 名（7.78%），「友人関係」を選んだ者は 55 名（20.37%），「恋愛」を選んだ者は 21 名（7.78%），「家族関係」を選んだ者は 25 名（9.26%），「成績・能力」を選んだ者は 32 名（11.85%），「健康」を選んだ者は 11 名（4.07%），その他及び複数回答者は 32 名（11.85%）であった。なお，その他及び複数回答は分析から除外した。

2. 因子分析の結果

予備尺度の項目のうち、天井効果（平均値+1SD>5）の見られた Q19 を除き、全 29 項目とした。この 29 項目について、最小二乗法及びプロマックス回転による探索的因子分析を行った。スクリープロットにおける固有値の減衰状況（図 1）及び因子の解釈可能性に基づき、3 因子構造として解釈することが適当と判断した。そして、3 因子を仮定した因子分析（最小二乗法、プロマックス回転）を行った。因子負荷量が .40 に満たない Q10、Q26 の 2 項目、2 つ以上の因子にわたって絶対値 .30 よりも高く負荷している Q4、Q12、Q28、Q30 の 4 項目を除外し、残った 23 項目で再度分析を行った（表 2）。3 因子の累積寄与率は 55.34%であり、各因子の固有値は第 1 因子 12.71、第 2 因子 1.90、第 3 因子 1.43 であった。

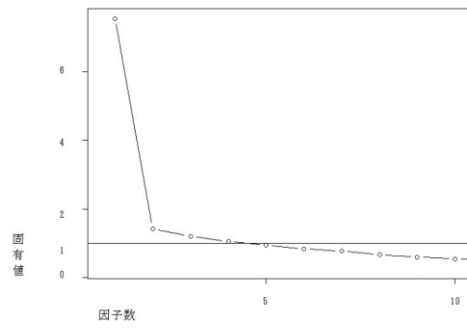


図1 固有値に関するスクリープロット

表2 人生ストレス経験への意味づけ方尺度の因子分析の結果

項目	因子 I	因子 II	因子 III	
I. 人生ストレス経験から成長				
Q1 この経験によって、私は強くなった.	.82	-.10	.06	
Q2 この経験によって、私は成長できた.	.78	-.05	.12	
Q3 私は、この経験を何とか切り抜けることができたと思う.	.74	-.10	-.02	
Q4 私は、この経験を受け入れられるようになった.	.73	.07	-.09	
Q5 この経験は、私にとって意味があると思うようになった.	.70	-.07	.03	
Q6 私は、この経験に納得できるようになった.	.70	.02	-.08	
Q7 私は、この経験を乗り越えることができたと思う.	.64	-.07	.13	
Q8 この経験は、私の中の重要な一部となっている.	.57	.11	-.04	
Q9 この経験によって、私は今までとは違った、新しい自分変わったと思う.	.55	.02	.18	
Q10 この経験によって、私は忍耐強くなった.	.53	.08	.07	
Q11 私は、この経験がなぜ起きたのかが分かるようになった.	.46	.05	-.08	
Q12 この経験によって、私は人生において何が大切なのが分かった.	.44	.05	.13	
II. 人生の目的の明確化				
Q13 私には人生の意義、目的、使命を見出す能力が、十分にある.	.00	.92	-.14	
Q14 私という人間は、目的をもった非常に意味ある存在だ.	-.16	.87	.15	
Q15 私の生き方から言えば、世の中は、非常にしっくりくる.	.04	.71	-.04	
Q16 生きていく上で私には、非常にはっきりした目標や計画がある.	-.04	.65	.22	
Q17 この経験によって、私は自分の人生は価値のあるものだ気付いた.	.26	.62	-.04	
III. 周囲との関係性の再認識				
Q18 この経験によって、私は周囲の人々に思いやりをもって接するようになった.	.06	-.08	.78	
Q19 この経験によって、私は周囲の人々の温かさが分かった.	.09	-.09	.77	
Q20 この経験によって、私は1日1日を大切に過ごすようになった.	.07	.09	.65	
Q21 この経験によって、私は家族の大切さに気付いた.	-.02	.03	.62	
Q22 この経験によって、私はより深い人間関係を築くことができた.	.18	.19	.52	
Q23 この経験によって、私は後悔なく日々の生活を生きたいのだと分かった.	.16	.26	.40	
	固有値	12.71	1.90	1.43
	寄与率 (%)	43.84	6.56	4.94
	累積寄与率 (%)	43.84	50.40	55.34
因子間相関				
I		1		
II	.69***		1	
III	.71***	.70***		

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

注1) 予備尺度のカテゴリ: a) 『意味理解』, b) 『有益性発見』, c) 『アイデンティティの変化』, d) 『人生の目的』, e) 『生きる意味』

注2) 「あなたのストレス経験に基づいて、今の気持ちにもっとも適当と思われる数字に○をつけてください」という指示文を用いて、尺度項目への回答を求めた。

3. 妥当性の検証

1) 抽出された因子の構成

第1因子は、人生ストレス経験の意味を理解して自分が成長し、人生ストレス経験を乗り越えることができたと感じることを示す項目で構成されていたことから、「人生ストレス経

験からの成長」と解釈された。第2因子は、人生の目的を見出すことで、自分や世の中、人生に意味があると感じることを示す項目で構成されていたことから、「人生の目的の明確化」と解釈された。第3因子は、周囲との関係性について重要であると気づき、大切に生きていくようになったことを示す項目で構成されていたことから「周囲との関係性の再認識」と解釈された。

2) 相関係数の算出

23項目全ての平均値を算出し「人生ストレス経験への意味づけ方尺度」得点とした。各3因子に相当する項目の平均値を算出し、それぞれ各下位尺度得点とした。人生ストレス経験への意味づけ方尺度及び各下位尺度と、SOC-13、人生ストレス経験の深刻度及び全7つの人生ストレス経験の種類からなる外的基準との相関係数を算出した(表3)。その結果、人生ストレス経験への意味づけ方尺度及び各下位尺度はSOC-13との間に有意な正の相関($r=.29 \sim .49$)を示したが、「進路・就職」、「成績・能力」及び「健康」人生ストレス経験とは無相関であった。人生ストレス経験の深刻度は「人生の目的の明確化」との間に有意な負の相関($r=-.14$)を示したが、「人生ストレス経験からの成長」及び「周囲との関係性の再認識」とは無相関であった。

表3 相関分析の結果

	SOC-13	人生ストレス経験の深刻度	人生ストレス経験の種類						
			進路・就職	性格	友人関係	恋愛	家族関係	成績・能力	健康
人生ストレス経験への意味づけ方尺度	.45***	-.08	.00	-.13*	.08	-.01	.03	-.01	-.03
人生ストレス経験からの成長	.29***	.00	-.03	-.05	-.08	.16**	-.10	-.03	-.05
人生の目的の明確化	.49***	-.14*	.03	-.11	.02	-.04	.01	.02	-.02
周囲との関係性の再認識	.31***	-.01	-.01	-.10	.17**	.00	-.12	-.06	.04

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

3) 偏相関係数の算出

人生ストレス経験への意味づけ方尺度の各下位尺度の間に有意な正の強い相関がみられた(表3)。そのため、3つの各下位尺度について、2つの下位尺度を制御変数とし、残りの1つの下位尺度と上述の外的基準との偏相関係数を算出した(表4)。その結果、「人生の目的の明確化」はSOC-13との間に有意な正の偏相関($r_p=.39$)、人生ストレス経験の深刻度との間に有意な負の偏相関($r_p=-.20$)を示した。

表 4 偏相関分析の結果

	SOC-13	人生ストレス経験 の深さ	人生ストレス経験の種類						
			進路・就職	性格	友人関係	恋愛	家族関係	成績・能力	健康
人生ストレス経験からの成長 ^{a)}	-.02	.08	-.01	-.04	.01	.02	.14*	.00	-.05
人生ストレス経験への意味づけ 方尺度									
人生の目的の明確化 ^{b)}	.39***	-.20	.05	-.04	-.13	-.05	.09	.09	-.02
周囲との関係性の 再認識 ^{c)}	-.03	.07	-.03	-.01	.18**	.01	-.22	-.10	.04

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

a) 制御変数：「人生の目的の明確化」, 「周囲との関係性の再認識」

b) 制御変数：「人生ストレス経験からの成長」, 「周囲との関係性の再認識」

c) 制御変数：「人生ストレス経験からの成長」, 「人生の目的の明確化」

4. 信頼性の検証

1) 内的整合性

Cronbach の α 係数を算出した結果、人生ストレス経験への意味づけ方尺度が.94、第1因子「人生ストレス経験からの成長」が.90、第2因子「人生の目的の明確化」が.89、第3因子「周囲との関係性の再認識」が.88であった(表3)。

2) 折半法

折半法を行った結果、質問項目の偶数の合計と奇数の合計の間に有意な正の相関 ($r=.90$, $p<.001$) がみられた。

第4節 考察

1. 尺度の妥当性について

1) 構成概念妥当性について

因子分析の結果、3因子を抽出した。3因子での累積寄与率は55.34%であった。第1因子「人生ストレス経験からの成長」の12項目のうち11項目は、人生ストレス経験の意味の理解に関する『意味理解』、成長を感じる『有益性発見』、人生ストレス経験を乗り越え自分の一部にするという『アイデンティティの変化』の予備尺度項目から構成されていた。残りの1項目(Q5)は『生きる意味』の予備尺度項目であったが、人生において大切なものに関する有益性発見と捉えられた可能性がある。

第2因子「人生の目的の明確化」の5項目のうち4項目は『人生の目的』の予備尺度項目から構成されていた。残りの1項目(Q15)「この経験によって、私は自分の人生は価値のあるものだと感じた」は『生きる意味』の予備尺度項目であったが、人生の目的をもっていることでもたらされるものと捉えられた可能性がある。

第3因子「周囲との関係性の再認識」は、周囲との関係性の重要性についての『有益性発見』、それらを人生において追求していく『生きる意味』の予備尺度項目から構成されていた。『有益性発見』の予備尺度項目(Q21, Q24, Q27, Q29)については、人生ストレス経験に直面することによって発見された周囲との関係の重要性という有益性が、今後の人生で追求すべき生きる意味を形成していると捉えられた可能性がある。

青年期の自我同一性の形成とは、過去（山岸 1990：26）、その中でも特に危機と向き合い（Erikson=1973：111-2）、それを受容する中で（山岸 1990：26）、それまでとは異なる新たな自分が自分であるという感覚や（Erikson=1973：111-2）、目的意識（Blos=1971：182）、自分の生き方（Blos=1971：182；山岸 1990：26）を形成し、周囲との関係性を築いていくこと（Erikson=1973：111-2）だと考えられる。そして、「人生ストレス経験からの成長」により、青年期の人生ストレス経験と向き合い、それを受容し、新たな自分を形成することが促進されると考えられる。これと類似した意味づけ方は実証研究においても指摘されている（Tedeschi & Calhoun 1996；McMillen & Fisher 1998；宅 2010；Holland et al. 2010；Gan et al. 2013；Kunkel et al. 2014）。

また、上述したように「周囲との関係性の再認識」は今後追求すべき目標や人間関係などを決める生きる意味（Hibbert 2013）と類似していると考えられる。本因子は、青年期の自我同一性形成の中の、周囲との関係性を築いていくこと（Erikson=1973：111-2）と関連していると考えられる。つまり、本因子は、人生ストレス経験を通じて、周囲との関係性の重要性を認識し、周囲との関係性を築くことにつながると考えられる。これは実証研究でも指摘されている意味づけ方である（Tedeschi & Calhoun 1996；McMillen & Fisher 1998；Holland et al. 2010；Gan et al. 2013；Kunkel et al. 2014）。

さらに、「人生の目的の明確化」は生きる意味を追求する枠組みである人生の目的（Hibbert 2013）と類似している。これは、青年期の自我同一性形成の中の、目的意識（Blos=1971：182）、自分の生き方（Blos=1971：182；山岸 1990：26）の形成に関連していると考えられる。すなわち、本因子により、自身の人生の目的意識を形成し、どう生きていくかという自身の生き方を形成していくことにつながると考えられる。これは実証研究でも指摘されている意味づけ方である（Holland et al. 2010；Gan et al. 2013）。

そして、本尺度の各 3 因子間には高い正の相関が確認されたが、これはこの 3 因子が相互に関連しているという先行研究の考え方（Hibbert 2013）と符合する。

さらに、本尺度の 3 因子は予備尺度の 5 つのカテゴリーの項目が混ざりあっていた。これは、本尺度では予備尺度の 5 つのカテゴリーを基にして、青年期に特徴的である新たな人生ストレス経験への意味づけ方を探索的に調査する方法をとったため、各カテゴリー項目の中でこの意味づけ方に関する項目が各因子に集まったことが原因と考えられる。しかし、前述したように抽出された 3 因子は予備尺度の 5 つのカテゴリーをふまえながらも、青年期に特徴的な意味づけ方を表しており、かつ先行の実証研究を支持するものであった。よって、本尺度の構成概念妥当性が示唆された。

2) 基準関連妥当性について

SOC-13 は本尺度及び各下位尺度と有意な正の中等度から強い相関を示した。これは当初の予想を支持しており、本尺度の基準関連妥当性が示された。そして、「人生の目的の明確

化」は、残り2つの下位尺度を制御変数とした場合 SOC-13 との間に有意な正の中等度の偏相関を示した。よって、特定の人生ストレス経験に意味づけ方を生成していくことによって、特定の人生ストレスラーに対処する中で人生の目的を明確にすることは、ストレスラー全般に対処していくために人がもつ志向性 (Antonovsky=2001 : 19) である SOC と関連していることが示された。これは先行研究の考え方 (Gillies & Neimeyer 2006; Park 2010; Hibbert 2013) を支持していた。

また、人生ストレス経験の深刻度は「人生の目的の明確化」との間に有意な負の弱い相関及び偏相関を示し、本尺度の基準関連妥当性が示唆された。「人生の目的の明確化」は「人生ストレス経験からの成長」により過去を受容し、「周囲との関係性の再認識」により今後追求すべき人間関係等を定めることでより強く見出されるため (Hibbert 2013) 、人生ストレス経験の深刻度が高い場合、相関係数は弱かったのではないかと考えられる。一方、人生ストレス経験の深刻度は「人生ストレス経験からの成長」及び「周囲との関係性の再認識」とは無相関であった。よって、これらの下位尺度は人生ストレス経験の深刻度の高低に関わらず見出されることが示唆された。

さらに、当初の予想と反し、「進路・就職」、「成績・能力」及び「健康」人生ストレス経験は本尺度及び各下位尺度とは無相関であった。これは、人生ストレス経験への意味づけがその種類という客観的な内容ではなく、出来事の意味の評価と目標や信念等の包括的意味との不一致という個々人の認知 (Gillies & Neimeyer 2006 ; Park 2010) によって生じるものであることが原因と考えられる。そして、先行研究では自由記述データをもとに、人生ストレス経験の種類をコーディングしているのに対し (宅 2005) 、本研究では種類の選択肢を用意し、そこから選んでもらうという形式をとった。よって、人生ストレス経験に関する詳細な認知を考慮した上で、その種類のコーディングができていないために、人生ストレス経験の種類と本尺度及び各下位尺度との間の関係が正確に測定できなかったと考えられる。

2. 尺度の信頼性について

人生ストレス経験への意味づけ方尺度及び各下位尺度の Cronbach の α 係数は、.88～.94 であり、高い値を示していた。折半法では、質問項目の偶数の合計と奇数の合計の相関係数は .90 ($p < .001$) であり、高い均質性のある人生ストレス経験への意味づけ方を測定できていることが明らかになった。よって、本尺度は十分な信頼性を有していた。

第5節 本研究のまとめと限界

本研究では、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方尺度 (以下、本尺度) を作成し、その信頼性及び妥当性を検証した。その結果、「人生ストレス経験からの成長」、「人生の目的の明確化」及び「周囲との関係性の再認識」という3因子が抽出された。これらは、意

意味づけ研究の理論や実証研究を支持しており、青年期の自我同一性の形成と関連する青年期に特徴的なものであったことから、本尺度の構成概念妥当性が示された。本尺度及び各下位尺度の Cronbach の α 係数は .88～.94 であり、信頼性が示された。また、相関分析を行った結果、本尺度及び各下位尺度は SOC-13 との間に有意な正の相関 ($r=.29\sim.49$)、「人生の目的の明確化」は人生ストレス経験の深刻度との間に有意な負の相関 ($r=-.14$) を示したことから、本尺度の基準関連妥当性が示された。また、3つの下位尺度のうち2つの下位尺度を制御変数とし、残り1つの下位尺度と上記の外的基準との偏相関係数を算出した結果、「人生の目的の明確化」が SOC と正の中等度の偏相関を示しており、本尺度の3つの下位尺度の中でも「人生の目的の明確化」が SOC と関連していることが明らかになった。

一方、本研究の限界として、第1に本尺度の妥当性及び信頼性の検証を本研究でのみ行っているため、今後更なる検証を行っていく必要がある。

第2に本研究の質問票の指示文では、過去の人生ストレス経験の具体的な直面時期についての指定を行わなかった。そのため、直面した時からあまり時間を経っていない人生ストレスサーに関する人生ストレス経験に基づき、回答をした対象者もいたと考えられる。

第3に本尺度の予備尺度項目を作成する時点で想定した各要素の項目数にやや偏りがあったため、因子分析結果にも影響を及ぼした可能性が考えられる。したがって、これらの限界をふまえた上で、今後更なる研究が求められる。

第4に、人生ストレス経験の種類を尋ねる項目設定に問題があったために、本尺度との関係が正確に測定できなかつた可能性がある。今後は、自由記述データを含んだ質問紙調査や、半構造化面接などを用いて、人生ストレス経験の種類と意味づけ方の間の関連を明らかにしていく必要がある。

第4章 青年期のSOCと人生ストレス経験への意味づけ方との関連 —量的研究法を用いて—

第1節 目的

本研究は、青年期後期にあたる青年を対象とし、子育ての質への意味づけ方、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方、並びに青年期のSOC間の関連を明らかにすることを目的とする。

第2節 対象と方法

1. 対象

高校卒業後以降から20代後半の青年期後期（宅 2010：12；戸ヶ里 2011a：44）にあたるA県のB、C大学に在籍する大学生635名を対象とした。

2. 方法

1) 調査内容

2014年12月～2015年1月、大学講義開始直前または終了直後に大学生に対し質問紙を配布し、即日及び配布後4週間以内に回収を行った。調査内容を以下に記す。

①属性

性別、年齢を調べた。

②「子育ての質への意味づけ方」に関する項目

第2章で作成した、子ども時代の親の子育ての質への意味づけ方尺度（以下、子育ての質尺度）を使用した。この得点が高いほど、子ども時代の親の子育ての質への青年の意味づけ方が肯定的であると解釈される。本尺度は、「親からの支援と愛情表現」（13項目）及び「親からの意思決定の尊重」（12項目）の2つの下位尺度で構成される。第2章において本尺度の信頼性及び妥当性が確認されている。各質問項目に対して、「全くそう思わない（1点）」から「とてもそう思う（5点）」の5件法により回答を求めた。各下位尺度について合計点を算出して観測変数とした。

表1 子育ての質尺度の項目

項目	
I. 親からの支援と愛情表現	
Q1	親は、私が困った時相談にのってくれた。
Q2	親は、私が困った時助けてくれた。
Q3	親は様々な関わりを通して、私のことを大切に思っていることを伝えてくれた。
Q4	親は、何を大切だと考えているか、私にはっきり伝えてくれた。
Q5	親は、私がやりたいことを行うことが難しい時、他のことを提案するなど代替案を出して、私を新たに方向づけてくれた。
Q6	親は、私が悲しい時、よく私を慰めてくれた。
Q7	親は、私の抱えている問題や心配に理解を示してくれた。
Q8	親は、私がやりたいことを達成できた時、褒めてくれた。
Q9	親は、私となるべく接する時間をもつようにしてくれた。
Q10	親は私を叱る時、きちんと理由を話してくれた。
Q11	親は、私に優しく、慈愛があった。
Q12	親は、私の手に負えないことが生じた時、きちんと責任をとってくれた。
Q13	親は、私に対していつも一貫した基準にそって対応していた。
II. 親からの意思決定の尊重	
Q14	親は、親の意見を押しつけなかった。
Q15	親は、私自身に決定を下させた。
Q16	親は、私のすること全てをコントロールしようとしなかった。
Q17	親は、私が好んでしたいと思うことをさせてくれた。
Q18	親は私に、親のかなえたかった夢をかなえるように期待しなかった。
Q19	親は、学業やスポーツの成績において、私に能力以上の高い期待をもっていなかった。
Q20	親は、友人と比べて私が劣っている時でも、私を責めることはなかった。
Q21	親は、私を依存させようとしなかった。
Q22	親は、私のプライバシーをおかさなかった。
Q23	親は、過保護ではなかった。
Q24	親は、私がやりたいことに対して、無視や拒否をすることが少なかった。
Q25	親は、私が悪いことをした時、過剰に叱ることはなかった。

③「青年期の人生ストレス経験への意味づけ方」に関する項目

第3章で作成した青年期の人生ストレス経験への意味づけ方尺度（以下、人生ストレス経験への意味づけ方尺度）を使用した。これは、青年が、青年期の期間中である過去5年以内に直面したストレス（Tedeschi & Calhoun 1996）の中で一番深刻であったもの及び対処、適応の経験である人生ストレス経験（宅 2005）に対し、現在生成している意味づけ方を測定する尺度である。この得点が高いほど、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方が肯定的であると解釈される。本尺度は、「人生ストレス経験からの成長」（12項目）、「人生の目的の明確化」（5項目）、「周囲との関係性の再認識」（6項目）の3つの下位尺度で構成される。第3章において本尺度の信頼性及び妥

当性が確認されている。各質問項目に対して、「全くそう思わない（1点）」から「とてもそう思う（5点）」の5件法で回答を求めた。各下位尺度について合計点を算出して観測変数とした。

表2 人生ストレス経験への意味づけ方尺度の項目

項目
I. 人生ストレス経験から成長
Q1 この経験によって、私は強くなった。
Q2 この経験によって、私は成長できた。
Q3 私は、この経験を何とか切り抜けることができたと思う。
Q4 私は、この経験を受け入れられるようになった。
Q5 この経験は、私にとって意味があると思うようになった。
Q6 私は、この経験に納得できるようになった。
Q7 私は、この経験を乗り越えることができたと思う。
Q8 この経験は、私の中の重要な一部となっている。
Q9 この経験によって、私は今までとは違った、新しい自分に変わったと思う。
Q10 この経験によって、私は忍耐強くなった。
Q11 私は、この経験がなぜ起きたのかが分かるようになった。
Q12 この経験によって、私は人生において何が大切なのが分かった。
II. 人生の目的の明確化
Q13 私には人生の意義、目的、使命を見出す能力が、十分にある。
Q14 私という人間は、目的をもった非常に意味ある存在だ。
Q15 私の生き方から言えば、世の中は、非常にしっくりくる。
Q16 生きていく上で私には、非常にはっきりした目標や計画がある。
Q17 この経験によって、私は自分の人生は価値のあるものだと気付いた。
III. 周囲との関係性の再認識
Q18 この経験によって、私は周囲の人々に思いやりをもって接するようになった。
Q19 この経験によって、私は周囲の人々の温かさが分かった。
Q20 この経験によって、私は1日1日を大切に過ごすようになった。
Q21 この経験によって、私は家族の大切さに気付いた。
Q22 この経験によって、私はより深い人間関係を築くことができた。
Q23 この経験によって、私は後悔なく日々の生活を生きたいのだと分かった。

④「青年期のSOC」に関する項目

SOC-13 (sense of coherence scale 13-item version) (Antonovsky=2001:222-5 ;

山崎 1999) を使用した。これは、首尾一貫感覚 (Sense of Coherence; SOC) (Antonovsky=1979: 123; Antonovsky=2001: 19) を測定する尺度である。SOC-13 の得点が高いほど、SOC が高いと解釈される。本尺度は先行研究で妥当性及び信頼性が概ね確認されている (坂野・矢嶋 2005; 戸ヶ里・山崎 2005)。本尺度は、「把握可能感」(5項目)、「処理可能感」(4項目)、「有意味感」(4項目)の3つの下位尺度で構成される。全13項目からなる設問に対し、1点~7点の7件法で回答を求めた。そして各下位尺度について合計点を算出して観測変数とした。

2) 分析方法

データの分析は、R (version 3.3.2) (R Development Core Team 2016) を使用し、有意水準は 10%未満とした。分析の進め方は、要因間の相関関係を把握するため相関係数を算出した。そして、子育ての質への意味づけ方、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方、並びに青年期の SOC という構成概念に関する因果的関連性モデル (仮説モデル) を作成した (図 1)。モデル内の制約については、構造方程式の仮定に従い (豊田 2014: 56)、潜在変数のなかでも外生変数となるものには分散 1 を、また、内生変数となるものには各々の観測変数へのパス係数のひとつを 1 と設定した。このモデルについて最尤法による共分散構造分析を行い、各関係の妥当性、パス推定値の確率及び修正指標を確認しながら最終モデルを導きだした。モデルの適合度については、GFI (Goodness of Fit Index)、AGFI (Adjusted Goodness of Fit Index) 及び RMSEA (Root Mean Square Error of Approximation) を基準とした。なお、多質問項目の欠損値は各質問項目の欠損値の発生頻度を算出して、その起こり方がランダム (MAR; Missing at Random) であるとみなされたので、欠損値に当該尺度の他構成質問項目の平均値を充てた (青木 2015)。

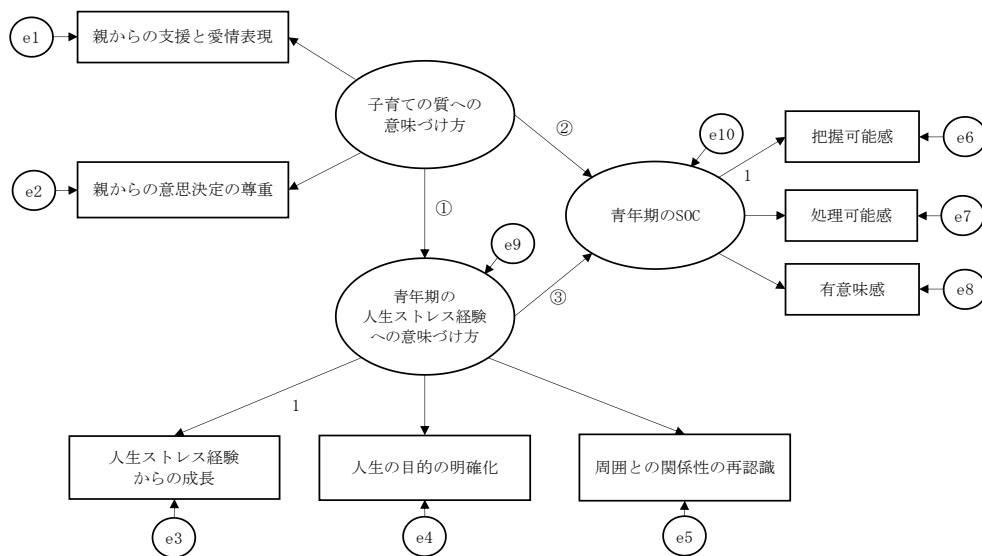


図 1 因果的関連性モデル（仮説モデル）

3) 倫理的配慮について

調査協力の得られた上記の 2 つの大学に所属する対象者には、配布文書及び口頭にて、研究の目的と内容、結果公表の際は匿名化され、データは本研究の目的以外には使用しないこと、参加や撤回などによる不利益は一切ないことを事前に説明した。そして、書面にて調査協力者の同意を得た。なお、本研究は日本福祉大学大学院の倫理審査を受け承認を得た上で実施した（申請番号 14-003）。

第 3 節 結果

1. 回収率及び対象者の属性

調査の回収数は 322 名であった（回収率 50.7%）。その中で各尺度に関し 1 割以上欠損値のあるもの、調査に用いたいずれかの尺度の中で 9 割以上同じ回答をしているものを除く 270 名を有効回答とした（有効回答回収率 42.5%）。被対象者の平均年齢は 20.3 ± 1.07 歳であった。性別は男性 101 名（37.4%）、女性 169 名（62.6%）であった。

2. 要因間の相関関係

子育ての質尺度及び各下位尺度、人生ストレス経験への意味づけ方尺度及び各下位尺度、並びに SOC-13 及び下位尺度間の相関係数を算出した（表 3）。その結果、多くの要因間において有意な正の相関関係が確認された。特に、子育ての質尺度及び各下位尺度、並びに、人生ストレス経験への意味づけ方尺度及び各下位尺度は、有意味感との間に有意な正の中等度から強い相関を示した。しかし、把握可能感との間には無

相関、有意傾向あるいは有意な正の弱から中等度の相関のみを示すにとどまった。

3. 因果的関連性モデル（最終モデル）の適合度と要因間の関連性の検討

先行研究に基づいて作成した子育ての質への意味づけ方、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方、並びに青年期のSOC間の関連に関する因果的関連性モデル（仮説モデル）（図1）について共分散構造分析を行った。パスの妥当性及び修正指標を考慮しながらモデルを改良した結果、図2の最終モデルが最も妥当性が高いモデルと判断して採用した（図2）。このモデルは、調査データとの適合性を示す指標であるGFI、AGFI及びRMSEAが、GFI=.950、AGFI=.889、RMSEA=.099であった。これらの最終モデルの適合度指標は、モデルを採択する基準（豊田 2014：34, 191）を概ね満たしていたため、最終モデルは妥当性があると評価した。全てのパス係数は有意水準1%で有意であった。

まず、構成概念から各観測変数へのパスについては、子育ての質への意味づけ方から親からの支援と愛情表現及び親からの意思決定の尊重へのパス係数が.91と.68であった。次に青年期の人生ストレス経験への意味づけ方からストレスからの成長、人生の目的の明確化及び周囲との関係性の再認識へのパス係数がそれぞれ.80、.80、.89であった。次に青年期のSOCから把握可能感、処理可能感及び有意意味感へのパス係数がそれぞれ.27、.40、.94であった。青年期のSOCから把握可能感へのパス係数が.27とやや低いものの、すべて有意な指数であり、構成概念と観測変数との対応は適切なものと判断した。

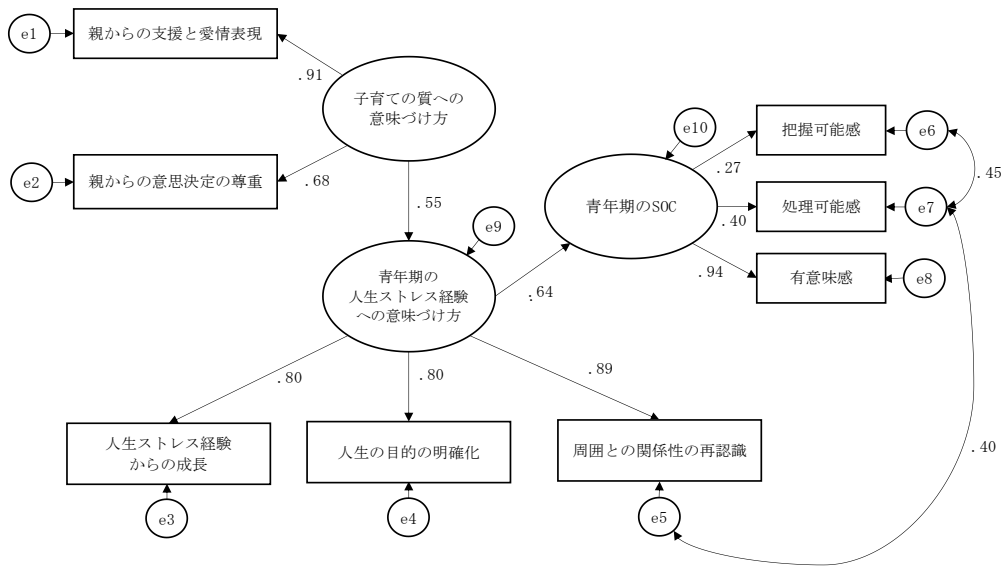
次に、各構成概念間の関連をみると、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方に対し子育ての質への意味づけ方は有意な正のパス(.55)を示した。また、青年期のSOCに対し青年期の人生ストレス経験への意味づけ方は有意な正のパス(.64)を示した。しかし、子育ての質への意味づけ方から青年期のSOCへの有意なパスは認められなかった。

最終モデルでは、修正指標に基づき、周囲との関係性の再認識と把握可能感との間に有意な正の誤差共分散関係、把握可能感と処理可能感との間に有意な正の誤差共分散関係が設定された。

表3 要因間の相関係数

	1	1-2	1-3	2	2-1	2-2	2-3	3	3-1	3-2	3-3
1. 子育ての質尺度	1										
1-2. 親からの支援と愛情表現	.91 ***	1									
1-3. 親からの独立性の尊重	.88 ***	.62 ***	1								
2. 人生ストレス経験への意味づけ方尺度	.44 ***	.45 ***	.33 ***	1							
2-1. 人生ストレス経験からの成長	.38 ***	.38 ***	.30 ***	.94 ***	1						
2-2. 人生の目的の明確化	.33 ***	.33 ***	.25 ***	.83 ***	.65 ***	1					
2-3. 周囲との関係性の再認識	.47 ***	.49 ***	.33 ***	.89 ***	.72 ***	.70 ***	1				
3. SOC-13	.28 ***	.22 ***	.30 ***	.38 ***	.29 ***	.49 ***	.31 ***	1			
3-1. 把握可能感	.11 †	.06	.14 *	.14 *	.10 †	.24 ***	.08	.78 ***	1		
3-2. 処理可能感	.23 ***	.15 *	.27 ***	.20 **	.15 *	.30 ***	.12 †	.81 ***	.52 ***	1	
3-3. 有意味感	.32 ***	.30 ***	.28 ***	.54 ***	.42 ***	.58 ***	.51 ***	.71 ***	.26 ***	.38 ***	1

†p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001



N=270, GFI=.950, AGFI=.889, RMSEA=.099, 標準化係数を表示(p<.01)

図2 因果的関連性モデル（最終モデル）

第4節 考察

1. 要因間の相関関係

要因間の相関係数を算出した結果、多くの要因間で有意な正の相関が確認された。しかし、子育ての質尺度及び各下位尺度、並びに、人生ストレス経験への意味づけ方尺度及び各下位尺度は、把握可能感との間に無相関、有意傾向あるいは有意な正の弱から中等度の相関のみを示すにとどまった。子育ての質尺度及び人生ストレス経験への意味づけ方尺度は、人生出来事や状況対処等経験への意味づけ方に含まれており、SOCの3要素の中の有意味感と深く関連していると考えられる（戸ヶ里 2008b : 61）。実際に、これらの尺度は有意味感との間に有意な正の中等度から強い相関を示していた。そして、把握可能感は人生出来事や状況対処等経験を客観的に把握していく感覚であるが、有意味感はこの客観的に把握された事実に対し主観的な意味づけを行って

いく感覚であり、両者は性質が異なっていると考えられる。このため、把握可能感は子育ての質尺度及び各下位尺度、並びに人生ストレス経験への意味づけ方尺度及び各下位尺度と無相関、有意傾向あるいは有意な正の弱から中等度の相関のみを示すにとどまったと考えられる。

2. 子育ての質への意味づけ方、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方並びに青年期の SOC 間の関連

先行研究を基に、子育ての質への意味づけ方、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方、並びに青年期の SOC 間の関連に関する因果的関連性モデル（仮説モデル）（図 1）を作成し、共分散構造分析による検証を行った。各構成概念に対する観測変数はすべて有意で、青年期の SOC から把握可能感へのパス係数以外は、中から高い正のパス係数を示し、構成概念と観測変数の対応は適切なものであると判断された。青年期の SOC から把握可能感へのパスは有意な正のパス係数を示しているが、その値は高いものではなかった。青年期の SOC に対する観測変数として SOC-13（Antonovsky=2001：222-5；山崎 1999）を用いている。SOC-13 については、概ね信頼性及び妥当性が確認されている（坂野・矢嶋 2005；戸ヶ里・山崎 2005；）。一方、SOC-13 の確証的因子分析の結果については、把握可能感、処理可能感及び有意味感の 3 因子構造（戸ヶ里・山崎 2005）、把握可能感と処理可能感を統合した把握処理可能感及び有意味感との 2 因子構造（坂野・矢嶋 2005）という異なる報告がなされており、因子構造については検証を重ねていく段階にあると言える。このことが、本研究において、青年期の SOC から把握可能感へのパス係数が高くなかったことの一因であると考えられる。今後は SOC を測定する尺度を再検討するなどした上で、更に検証を行っていく必要がある。

各構成概念間の関連については、子育ての質への意味づけ方は青年期の人生ストレス経験への意味づけ方に有意な正のパスを示したこと（仮説①）、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方が青年期の SOC に有意な正のパスを示したこと（仮説③）が明らかになった。一方、仮説②に反し、子育ての質への意味づけ方は青年期の SOC に対し有意なパスを示さなかった。

青年期の SOC に対し直接有意な正のパスを示したのは、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方であったことから（仮説③）、青年期の人生ストレス経験への肯定的意味づけ方は青年期の SOC 形成を直接的に促進することが示唆された。これは、青年が青年期のストレスサーに対し様々な対処を行うことができたことにより、豊かな意味づけ方が生成されたことが要因であると考えられる。発達に伴って青年は、子ども時代と比して、ストレスサーに対し様々な対処方法を考え、実行できるようになると考えられる。そして、ストレスサーに直面してから時間を経る中で、ストレスサーやその対処等経験に対し意味づけを行う際（Gillies & Neimeyer 2006）、様々な対処方法

を用い対処してきた自身の経験の記憶が呼び起され、自身の頑張りや周囲の支援など様々な肯定的側面に気づき、これらに基づきより豊かな肯定的意味づけ方が生成されたと考えられる。それらは GRRs の気づきや形成、さらにはストレス対処における GRRs の動員方法の修得を意味し、青年期の SOC と正の関連を示したと考えられる (Antonovsky=1979 : 123 ; 山崎 2008a : 21)。先行研究においても、ストレス対処に対し様々な対処を行っていく中で、それらを基に人生ストレス経験に対して意味づけを行い、肯定的な意味づけ方を生成していくことが指摘されている (宅 2005; 原 2012)。

そして、子育ての質への意味づけ方は、青年期の SOC ではなく、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方に有意な正のパスを示し (仮説①)、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方が青年期の SOC に有意な正のパスを示した (仮説③)。よって、子育ての質への意味づけ方は、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方を媒介して、青年期の SOC と間接的に正の関連を有していると考えられるため、青年期の SOC 形成を間接的に促進することが示唆された。子ども時代の親の子育ての質は GRRs の源泉であるため (Antonovsky=1979 : 123 ; 山崎 2008a : 20)、GRRs の気づきや形成と関連する、青年期の人生ストレス経験への肯定的な意味づけ方と正の関連を示したと考えられる。そして、この青年期の人生ストレス経験への意味づけ方は、先述した要因から青年期の SOC との正の関連を示したと考えられる。

青年期の SOC 形成と直接的に関連していたのは、子育ての質への意味づけ方ではなく、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方であった。よって、子育ての質への意味づけ方が肯定的でなかった場合でも、支援者の支援 (狭間 2001 : 141 ; Germain & Gitterman=2008 : 57 ; 原 2012 ; 松井・笹井 2013 ; Fenstermacher 2014) などの他の促進要因によって青年が青年期の人生ストレス経験への肯定的意味づけ方を生成できた場合、SOC が形成されることもあると考えられる。子育ての質への意味づけ方は、子ども時代の実際の子育ての質の内容を反映している可能性が高いと考えられるため、子ども時代の子育ての質が良質ではない場合、子育ての質への意味づけ方も肯定的ではない可能性が想定される。そして、子どもは生育環境を選ぶことはできないため、子育ての質が良質であるかどうかは子ども自身の意思によって決まるものではない。しかし、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方を生成することは、周囲の支援者の支援も受けながらも (狭間 2001 : 141 ; Germain & Gitterman=2008 : 57 ; 原 2012 ; 松井・笹井 2013 ; Fenstermacher 2014)、青年自身が行っていくことである。よって、本研究結果より、自身の意思によらず、SOC 形成にとって不利になるような生育環境に置かれていた青年が、自分自身の意思と行動により、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方を生成し、自身の SOC 形成を促進していくことができる可能性が示唆されたと言える。そして、次章の第 5 章、第 6 章において、青年期の人生ストレス経験への支援者による支援内容を明らかにしていくこととする。

最終モデルで設定された把握可能感と処理可能感との間の正の誤差共分散については、先行研究（坂野・矢嶋 2005）を支持していた。また、処理可能感と周囲との関係性との正の誤差共分散も設定された。処理可能感とは、刺激への対処に十分な資源を自由に使える感覚であり（Antonovsky=2001：21-3）、周囲との関係性の再認識は、周囲との関係性を重要視することである。そして、処理可能感が高い場合、ストレスサ－への対処を行う際、周囲の人々に助けをもらうため、助けてくれた周囲の人々との関係性を重要視していくという周囲との関係性の再認識が生成されると考えられる。よって、処理可能感と周囲との関係性の再認識と処理可能感との正の誤差共分散が設定されたと考えられる。

第5節 本研究のまとめと限界

本研究では、青年期のSOCと関連する要因として人生出来事や状況対処等経験への意味づけ方、すなわち子育ての質への意味づけ方及び青年期の人生ストレス経験への意味づけ方を取り上げた。そして、これらの要因間の関連について共分散構造分析を用いて検証した。その結果、子育ての質への意味づけ方は青年期の人生ストレス経験への意味づけ方に有意な正のパスを示し、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方は青年期のSOCに有意な正のパスを示すことが明らかになった。よって、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方は青年期のSOC形成を直接的に促進すること、並びに、子育ての質への意味づけ方は青年期の人生ストレス経験への意味づけ方を介して青年期のSOC形成を間接的に促進することが示唆された。そして、自身の意思によらず、SOC形成にとって不利になるような生育環境に置かれ、子育ての質に対し肯定的な意味づけ方を生成できない場合においても、青年が自身の意思と行動により、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方を生成し、SOC形成を促進していくことができることが示唆された。

しかし、本研究の今後の課題として以下の1点が挙げられる。すなわち、本研究では横断的研究方法を基に、人生ストレス経験に対する現在の意味づけ方と青年期のSOCとの関連を調べた。よって、人生ストレス経験に対する意味づけ方が青年期のSOCを形成していくという因果関係までは言及できない。したがって、今後は介入研究デザインの縦断的研究を用いて、青年が青年期の人生ストレス経験に対し意味づけを行うプロセス及びそれによって生成された意味づけ方がSOCに影響を与える因果関係を検証していくことが求められる。

第5章 青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程並びにそれへの支援者による効果的支援内容 —質的研究法を用いて—

第1節 目的

本研究では、質的研究法によって、青年期後期に属する青年が青年期の人生ストレス経験への意味づけ方を生成する過程並びに支援者による効果的支援内容を明らかにし、第3章の量的研究結果を併合した混合研究法という視点から考察を行うことを目的とする。

第2節 対象と方法

1. 研究対象者

高校卒業後から20代後半の青年期後期（宅 2010：12；戸ヶ里 2011a：44）にあたる、A県のB大学、C大学の大学生6名である。調査時期は、2015年11月～12月である。

2. 方法

1) 調査手続き及び倫理的配慮

研究対象者のリクルート方法は、以下の通りである。2014年12月～2015年1月、書面で研究参加に同意したA県のB大学、C大学の大学生270名に対し、第2章（調査1分析1）、第3章（調査1分析2）、並びに第4章（調査1分析3）に関する調査1の質問紙調査を大学講義開始直前または終了直後に実施した。第2章、第3章、第4章で述べたように、この調査1では、幼少期から12歳頃までの親の子育ての質への意味づけ方、青年期の人生ストレス経験の種類・深刻度・それへの意味づけ方、SOC-13を尋ねた。そして、この対象者270名に対し、後日この調査と関連した面接調査が行われることを口頭及び書面で説明し、それについて協力意思の有無を書面で確認した。本研究への協力意思を書面で確認した40名に対し、2015年9月、Eメールの書面で本研究の詳細を説明し、本研究への正式な協力意思を確認した。ここでは、第2章、第3章、並びに第4章の分析に関する質問紙調査で尋ねた、「過去5年間の間にかかえたストレス経験の中で、一番深刻であった内容」について尋ねる旨を説明し、本研究への正式な協力意思を確認した。そして、最終的にEメールで本研究への協力が得られた6名を本研究の研究参加者とした（表1）。

しかし、研究対象者がこのような過去5年間で一番深刻であった人生ストレス経験について面接者に語ることは、精神的苦痛を生じさせる可能性があると考えられた。よって、インタビュー調査実施前に、調査内容を、青年期に直面した人生ストレス経験の中で、面接者に話すことができるものについて変更した。青年が話しても良いと

感じる人生ストレス経験は、青年の中で肯定的意味づけ方が生成され、面接者に話すことで生じる精神的苦痛を最小限に抑えられると考えられたからである。

そして、インタビュー調査実施時に、E メールで調査協力を依頼した際と尋ねる人生ストレス経験が異なっている旨を口頭及び書面で説明し、インタビュー調査への参加への意思を確認した。そして、6名全員の同意が得られた。

また、このインタビュー調査の際に、配布文書及び口頭にて、研究の目的、内容及び倫理的配慮について説明し、結果公表に際しての匿名性を保証した。また、データは統計処理をして本研究の目的以外には使用しないこと、参加や撤回などによる不利益は一切ないことを説明した。そして、書面にて研究対象者の調査参加及びインタビュー内容の録音に関する同意を得た。また、本研究は日本福祉大学大学院福祉社会開発研究科の倫理審査を受け承認を得た上で実施した（申請番号 14-002）。

表 1 研究対象者のデータ

	性別	年齢	人生ストレス経験に直面した時期	人生ストレス経験の内容
A	女性	22歳 (大学4年生)	大学入学時から大学2年生	体調の悪化
B	女性	22歳 (大学4年生)	高校2年生	家族との死別
C	女性	22歳 (大学4年生)	中学2年生から3年生	友人関係の悪化
D	男性	21歳 (大学4年生)	中学1年生から2年生	部活動
E	男性	23歳 (大学3年生)	高校卒業後2年間	仕事
F	女性	21歳 (大学4年生)	大学4年生	進路

2) データ収集方法

本研究では、インタビュー・ガイドに基づき、1人につき計一回の半構造化面接を行った。平均面接所要時間は約1時間7分であった。面接内容は、ICレコーダーに録音し、それを基に逐語録を作成した。

3) インタビュー・ガイド

以下の質問項目からなるインタビュー・ガイドを作成した。そして、インタビュー実施前に研究対象者にこのインタビュー・ガイドを配布し、研究対象者が質問内容を把握できるようにした。

①中学校入学時から今まで生きてきた中で、ストレスだと感じた経験(ストレス経験)の中で、面接者に話すことができるストレス経験の内容。

- ②①の経験をした時期.
- ③①の経験をした時感じたこと.
- ④その後、①の経験に対して行った対処及びうまく対処できた程度（10段階評価）.
- ⑤対処をする際、助けになった人や物事（例えば、書籍、名言、格言など）及びその支援内容.
- ⑥①の経験を通じて、自身が成長できたと現在感じる程度.

面接では、大学生である研究参加者が人生ストレスに直面した時期として、12歳前後から20代後半の青年期（戸ヶ里 2011：44）の中に入るよう、「中学校入学時から今まで生きてきた中」という表現で尋ねた。

4) 分析方法

データは修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach; M-GTA）（木下 2003；2007；2014）を用いて分析した。M-GTAは、ヒューマンサービス領域における、人と人との直接的やりとりに関係した、プロセスとしての現象を明らかにするのに適している（木下 2003：89-91）。そして、本研究はこのような現象を明らかにするため、M-GTAを選択した。

M-GTAにおける分析では、研究テーマをデータに即して分析していくために絞り込んだ分析テーマ（木下 2007：144）、分析結果の適応可能範囲、一般化可能範囲である分析焦点者（木下 2007：157）の2つの視点が重要になる。本研究の分析テーマは、「青年期後期にあたる青年が、青年期の期間の中で直面した人生ストレス経験に対し、支援者による効果的支援内容を受けながら、意味づけ方を生成する過程」である。また、本研究の分析焦点者は、「青年期の期間の中でストレスフルな人生ストレス経験に直面したことがある、青年期後期にあたる青年」である。

この分析テーマと分析焦点者の2つの視点からデータを分析していき、データから解釈によって生成する分析上の最小単位である概念、複数の概念の関係からなるカテゴリー、必要に応じて両者の間にサブカテゴリーを設定した（木下 2014：139）。データから概念を生成する際に、分析ワークシートを用いた。これは、各概念に対して作成されるもので、概念名、定義、概念に関連するデータである具体例（ヴァリエーション）、浮かんだ疑問や解釈上のアイデアを記入する理論的メモの4つの欄から構成される（木下 2014：143-4）。

そして、新たな概念が見出せない状態である理論的飽和化（木下 2007：223）に達した段階で、概念やカテゴリー等の関係性を結果図に記し、その関係性をストーリーラインとして言語化した（木下 2007：226-9）。

さらに、得られた分析結果の質の担保のために、研究対象者に分析結果についてコメントをもらう member checking を行った。また、保健学の学位を有し、質的研究方

法に精通した教員に質問項目の表現方法や分析方法について定期的なアドバイスを受けた。

第3節 結果

1. 概念及び結果図

データ分析を行い、31個の概念、8個のサブカテゴリー、8個のカテゴリーを抽出した（表2）。本研究における、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程、並びにその過程における支援者による効果的支援内容についての結果図は図1に示した。

表2 青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程、並びにその過程における支援者による効果的支援内容を表す概念等

カテゴリー	サブカテゴリー	概念	概念定義
辛い状況に置かれること	心理的混乱	青年期の人生ストレスラーへの直面	青年期の中で、ストレスフルな人生出来事や状況である人生ストレスラーに直面すること。
		既存の信念・対処方法を変えられないこと	人生ストレスラーの評価に関連する既存の信念や効果的ではない対処方法を変えられないこと。
	原因や対処方法の分からなさ	人生ストレスラーに直面した時、原因や対処方法が分からないこと。	
	ストレスを感じる	人生ストレスラーに直面することで感じる、心理的及び身体的苦痛。	
支援者への頼りにくさ	試行錯誤の対処	人生ストレスラーやストレスに対し、試行錯誤しながら様々な対処を行うこと。	
	支援者が見つからないこと	支援者がいなかったり、頼りたい支援者がいても頼りにくいこと。	
自身に合った支援者への支援の求め	気持ちへの理解のなさ	支援者が、自分の気持ちを理解してくれないこと。	
	既知の支援者への支援の求め	人生ストレスラー直面時以前から知っている支援者に支援を求めること。	
	新たな支援者との出会い	人生ストレスラー直面時以降、新たな支援者と出会うこと。	
他の支援者による支援の促進	関連の少ない支援者への求め	人生ストレスラーと深く関連している支援者には頼りにくいいため、関連の少ない支援者に支援を求めること。	
	他の支援者による支援の促進	他の支援者が、支援者を紹介したり、支援者に働きかけてその支援内容の質を高めること。	
支援者による効果的支援内容	対処への支援	対処方法選択への支援	支援者が、人生ストレスラーやストレスへの対処方法を一緒に考えてくれること。
		対処行動への支援	支援者が、自分が人生ストレスラーやストレスに対し対処を行う際、手助けをしてくれること。
	人生ストレスラーの見方・認識への支援	信念の転換への支援	支援者が、人生ストレスラーと関連する既存の信念を転換するような支援を行うこと。
		原因理解への支援	支援者が、人生ストレスラーやストレスに対し効果的な対処を行うことができていない原因について一緒に考えてくれたり、原因についての手がかりを与えてくれること。
	感情面への支援	気持ちの理解	支援者が、人生ストレスラーやストレスに関する話を聞き、気持ちを理解してくれること。
		自身のペースの尊重	支援者が、人生ストレスラーやストレスのことについて無理に聞かず、自分自身のペースを尊重してくれること。
		他愛無い雑談	支援者が、趣味や日常的な出来事などの他愛無い雑談などをしてくれること。
	効果的対処の実現	効果的対処の実行	状況を変えていくために効果的な見方・認識や行動である対処方法が分かり、実行できるようになる。
肯定的感情の生起		居場所の形成	学校の中で、安心できる居場所を見つけること。
		支援者への信頼感の形成	支援者を信頼し、精神的に支えられていると感じるようになること。
意味づけし直しの試み	ストレスの緩和	人生ストレスラーに直面することで感じていたストレスが緩和されること。	
	成長の自覚	時間が経過する中で、様々な経験を通して成長し、物事を多面的に考えることができるようになること。	
肯定的意味づけ方の生成	人生ストレス経験の見方・認識の肯定的変化	人生ストレス経験の原因理解	人生ストレス経験の原因を理解できるようになること。
		人生ストレス経験の受容	人生ストレス経験を否定せず、受け容れられるようになること。
	自身への信頼感の形成	自身への信頼感の形成	人生ストレス経験に直面したにも関わらず、今まで頑張ってきたことで、自分自身を信頼できるようになること。
		目標形成と実現への努力	自分自身が実現したい目標を見出し、既存の目標の内容をより明確にし、目標実現に向かって努力していくこと。
	新たな信念・目標の形成と実践	人に頼っても良いという気付き	人に頼ることは悪いことではないと気付き、頼ることができる支援者ができること。
		新たな信念の形成と実践	人生の指針となる新たな信念が構築され、それを実践していくこと。
否定的意味づけ方の生成	否定的意味づけ方の生成	人生ストレス経験に対し、後悔や自分を責めたりするなど、否定的な意味づけ方を生成すること。	

2. ストーリーライン

概念を「 」, サブカテゴリーを【 】 , カテゴリーを< > , インタビュー・データからの引用を『 』, 発言者を()で示す。

青年は「青年期の人生ストレスラーへの直面」時、【心理的混乱】に陥り、【支援者への頼りにくさ】を感じ、「試行錯誤の対処」を行う中で、「ストレスを感じること」

につながる<辛い状況に置かれること>になる。そして、青年はこの<辛い状況に置かれること>から抜け出すために、<自身に合った支援者への支援の求め>をもつようになる。この中で、青年は自身が直面した人生ストレスと「関連の少ない支援者への支援の求め」をもち、新たな支援者を紹介してもらおうという<他の支援者による支援の促進>が行われる中で、自身に合った「既知の支援者への支援の求め」や「新たな支援者との出会い」が行われる。

その結果、青年は自身に合った<支援者による効果的支援内容>を受けられるようになる。そして、この支援を受けながら、人生ストレスやストレスに対し効果的対処の実現<が可能となる。また、その後時間を経る中で、青年期の人生ストレス経験について振り返り、自分なりの意味づけ方を再度考え直す<意味づけし直しの試み>が行われる。

そして、<支援者による効果的支援内容>を受けながら、<効果的対処の実現>及び<意味づけし直しの試み>を行う中で、青年は青年期の人生ストレス経験に対し【人生ストレス経験の見方・認識の肯定的変化】、【新たな信念・目標の形成と実践】並びに「自身への信頼感の形成」という<肯定的意味づけ方の生成>を行っていた。一方で、青年期の人生ストレス経験に対し、後悔や、自分を責めるなどの<否定的意味づけ方の生成>も行っていた。

これらの過程は、意味づけ方を生成していく前段階である意味づけ方生成準備期、並びに意味づけ方を生成していく意味づけ方生成期の2段階に分けられると考えられる。以下で、各段階のカテゴリーごとにみていく。

1) 第1段階：意味づけ方生成準備期

①<辛い状況に置かれること>

青年は「青年期の人生ストレスへの直面」時、「既存の信念・対処方法を変えられないこと」や「原因や対処方法の分からなさ」から成る【心理的混乱】に陥る。そして、青年は、ストレスに対し「試行錯誤の対処」を行っていくが、効果的な対処を行うことができないことによって、さらに【心理的混乱】に陥るようになる。また、青年は、頼ることのできる支援者がいないという「支援者がみつからないこと」や、支援者に頼った場合においても支援者による「気持ちへの理解のなさ」という【支援者への頼りにくさ】を感じる。このような状況の中で、「ストレスを感じること」にますますつながるという<辛い状況に置かれること>になる。

ある青年は、「原因や対処方法の分からなさ」、「ストレスを感じること」について次のように語っていた。『自分が何で出来ないのか分かんないっていうのが、その頃の自分にはあったんで、それがもう恥ずかしい情けない、っていうのはあったんだなあ、って思います』。(D)

②<自身に合った支援者への支援の求め>

このようなく辛い状況に置かれること>から抜け出すために、青年は<自身に合った支援者への支援の求め>をもつようになる。これは、青年が青年期の人生ストレスと関連の多い支援者には頼りにくいと感じるため「関連の少ない支援者への支援の求め」をもち、「既知の支援者への支援の求め」や「新たな支援者との出会い」を実現していく中で行われる。また、<自身に合った支援者への支援の求め>は、<他の支援者による支援の促進>により新たな支援者を紹介してもらうことによっても可能となる。

ある青年は、「関連の少ない支援者への求め」について次のように語っていた。『とにかく大人に守られてるって思って思うだけで、こう何か、安心出来たというか、私守られてる、大丈夫だ、っていう風に思っていたので。何か、ちょっと攻撃してきたり。直接的ではないにしろ、何かちょっと視線で攻撃されてしまったりとか、とかあったので、あんまり同い年に対して、あんまりこう、いいイメージがない』。(C)

2) 第2段階：意味づけ方生成期

①支援者による効果的支援内容

そして、青年は自身に合った支援者から<支援者による効果的支援内容>を受けようになる。<支援者による効果的支援内容>には、人生ストレスやストレスへの対処方法を一緒に考えていく「対処方法選択への支援」を行う中で、人生ストレスやストレスへの「対処行動への支援」が行われる【対処への支援】、人生ストレスやストレスの「原因理解への支援」を行う中で、人生ストレスへの評価に影響を与えた既存の「信念の転換への支援」が行われる【人生ストレスの見方・認識への支援】、人生ストレスやストレスについて無理に聞くことのない青年「自身のペースの尊重」や「他愛無い雑談」の中で青年の「気持ちの理解」が行われる【感情面への支援】が相まって行われる。この<支援者による効果的支援内容>は、上述した<辛い状況に置かれること>、後述する<効果的対処の実現>、<肯定的意味づけ方の生成>にも影響を与えていた。

ある青年は、「信念の転換への支援」、「ストレスの緩和」について、次のように語っていた。『結構周りが、学生課の先生が一番、関わったかな、っていう感じなんですけど、最初から。大丈夫、死なないは前提に。死なないからどうなっても大丈夫っていうのを教えてくれたので、ま、どうにかなる、かな、みたいな。なっても大丈夫って思えるので、それが一番。死なないのは大きいっていうか。一番安心かなって思って』。

(A)

②他の支援者による支援の促進

そして、＜他の支援者による支援の促進＞により、他の支援者が、青年に合った支援者を紹介することで、＜自身に合った支援者への支援の求め＞が実現すること、さらには当該支援者に働きかけ＜支援者による効果的支援内容＞の質を高めていくことにつながる。

ある青年は、＜他の支援者による支援の促進＞、＜支援者による効果的支援内容＞について、次のように語っていた。『一回その母と、懇談してくれた時が、相談室の先生があって。それからちょっと母も変わって。ちゃんと、嫌なことあってね、とかって言ったら、どんなことあったのって聞いてくれたり』。(C)

③効果的対処の実現

＜支援者による効果的支援内容＞を受けながら、青年は人生ストレスやストレスへの「効果的対処の実行」を行い、【肯定的感情の生起】へとつながるという＜効果的対処の実現＞が可能となる。【肯定的感情の生起】は、学校の中で安心していることができる居場所を見つける「居場所の形成」、支援者を信頼し、精神的に支えられていると感じるようになる「支援者への信頼感の形成」、人生ストレスに直面することで感じていた「ストレスの緩和」が相まって生じる。

ある青年は、「居場所の形成」について次のように語っていた。『学校っていう場所自体が、ほんとにどんよりして、何かこう紫がかったように見えるような、そんなイメージなんですけど、その相談室だけは、別空間というか、学校の中でも違う場所のように思えたので、そこだけ行くと、何かこう強力なバリアで守られてるような、そんな感覚でした』(C)

④意味づけし直しの試み

さらに、＜効果的対処の実現＞から時間を経る中で、様々な経験を通して青年自身の「成長の自覚」が促され、物事を多面的に考えられるようになる。そして、青年期の人生ストレス、それへの対処、その後の適応を含む人生ストレス経験について振り返り、「意味づけし直し」を行うという＜意味づけし直しの試み＞が行われる。

ある青年は、「成長の自覚」、「意味づけし直し」について、次のように語っていた。『最初大学入学して1年は、遅れて入ったっていうのもあるし、仕事を辞めたっていう、その後ろめたさがあったんですけど、でも、みんながフランクに、その同い年ぐらいに接して下さるんで、それで、あんまり入った、2年生になった時ぐらいからそんな思わなくなって。で、それをどう活かして行けばいいのかっていう風に考えたのはその時期ぐらいですね』。(E)

⑤肯定的意味づけ方の生成

そして、＜支援者による効果的支援内容＞を受けながら、＜効果的対処の実現＞及び＜意味づけし直しの試み＞を行う中で、青年期の人生ストレス経験に対し＜肯定的意味づけ方の生成＞を行っていく。＜肯定的意味づけ方の生成＞では、「目標形成と実現への努力」を行いながら、人生の指針となる「新たな信念の形成と実践」がなされ、人生ストレスに直面した時に「人に頼っても良いという気付き」を得るという【新たな信念・目標の形成と実践】がなされ、「自身への信頼感の形成」へとつながる。また、「人生ストレス経験の原因理解」が行われることによって「人生ストレス経験の受容」がなされるという【人生ストレス経験の見方・認識の肯定的変化】が生じる。

ある青年は、「目標形成と実現への努力」、「自身への信頼感の形成」について、次のように語っていた。『ちゃんと自分のやるべきことが、前よりはずっと明確になったっていうか、っていうのが出来るようになって来たので、悩んでた時よりはやっぱ、自分の気持ちにも余裕があるし、もっとう自分に自信を持てるようになれた、っていうか、何か、今の自分に満足してるっていうのが、だいぶ増えたかなあっていう感じがします』。(F)

⑥否定的な意味づけ方の生成

このように＜肯定的意味づけ方の生成＞がなされる一方で、青年期の人生ストレス経験に対し、後悔や、自分を責めるなどの＜否定的意味づけ方の生成＞も行われていた。

ある青年は、＜否定的意味づけ方の生成＞について、次のように語っていた。『もう時間をやり直せるなら、もうあの時あーすればよかったとか思って、親とも、時々そういう亡くなった家族の話にはなって、あの時ああすればよかったなあ、とかあったり』。(B)

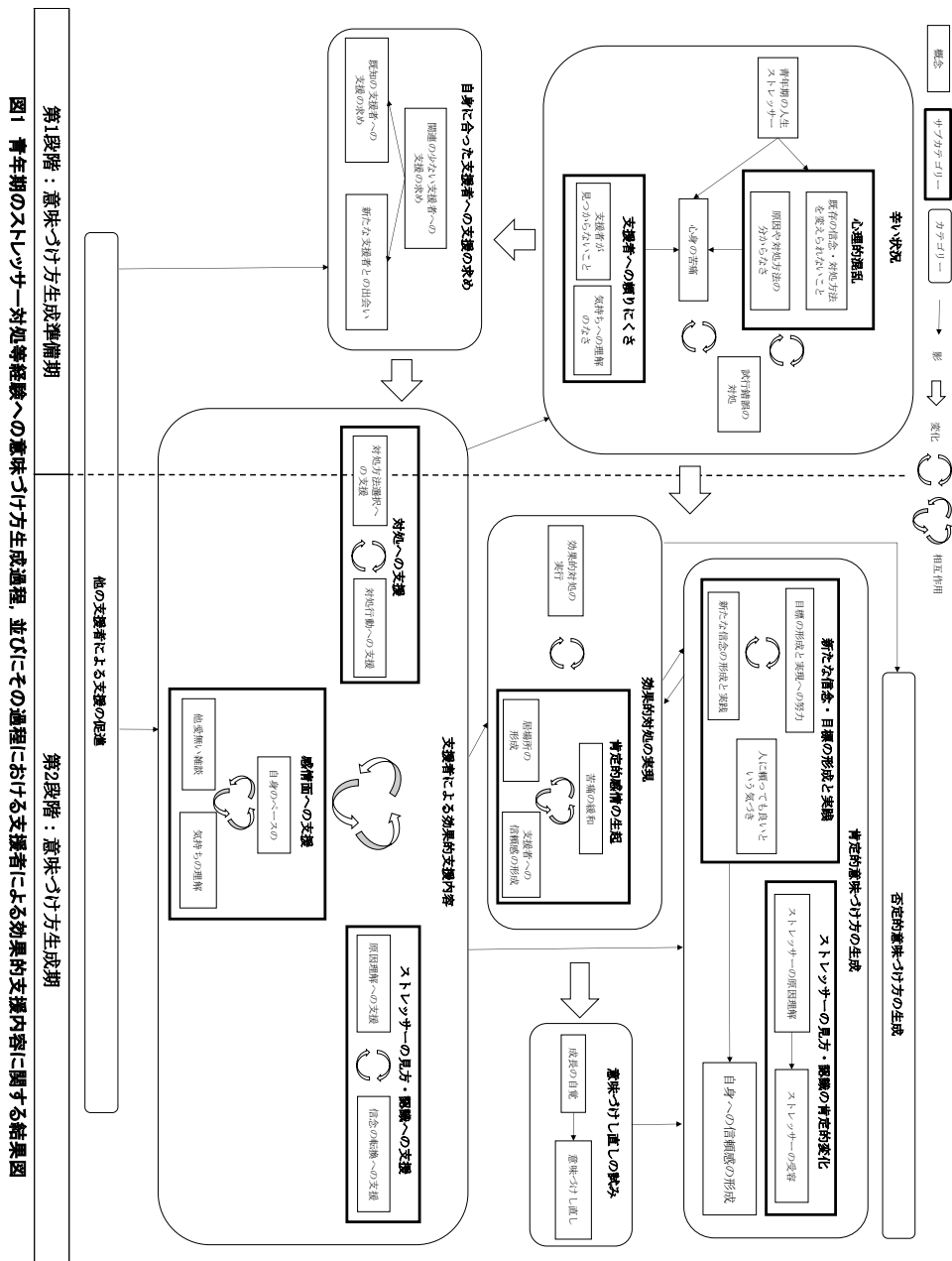


図1 青年期のストレス体験に対する支援者による効果的支援内容に関する結果図

第4節 考察

1. 青年期の人生ストレス経験への意味づけ方の内容

本研究では、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程，並びにその過程における支援者による効果的支援内容が明らかにされた。まず，本研究で明らかにされた青年期の人生ストレス経験に対し生成された意味づけ方の内容について，以下で考察を行う。

第1に，＜肯定的意味づけ方の生成＞を構成する【人生ストレス経験への見方・認識の肯定的変化】，【新たな信念・目標の形成と実践】，「自身への信頼感の形成」は，自我同一性の形成と関連しているという先行研究（宅 2010：229）を支持していたと

考えられる。先行研究 (Blos=1971:182; Erikson=1973:111-2; 山岸 1990:26) より、自我同一性とは、過去の危機と向き合い、それを受容する中で、周囲との関係性を築き、人生の目的を形成し、それらを周囲に表現できることによってうまれる自信であると考えられる。そして、この中の過去の危機の受容は【人生ストレス経験への見方・認識の肯定的変化】と、周囲との関係性を築き、自身の目的を形成することは【新たな信念・目標の形成と実践】と、自信は「自身への信頼感の形成」と関連していると考えられる。

第2に、青年は、青年期の人生ストレス経験に対し肯定的意味づけ方の生成<を行う一方で、後悔や自責感などの否定的意味づけ方の生成>も行っていった。本研究では、面接者に話すことのできる青年期の人生ストレス経験を尋ねており、対象者の青年は語った青年期人生ストレス経験について適応していることが想定されている。そして、このような青年においても、自責感や後悔などの否定的意味づけ方を持ち続けることが本研究において新たに明らかになった。これは、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方に焦点を当てた先行研究では殆ど指摘されていなかった。

従来、肯定的な意味づけ方を生成することにより、否定的な側面が最小にされると考えられていた (Davis et al. 1998)。そして、意味づけや肯定的な意味づけ方と適応に関連する変数と正の関連が想定されており、これと矛盾する研究結果が存在することが問題視され、その原因が議論されていた (Park 2010)。しかし、本研究結果より、青年期の人生ストレス経験に適応するということは、肯定的な意味づけ方を生成し、否定的な意味づけ方を減らしていくことではなく、否定的意味づけ方やそれを有する自分自身を受容することを通じて、人生ストレス経験の肯定的側面に目を向け、意味づけ方を生成していくことが示唆された。このいわば清濁併せ呑む姿勢こそ、SOC形成との関連が示唆されており (山崎 2011a:12)、本研究結果はこれを支持していたと考えられる。

2. 青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程

次に、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程の特徴として、以下で考察する。意味づけ研究では、意味づけが肯定的な意味づけ方の生成につながると指摘されていた (Park 2010)。しかし、本研究では<肯定的意味づけ方の生成>は、<意味づけし直しの試み>だけでなく、状況を変えるために効果的な見方・認識や行動をみつけていくこと<効果的対処の実現>による影響も受けていた。すなわち、肯定的意味づけ方を生成するためには、人生ストレスサ一直面時から時間を経た後に意味づけ方を生成しようとする意味づけだけでなく、人生ストレスサ一直面時に状況を変えようとする対処も重要になることが示された。

この際、人生ストレスサ一やストレスが青年にとって対処困難である場合、問題自

体を完全に解決することは難しいと考えられる。よって、問題自体を解決できる対処を行ったかどうかではなく、その時点で自分ができ得る対処を行ったかどうかは重要になると考えられる。

また、＜意味づけし直しの試み＞の中の「意味づけし直し」は、人生ストレス直面時から時間を経る中で、青年自身が成長し、物事を多面的に考えられるようになるという「成長の自覚」によって影響を受けていた。つまり、青年期の人生ストレス経験に対し肯定的な意味づけ方を生成していくためには、青年自身が時間を経る中で、成長していくことが重要であることが明らかになった。

3. 青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程への支援者による効果的支援内容

さらに、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程に対して、支援者が行っている効果的支援内容の特徴について以下で考察する。

第1に、意味づけ方生成において、青年が考える＜支援者による効果的支援内容＞が明らかになった。具体的には、【対処への支援】、【人生ストレスの見方・認識への支援】、【感情面への支援】という3つのサブカテゴリーが抽出された。これらは、先行研究における理論的示唆（Germain & Gitterman=2008：57；Saleebey 2013：107；Park & Gutierrez 2013；Palmer et al. 2016）を支持していた。

しかし、【感情面への支援】を構成する「自身のペースの尊重」や「他愛無い雑談」という概念については、先行研究ではあまり指摘されていなかった。この2つの概念は、青年に対し人生ストレスやストレスについて無理に聞かず、青年の気分転換につながるような支援を行うことを表していると言える。先述したように、肯定的な意味づけ方の生成は、時間をかけて行われるものである。よって、支援者が支援を行う際、青年自身が人生ストレス経験に向き合う段階に至っていない場合、あるいは意味づけ方生成から一時的に離れた場合も存在すると想定される。このような時には、青年が人生ストレス経験に意識を向けずにすむような「自身のペースの尊重」や「他愛無い雑談」という支援を行っていくことが重要になってくると考えられる。

また、＜他の支援者による支援の促進＞は、＜自身に合った支援者への支援の求め＞や上記の＜支援者による効果的支援内容＞に影響を与えていた。また、＜支援者による効果的支援内容＞は、＜肯定的意味づけ方の生成＞に直接的な影響を及ぼすだけでなく、人生ストレスやストレスへの＜効果的対処の実現＞を通して＜肯定的意味づけ方の生成＞に間接的な影響を及ぼしており、意味づけ方生成過程を長期的に支えていた。そして、＜肯定的な意味づけ方の生成＞には、青年が様々な経験の中で成長し、物事を多面的に考えることができるような「成長の自覚」が重要となり、長い時間を要することも示された。

よって、意味づけ方生成過程において、支援者は必要な支援者につなげること等の適切な資源の提供、並びに青年が状況を変えていくための行動や見方・認識を変えていくという行動的認知的対処への支援という心理社会面への複合的支援を行っていく必要があると言える。そして、青年自身が人生ストレス経験に直面しながらも、自身にでき得る対処を行い、得られたものがあつたのだという意味づけ方への気づきを促すという意味づけ方生成への支援を行っていくことが求められる。

第2に、先述したように、青年期の人生ストレス経験に適応するということは、肯定的な意味づけ方を生成し、否定的な意味づけ方を減らしていくことではなく、否定的意味づけ方やそれを有する自分自身を受容することを通じて、人生ストレス経験の肯定的側面に目を向け、意味づけ方を生成していくことが示唆された。このいわば清濁併せ呑む姿勢こそ、SOC形成との関連が示唆されており（山崎 2011a:12）、本研究結果はこれを支持していたと考えられる。

そして、支援者は青年との対話の中で、否定的意味づけ方やそれをもっている青年自身を肯定することを通じ、青年がこれらを受容し、肯定的意味づけ方に目を向ける余裕を養っていくことが求められる。さらに、このような変化や成長が生じてきた時期に、青年が自覚していない肯定的意味づけ方に目を向けることができるような間いかけを行っていくことが求められる（Saleebey 2013:107）。

第5節 本研究のまとめと限界

本研究では、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程、並びにその過程における支援者による効果的な支援内容が明らかにされた。そして、青年は、人生ストレスやストレスへの〈効果的対処の実現〉、その後時間を経る中で行われる〈意味づけし直しの試み〉の中で、長い時間をかけて青年期の人生ストレス経験に対して〈肯定的意味づけ方の生成〉だけでなく、〈否定的意味づけ方の生成〉を行っていた。さらに、〈支援者による効果的支援内容〉は、〈肯定的意味づけ方の生成〉だけでなく、人生ストレスへの〈効果的対処の実現〉にも影響を与え、意味づけ方生成過程を長期的に支えていた。

一方で、本研究にはいくつかの限界が存在する。第1に、本研究では6名の青年を対象としたが、彼らの人生ストレス経験に直面した時期は思春期から青年期後期と多岐に亘っていた。人生ストレス経験直面時期によって、周囲の支援者や効果的支援内容は変わると想定される。したがって、今後は人生ストレス経験直面時期を詳細に区分し、意味づけ方生成過程やその過程における支援者による支援内容をより詳細に明らかにしていく必要がある。第2に、本研究では、青年の視点から様々な支援者が共通して行う効果的支援内容を明らかにした。しかし、青年にはどのような支援者が存在し、各支援者が行った効果的支援内容については明らかにできていない。特に、青

年の意味づけ方生成における重要な支援者の一人として、ソーシャルワーカーが想定される（狭間 2001：161）。よって、青年の意味づけ方生成過程において、ソーシャルワーカーを含めどのような支援者が存在し、各支援者による効果的支援内容を行っているのかについて、第 6 章で明らかにしていく。

第 3 に、第 3 章の量的研究で明らかになった青年期の人生ストレス経験への意味づけ方の内容と、第 5 章の質的研究で明らかになった青年期の人生ストレス経験への意味づけ方の内容を併合し、混合研究法の見地から第 5 章において考察している。しかし、第 3 章では青年期の中の過去 5 年間の間にかかえた人生ストレス経験の中で、一番深刻であった内容を尋ねている一方、第 5 章では、第 3 章においても研究対象者となった青年に対し、面接者に話すことのできる青年期の人生ストレス経験を尋ねている。これは、面接時における研究対象者の精神的苦痛を低減させるためにとった措置であるが、これによって、本研究の研究対象者が語った青年期の人生ストレス経験は第 3 章で答えたものと異なっていた可能性がある。また、第 5 章では面接者に話すことのできる青年期の人生ストレス経験を尋ねている一方、第 3 章では一番深刻であったものを尋ねており、第 3 章と第 5 章の青年期の人生ストレス経験の深刻度についても異なる可能性がある。よって、厳密に混合研究法を行っていくためには、今後は同一の人生ストレス経験についての内容、その生成過程を質的量的に研究していく必要がある。

第6章 青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程における青年の支援者の種類並びに各支援者の支援内容の実例 —質的研究法を用いて—

第1節 目的

本研究では、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程における青年の支援者についてインフォーマルな支援者及びフォーマルな支援者という視点から明らかにすること、並びに各支援者によるそれぞれの青年への効果的支援内容を、男女差を含めて明らかにすることを目的とする。

第2節 対象と方法

1. 研究対象者

高校卒業以降から20代後半の青年期後期（宅 2010：12；戸ヶ里 2011a：44）にあたる、A県のB大学、C大学の大学生6名に調査協力を求めた。調査時期は、2015年11月～12月である。

2. 方法

1) 調査手続き及び倫理的配慮

研究対象者のリクルート方法は、以下の通りである。2014年12月～2015年1月、書面で研究参加に同意したA県のB大学、C大学の大学生270名に対し、第2章、第3章、並びに第4章の分析に関する質問紙調査を大学講義開始直前または終了直後に実施した。第2章、第3章、第4章で述べたように、この調査では、幼少期から12歳頃までの親の子育ての質への意味づけ方、青年期の人生ストレス経験の種類・深刻度・それへの意味づけ方、SOC-13を尋ねた。そして、この対象者270名に対し、後日この調査と関連した面接調査が行われることを口頭及び書面で説明し、それについて協力意思の有無を書面で確認した。本研究への協力意思を書面で確認した40名に対し、2015年9月、Eメールの書面で本研究の詳細を説明し、本研究への正式な協力意思を確認した。ここでは、第2章、第3章、並びに第4章の分析に関する質問紙調査で尋ねた、「過去5年間の間にかかえたストレス経験の中で、一番深刻であった内容」について尋ねる旨を説明し、本研究への正式な協力意思を確認した。そして、最終的にEメールで本研究への協力が得られた6名を本研究の研究参加者とした。

しかし、研究対象者がこのような過去5年間で一番深刻であった人生ストレス経験について面接者に語ることは、精神的苦痛を生じさせる可能性があると考えられた。よって、インタビュー調査実施前に、調査内容を、青年期に直面した人生ストレス経験の中で、面接者に話すことができるものについて変更した。青年が話しても良いと感じる人生ストレス経験は、青年の中で肯定的意味づけ方が生成され、面接者に話すことで生じる精神的苦痛を最

小限に抑えられると考えられたからである。

そして、インタビュー調査実施時に、Eメールで調査協力を依頼した際と尋ねる人生ストレス経験が異なっている旨を口頭及び書面で説明し、インタビュー調査への参加への意思を確認した。そして、6名全員の同意が得られた。

また、このインタビュー調査の際に、配布文書及び口頭にて、研究の目的、内容及び倫理的配慮について説明し、結果公表に際しての匿名性を保証した。また、データは統計処理をして本研究の目的以外には使用しないこと、参加や撤回などによる不利益は一切ないことを説明した。そして、書面にて研究対象者の調査参加及びインタビュー内容の録音に関する同意を得た。また、本研究は日本福祉大学大学院福祉社会開発研究科の倫理審査を受け承認を得た上で実施した（申請番号 14-002）。

表 1 研究対象者のデータ

	性別	年齢	人生ストレス経験に直面した時期	人生ストレス経験の内容
A	女性	22歳 (大学4年生)	大学入学時から大学2年生	体調の悪化
B	女性	22歳 (大学4年生)	高校2年生	家族との死別
C	女性	22歳 (大学4年生)	中学2年生から3年生	友人関係の悪化
D	男性	21歳 (大学4年生)	中学1年生から2年生	部活動
E	男性	23歳 (大学3年生)	高校卒業後2年間	仕事
F	女性	21歳 (大学4年生)	大学4年生	進路

2) データ収集方法

本研究では、1人につき計一回の半構造化面接を行った。平均面接所要時間は約1時間7分であった。面接内容は、研究協力者の同意を得た上で、ICレコーダーに録音し、逐語録を作成した。なお、全ての研究協力者が、録音に同意した。

3) インタビュー・ガイド

以下の質問項目からなるインタビュー・ガイドを作成した。そして、インタビュー実施前に研究対象者にこのインタビュー・ガイドを配布し、研究対象者が質問内容を把握できるようにした。

- ①中学校入学時から今まで生きてきた中で、ストレスだと感じた経験（ストレス経験）の中で、面接者に話すことができるストレス経験の内容。
- ②①の経験をした時期。

- ③①の経験をした時感じたこと.
- ④その後、①の経験に対して行った対処及びうまく対処できた程度 (10段階評価).
- ⑤対処をする際、助けになった人や物事 (例えば、書籍、名言、格言など) 及びその支援内容.
- ⑥①の経験を通じて、自身が成長できたと現在感じる程度.

面接では、大学生である研究参加者が人生ストレスに直面した時期として、12歳前後から20代後半の青年期 (戸ヶ里 2011: 44) の中に入るよう、「中学校入学時から今まで生きてきた中」という表現で尋ねた.

4) 分析方法

第5章において①の分析を行い、本研究ではそれを基に②の分析を行う.

①第5章において、データは修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach; M-GTA) (木下 2003; 2007; 2014) を用いて分析した. ここでは、「青年期後期にあたる青年が、青年期の期間の中で直面した人生ストレス経験に対し、支援者による効果的支援内容を受けながら、意味づけ方を生成する過程」という分析テーマ、「青年期の期間の中で人生ストレス経験に直面したことがある、青年期後期にあたる青年」という分析焦点者に基づき、データ分析を行った. そして、データから解釈によって生成する分析上の最小単位を「概念」、複数の概念の関係からなるものを「カテゴリー」、必要に応じて両者の間に「サブカテゴリー」を設定する (木下 2014: 139). データから概念を生成する際に、分析ワークシートを用いる. これは、各概念に作成されるもので、概念名、定義、概念に関連するデータである具体例 (ヴァリエーション)、浮かんだ疑問や解釈上のアイデアを記入する理論的メモの4つの欄から構成される (木下 2014: 143-4). そして、新たな概念が見出せない状態を理論的飽和化という (木下 2007: 223). 理論的飽和化に達した段階で、概念やカテゴリーの関係性を結果図に記し、その関係性をストーリーラインとして言語化する (木下 2007: 226-9).

②本研究では、第5章のM-GTAによる分析で明らかになったカテゴリーの中で、支援者による効果的支援内容に関連すると考えられる<他の支援者による支援の促進>、<支援者による効果的支援内容>というカテゴリーの中の各概念の分析ワークシートの具体例のデータを基に、青年のインフォーマル及びフォーマルな支援者、そして各支援者が行っている支援内容を抽出した. そして、研究対象者のうち誰が、どの支援者を挙げたか、並びに各支援者の支援内容として何を挙げたかを整理した. この際、家族、友人、隣人、職場の同僚をインフォーマルな支援者、ソーシャルワーカー、カウンセラー、教師等をインフォーマルな支援者と定義した (Maguire=1994: 14-5)

さらに、研究の質の担保のために、保健学の学位を有し、質的研究方法に精通した教員に分析について定期的なアドバイスを受けた.

第3節 結果

表1 支援者の種類及びその支援内容

支援者の種類	Info	効果的支援内容
1. インフォーマルな支援者		
① 友人	A, B, D, E, F	<ul style="list-style-type: none"> ・【対処への支援】 （「対処行動への支援」(A) , 「対処方法選択への支援」(F)) ・【人生ストレス経験の見方・認識への支援】 （「信念の転換への支援」(A) , 「原因理解への支援」(E)) ・【感情面への支援】 （「気持ちの理解」(B, D, E) , 「自身のペースの尊重」(A) , 「他愛無い雑談」(B, D))
② 母親	B, C, E, F	<ul style="list-style-type: none"> ・「対処方法選択への支援」(C, E) ・「信念の転換への支援」(C) ・「気持ちの理解」(B, C, E, F)
③ 父親	B, E, F	<ul style="list-style-type: none"> ・【対処への支援】 （「対処行動への支援」(F) , 「対処方法選択への支援」(E, F)) ・「気持ちの理解」(B, E)
④ 先輩	C, E	<ul style="list-style-type: none"> ・「対処方法選択への支援」(C, E) ・「気持ちの理解」(E) ・「他愛無い雑談」(C)
⑤ アルバイト先の主婦	F	「対処方法選択への支援」
2. フォーマルな支援者		
① 担任教師・ゼミの教員	A, C, D, E	<ul style="list-style-type: none"> ・＜他の支援者による支援の促進＞(A, C) ・【対処への支援】 （「対処行動への支援」(C) , 「対処方法選択への支援」(C, D)) ・「原因理解への支援」(E) ・「気持ちの理解」(D, E)
② 学生相談室のカウンセラー	A, C, D, F	<ul style="list-style-type: none"> ・＜他の支援者による支援の促進＞(C) ・「対処方法選択への支援」(A) ・【人生ストレス経験の見方・認識への支援】 （「信念の転換への支援」(A) , 「原因理解への支援」(A)) ・「気持ちの理解」(C, D, F) ・「自身のペースの尊重」(C, D)
③ 担任以外の教師・ゼミの教員 以外の大学教員	B, C	<ul style="list-style-type: none"> ・＜他の支援者による支援の促進＞(C) ・「対処方法選択への支援」(F) ・「気持ちの理解」(A, B)
④ 学生課の職員	A	<ul style="list-style-type: none"> ・「対処行動への支援」 ・「信念の転換への支援」
⑤ 病院の職員	A	「信念の転換への支援」
⑥ 保健室の養護教諭	C	＜他の支援者による支援の促進＞

1. 支援者の種類

11種類の支援者が明らかになった(表2)。具体的には、インフォーマルな支援者として、友人(5名)、母親(4名)、父親(3名)、先輩(2名)、アルバイト先の主婦(1名)の5種類が挙げられた。フォーマルな支援者として、担任教師・ゼミの教員(4名)、学生相談室のカウンセラー(4名)、担任以外の教師・ゼミの教員以外の大学教員(2名)、学生課の職員(1名)、病院の職員(1名)、保健室の養護教諭(1名)の6種類が挙げられた。

2. 各支援者の支援内容

各支援者の支援内容について、インフォーマルな支援者及びフォーマルな支援者という視点から、以下で説明する。なお、「」は概念、【】はサブカテゴリー、< >はカテゴリー、発言者を()で示す。

1) インフォーマルな支援者

①友人

6名中、C以外の5名(A, B, D, E, F)が友人を支援者として挙げていた。友人は<他の支援者による支援の促進>を除くすべての<支援者による効果的支援内容>を行っていた。すなわち、「対処行動への支援」(A)、「対処方法選択への支援」(F)という【対処への支援】、「信念の転換への支援」(A)、「原因理解への支援」(E)という【人生ストレスの見方・認識への支援】、「気持ちの理解」(B, D, E)、「自身のペースの尊重」(A)、「他愛無い雑談」(B, D)という【感情面への支援】を行っていた。

②母親

6名中、4名(B, C, E, F)が母親を支援者として挙げていた。母親は、「対処方法選択への支援」(C, E)、「信念の転換への支援」(C)、「気持ちの理解」(B, C, E, F)を行っていた。

③父親

6名中3名(B, E, F)が父親を支援者として挙げていた。父親は、「対処行動への支援」(F)及び「対処方法選択への支援」(E, F)という【対処への支援】、並びに「気持ちの理解」(B, E)を行っていた。

④先輩

6名中2名(C, E)が先輩を支援者として挙げていた。先輩は、「対処方法選択への支援」(C, E)、「気持ちの理解」(E)、「他愛無い雑談」(C)を行っていた。

⑤アルバイト先の主婦

F がアルバイト先の主婦を支援者として挙げていた。アルバイト先の主婦は、「対処方法選択への支援」を行っていた。

2) フォーマルな支援者

①担任教師・ゼミの教員

6名中4名(A, C, D, E)が、担任教師・ゼミの教員を支援者として挙げていた。担任教師・ゼミの教員は、＜他の支援者による支援の促進＞(A, C)、「対処行動への支援」(C)及び「対処方法選択への支援」(C, D)という【対処への支援】、「原因理解への支援」(E)、「気持ちの理解」(D, E)を行っていた。

②学生相談室のカウンセラー

6名中4名(A, C, D, E)が、学生相談室のカウンセラーを支援者に挙げていた。学生相談室のカウンセラーは、＜他の支援者による支援の促進＞(C)、「対処方法選択への支援」(A)、「信念の転換への支援」(A)、「原因理解への支援」(A)という【人生ストレスの見方・認識への支援】、「気持ちの理解」(C, D, F)、「自身のペースの尊重」(C, D)という支援を行っていた。

③担任以外の教師・ゼミの教員以外の大学教員

6名中2名(B, C)が、担任以外の教師・ゼミの教員以外の大学教員を支援者として挙げていた。担任以外の教師・ゼミの教員以外の大学教員は、＜他の支援者による支援の促進＞(C)、「対処方法選択への支援」(F)、「気持ちの理解」(A, B)を行っていた。

④学生課の職員

A が学生課の職員を支援者として挙げていた。学生課の職員は、「対処行動への支援」、「信念の転換への支援」を行っていた。

⑤病院の職員

A が病院の職員を支援者として挙げていた。病院の職員は、「信念の転換への支援」を行っていた。

⑥保健室の養護教諭

C が保健室の養護教諭を支援者として挙げていた。保健室の養護教諭は、＜他の支援者による支援の促進＞を行っていた。

3. 各支援者及び支援内容の男女差の傾向の検討

6名の研究対象者中、D、Eが男性、A、B、C、Fが女性であった。表2より、各支援者の中で、男性のみ、女性のみが挙げたものは確認されなかった。各支援者の支援内容においては、担任教師・ゼミの教員による「気持ちの理解」を男性のD、Eのみが挙げていた。それ以外の支援内容において、男女どちらかに特徴的なものは確認されなかった。

第4節 考察

1. 支援者の種類の実例

本研究では、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程において、5種類のインフォーマルな支援者及び6種類のフォーマルな支援者の合計11種類の支援者が明らかになった。以下で、インフォーマル及びフォーマルな支援者に分け、それぞれの特徴について考察を行う。なお、「」は概念、【】はサブカテゴリー、<>はカテゴリーを、インタビュー・データからの引用を『』、発言者を（）で示す。

1) インフォーマルな支援者

第1に、6名の研究対象者の中で、C以外の5名が友人を支援者として挙げていた。これは先行研究を支持していた(Moscardino et al. 2010; Brewer & Sparkes 2011; O' Connor et al. 2011; 中村ら 2011; 大谷・粕谷 2014; 戸ヶ里 2015)。一方、Cは友人を支援者として挙げていなかった。Cの発言の一部を以下に記す。

『もう同い年というよりかは上でしたね。やっぱり1個上から上っていう感じでしたね。やっぱり年上っていうだけでなぜか。今、思うと1個上だから何なんだろうっていう風には、やっぱりあの、大人になるとやっぱり年齢差とかあんまりなので。だけど、一年多く生きてるっていうだけで、すごい人生の大先輩のように思えて。で、その子とも、今はほんとに先輩とは全然思えないくらい距離が近いんですけど、その時はほんとに、色々受験の相談とか、時々乗ってもらってたりとかしてましたし、とにかく大人に守られてるって思って思うだけで、こう何か、安心出来たというか、私守られてる、大丈夫だ、っていう風に思えていたので。何か、ちょっと攻撃してきたり。直接的ではないにしろ、何かちょっと目線で攻撃されてしまったりとか、とかあったので、あんまり同い年に対して、あんまりこう、いいイメージがない』。(C)

このようにCは、友人について自身を攻撃する存在として捉えていたため、支援者として選ばなかった。この原因として、以下の2つが考えられる。まず、1つ目は、12歳前後から高校卒業時までの思春期(戸ヶ里 2011a: 44)に人生ストレス経験に直面していたことである。Cは、思春期に含まれる中学生に入って間もない時期に人生ストレス経験に直面していた。この時期は、自身の仲間とそうでない者を区別し、仲間でない者には寛容さを示さない傾向にある(Kroger=2005: 31)。そして、仲間ではないと判断した者を支援することは、

自身も仲間ではないと見なされる危険を伴うと考えられる。そして、このような危険を伴う行動、すなわち支援を行うことは、青年期に発達していくと言われている (Do et al. 2016)。よって、青年期に入って間もない思春期の時期である中学生の場合、このような支援を行うことが難しかったと考えられる。

また、Cと同様に、中学生時に直面した人生ストレス経験について語っていたDについても、友人に愚痴を少し話すことはしたが、それ以外について頼ることはなかったとしている。

『(友人には) 相談はしないですね、やっぱり。あんまり相談事が出来るような、相談事に答えてもらえる期待をしてなかったっていうのはあるかもしれないですね、あんまり。そんな何か、頭がいい感じではないと言うか、ぶっちゃけそのグループで一番頭がよかったのが自分だったんで。そういうところでちょっと軽く見てたところ、あったのかなって今思いますけど』(D)

この発言より、Dは周囲の友人が自身の望む答えを提供できるほどに成熟していないと感じたため、頼り辛いと感じていたことがうかがわれる。このように、C及びDは、友人に対し、攻撃性や未熟さを感じており、それゆえに支援者として頼り辛いと感じていたことが考えられる。

一方、友人を支援者として挙げていたA、B、E、Fの4名は、高校生以降人生ストレス経験に直面しており、周囲の友人も高校生以降の年代である。この時期の友人は中学生時よりも成長し、周囲で苦しんでいるA、B、E、Fに対し、余裕をもって支援を行うことができたのではないかと考えられる。このことから、中学生時という思春期に入って間もない時期に直面した人生ストレス経験の場合、友人が支援者となり辛い側面があることが示唆された。

思春期の中学生を対象として含んだ実証研究では、家族生活の重要性が指摘されている一方 (林・小林 2006 ; Blattner et al. 2013 ; Hazel et al. 2015)、高校生以上を対象とした研究では、友人からのサポートの重要性が指摘されている (Brewer & Sparkes 2011 ; O' Connor et al. 2011 ; 中村ら 2011 ; 大谷・粕谷 2014 ; 戸ヶ里 2015)。よって、本研究はこれらの先行研究を支持していると言える。

また、友人が支援者となり辛い2つ目の原因として、人生ストレス経験の種類が関連していると考えられる。Cは友人関係の悪化という人生ストレス経験に直面しており、関係の悪化した相手の友人と周囲の友人とは友人関係である可能性がある。それゆえ、Cは周囲の友人に対し頼り辛かった可能性が考えられる。そして、友人関係の人生ストレス経験を抱えている場合、第5章で示されたように、その人生ストレスサーと【関連の少ない支援者への求め】を有することとも関連していると考えられる。先行研究 (Hazel et al. 2015) においても、友人関係の人生ストレス経験の場合、友人ではない親子関係がその影響を緩和することが実証されている。

第2に、6名中4名が母親を、3名が父親を支援者として挙げていた。先行研究 (林・小

林 2006 ; Moscardino et al. 2010 ; O' Connor et al. 2011 ; Blattner et al. 2013) では家族を支援者として挙げていたが、家族の中の誰の支援が重要であるにかについてまではふれられていなかった。そして、本研究では、母親と父親が青年の支援者として存在すること、並びに父親よりも母親を支援者として挙げた青年の方が多く、家族の中でも特に母親の存在が重要であることが明らかになった。

しかし、B、Fは両親に頼っていた一方で、頼りにくいとも感じていたと述べている。

『やっぱり親とかだと、完全に当事者なので、その、まあ、辛かったんだね、っていうかまあほんとに、いや自分も辛いみたいな。そういう風になっちゃうんで、そういう中だと、そういう親とかを見てると、自分がしっかりしなきゃなってなるんですけど、友達と話している時は、もうほんとに、自分が辛いだけなので、まあ普通に話せると言うか。今自分は辛くって、今その辛さを友達に話して和らげようとしているんだなあ、みたいな感じで。ほんとに、(自分がしっかりしなきゃという) 責任感っていうか、そういうのから離れられるから、とか』(B)

『やっぱり負担を掛けるのは、母親、父親なので、やっぱそういうところも考えさせちゃうかなあっていうか、私がそうすることによって、悩みが増えてしまうのかなあ、みたいな。

そういう感じ(アルバイト先の主婦の人は、負担をそこまでかけずに相談できる人)ですね』(F)

Bの直面した人生ストレス経験は家族との死別であり、家族である親にとってもそれは人生ストレス経験であったため、親には頼り辛かったと考えられる。また、Fの直面した進路の人生ストレス経験についても、その選択如何では場合母親や父親に金銭面も含めて迷惑をかける可能性があり、母親や父親にとっても人生ストレス経験となり得るものであるため、両親には頼り辛かったと考えられる。このように、青年の直面した人生ストレス経験が支援者にとっても人生ストレス経験となる場合、青年はその支援者には頼りにくいことが考えられる。それゆえに、第5章で示されたように、青年は人生ストレスサーと【関連の少ない支援者への求め】を有するのだと考えられる。

2) フォーマルな支援者

4名が学生相談室のカウンセラー、担任教師・ゼミの教員、3名が担任以外の教師・ゼミの教員以外の大学教員を挙げていた。カウンセラーを支援者として挙げることは先行研究(Neimeyer et al. 2008)を支持していた。また、先行研究(戸ヶ里 2015)では、教師が支援者として指摘されていた。本研究では、青年を身近で担当する担任教師、大学の場合所属するゼミの教員、並びに担任以外の教師・ゼミの教員以外の大学教員が支援者として存在するというより詳細な実態が明らかになったと言える。これらの支援者は、青年の意味づけ方生成への支援者として、身近にはいるが、中立的な立場で支援を行うことができる専門職であり、第5章で示されたように、人生ストレスサーと【関連の少ない支援者への求め】に

よって、青年の支援者となったと考えられる。

しかし、当初の予想と反し、ソーシャルワーカーを支援者として挙げたものはいなかった。これは、特に、学校や大学におけるソーシャルワーカー、すなわちスクールソーシャルワーカーやキャンパスソーシャルワーカーは配置が始まってきている段階にあり（牧野・杉本2011）、青年の身近にソーシャルワーカーがいなかったことが原因と考えられる。しかし、今後配置が進むにつれ、青年の身近にソーシャルワーカーが存在し、青年の支援者として機能していくことが十分に想定される。よって、ソーシャルワーカーが青年の意味づけ方生成に対して行う効果的支援方法を考えていくことは重要である。

2. 各支援者の支援内容

主な支援者の支援内容の特徴について、インフォーマルな支援者の支援内容、フォーマルな支援者の支援内容並びに両者に共通する支援内容という 3 つの視点から以下で考察を行う。

1) インフォーマルな支援者の支援内容

第1に、友人は<他の支援者による支援の促進>以外の全ての支援を行っていた。友人は青年の身近にいる存在であり、青年が頼りやすいため、多くの支援を行うことにつながったと考えられる。その中でも、「気持ちの理解」を挙げている青年が5名中3名おり、一番多かった。よって、青年の身近にいる友人は、青年の人生ストレス経験に関する話を聞き、気持ちを理解してくれることが重要な役割を担うことが示唆された。これは先行研究を支持していた（Gartner & Riessman=1985 : 129）。また、「他愛無い雑談」は、友人と先輩のみが行っている支援であり、年齢の近い者だからこそできる支援であると考えられる。

一方、友人が唯一行っていなかった<他の支援者による支援の促進>は、他の支援者の紹介や他の支援者の支援のフォローを意味している。これは、青年の支援者を把握し、その支援の内容を客観的に把握することができる力が求められる支援であり、後述するように、担任教師・ゼミの教員、学生相談室のカウンセラー、保健室の養護教諭のような専門性のある大人の支援者によって行われやすいと考えられる（Gartner & Riessman=1985 : 129）。そのため、友人はこの支援を行っていなかったと考えられる。

第2に、父親は、【対処への支援】、「気持ちの理解」を行う一方、母親は、「対処方法選択への支援」、「信念の転換への支援」、「気持ちの理解」を行っていた。特に、母親を支援者として挙げた4名全員が「気持ちの理解」を挙げていたことから、「気持ちの理解」が母親に対し望まれる重要な支援であることが示唆された。本研究の研究対象者の6名中5名の人生ストレス経験は学校生活に関連することであった（表1）。よって、これらの青年が実際に人生ストレスやストレスに対処していく場合は、学校に関連していると考えられる。そして、父親はどのような対処を行っていくと良いか等、現実的な対処についてアドバイス等

を行う傾向が示された。一方、母親は、青年の話に耳を傾け、気持ちを理解しながら、青年が学校の中で人生ストレスやストレスに対処していくことを、家庭の場で後方的に支援していたと考えられる。

2) フォーマルな支援者の支援内容

第1に、担任教師・ゼミの教員、学生相談室のカウンセラー及び保健室の養護教諭は、＜他の支援者による支援の促進＞を共通して行っていた。これは、青年に必要な他の支援者を紹介したり、他の支援者が青年に合った支援を行うことができるようアドバイスを行ったりすることである。これは、青年の支援者を把握し、その支援の内容を客観的に把握することができる力が求められ、専門性のある大人の支援者によって行われやすいと考えられる。よって、担任教師・ゼミの教員、カウンセラー及び養護教諭は専門職であるゆえに、この支援を行うことができたと考えられる (Gartner & Riessman=1985 : 129)。

また、担任教師・ゼミの教員、学生相談室のカウンセラーは、「原因理解への支援」、「気持ちの理解」を共通して行っていた。これらは教師やカウンセラーが共通して行う支援であるといわれており (山下 2010 : 60)、本研究結果はこれを支持していた。

一方、担任教師・ゼミの教員とカウンセラーの支援内容に違いもみられた。担任教師・ゼミの教員は、「対処方法選択への支援」及び「対処行動への支援」という【対処への支援】を行っていたが、学生相談室のカウンセラーは、「対処方法選択への支援」のみで、「対処行動への支援」は行っていなかった。担任教師・ゼミの教員は、学生相談室のカウンセラーよりも青年の身近におり、青年の学校生活を具体的に把握できるため、青年による「対処行動への支援」を行うことができたと考えられる。したがって、研究対象者の多く (C, D, E, F) が学校生活に関係する人生ストレスを抱えていることから、「対処行動への支援」を行うことができる身近な専門職の支援者が必要であることが明らかになった。

また、学生相談室のカウンセラーは、担任教師・ゼミの教員よりも、「信念の転換への支援」や「原因理解への支援」という【人生ストレス経験の見方・認識への支援】、「気持ちの理解」や「自身のペースの尊重」という【感情面への支援】を幅広く行っていた。これらには、青年の人生ストレス経験の見方・認識、感情をより正確に把握し、その変化に向けて働きかけるという心理学の知識や実践経験が特に必要とされるため、それを兼ね備えたカウンセラーだからこそできた支援であると考えられる。

3) インフォーマル及びフォーマルな支援者に共通する支援内容

第1に、6名中2名以上が挙げた7種類の支援者である「友人」、「担任教師・ゼミの教員」、「学生相談室のカウンセラー」、「母親」、「父親」、「先輩」、「担任以外の教師・ゼミの教員以外の大学教員」は、「気持ちの理解」を共通して行っていた。「気持ちの理解」は、青年の話に耳を傾け、気持ちに共感する支援を意味する。よって、青年期の人生ストレス経験へ

の意味づけ方生成過程において、青年は自身の話に耳を傾け、気持ちに共感してくれることを支援者に対し共通して望むことが示された。

3. 各支援者の種類及び支援内容の男女差の傾向

当初の予想に反し、各支援者の中で、男性のみ、女性のみが挙げたものは確認されなかった。また、各支援者の支援内容においては、担任教師・ゼミの教員による「気持ちの理解」を男性のD、Eのみが挙げていたが、それ以外の支援内容において、男女どちらかに特徴的なものは確認されなかった。しかし、本研究は6名の青年を対象とした質的研究であり、本研究結果を一般化していくことは難しいため、今後検討を行っていく必要がある。

第5節 本研究のまとめと限界

本研究では、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程における、青年の支援者の実例、並びに各支援者の支援内容の特徴が明らかになった。インフォーマルな支援者として、友人、母親、父親、先輩等の5種類が挙げられた。フォーマルな支援者として、担任教師・ゼミの教員、学生相談室のカウンセラー、担任以外の教師・ゼミの教員以外の大学教員等の6種類が挙げられた。一方、ソーシャルワーカーは支援者として挙げられなかった。そして、フォーマルな支援者である担任教師・ゼミの教員、学生相談室のカウンセラーは、＜他の支援者による支援の促進＞を共通して行う一方、担任教師・ゼミの教員は【対処への支援】、学生相談室のカウンセラーは【人生ストレス経験への見方・認識への支援】、【感情面への支援】を行う傾向にあることが示された。また、インフォーマルな支援者である友人は多くの種類の支援を行うが、その中でも特に「他愛無い雑談」は特徴的な支援であることが示された。さらに、インフォーマル及びフォーマルな支援者に共通する支援内容として、「気持ちの理解」が挙げられた。各支援者及び支援内容において、男女どちらかに特徴的なものは確認されなかった。

一方で、本研究の限界も存在する。第1に、本研究では、人生ストレス経験の直面時期を青年期とした。しかし、青年期前期の思春期か、その中でも中学生か高校生か、また青年期後期か、その中でも大学かそうでないかで、頼ることができる支援者が異なってくると考えられる。よって、現場実践に役立てるためにも、今後は人生ストレス経験直面時期を限定し、重要な支援者がより明確になるようにする必要があると考えられる。

第2に、当初の予想と反し、ソーシャルワーカーを支援者として挙げたものはいなかった。この原因として、学校や大学におけるソーシャルワーカー、すなわちスクールソーシャルワーカーやキャンパスソーシャルワーカーは配置が進んできている段階にあり(牧野・杉本 2011)、青年の身近にソーシャルワーカーがいなかったことが考えられる。しかし、今後配置が進むにつれ、青年の身近にソーシャルワーカーがおり、青年の支援者として機能していくことが十分に想定される。よって、今後は、ソーシャルワーカーが青年の意味づけ方生

成に対して行う効果的支援方法を考えていくため、ソーシャルワーカーと支援を行う青年との事例研究を行っていく必要がある。

第3に、当初の予想に反し、本研究では支援者及びその支援内容において、男女どちらかに特徴的なものは確認されなかった。しかし、本研究は6名の青年を対象とした質的研究であることから、青年にみられる一般的な傾向を明らかにできないと考えられる。よって、支援者及びその支援内容の男女差を検討していくためには、今後対象者の数を増やして検証を行っていく必要があると考えられる。

終章 総合考察

第1節 本研究で明らかにされたこと

第2章～第6章の調査1分析1～3及び調査2分析1～2で新しく明らかにされたことをまとめると、図1のようになる。本研究で明らかにされたことについて、3つの研究課題を踏まえて以下で説明を行う。

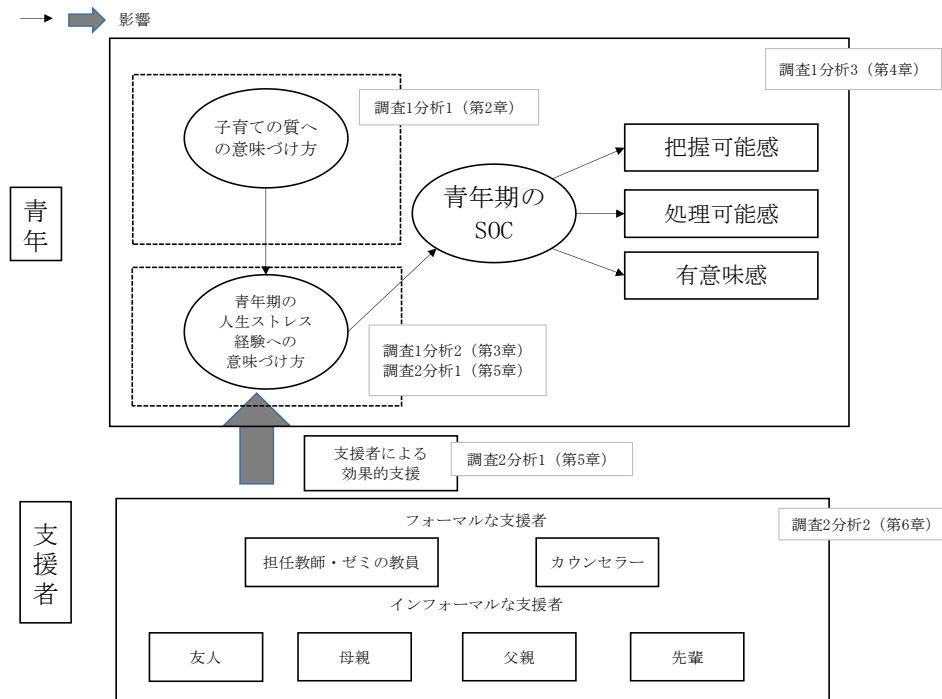


図1 本研究結果のまとめ

1. 人生ストレス経験への意味づけ方と青年期のSOC形成との関連

1) 人生ストレス経験への意味づけ方に関する尺度作成

本研究では、第2章（調査1分析1）において、子ども時代の子育ての質への意味づけ方尺度（以下、子育ての質尺度）を作成し、その信頼性及び妥当性を検証した。その結果、「親からの支援と愛情表現」及び「親からの意思決定の尊重」という2因子が抽出された。そして、本尺度及び各下位尺度のCronbachの α 係数は.86～.93であり、信頼性が示された。また、相関分析を行った結果、本尺度及び各下位尺度とSOC及び処理可能感、有意味感との間に正の相関が確認され、併存的妥当性が示された。さらに、重回帰分析を行った結果、本尺度の各下位尺度がSOC及び処理可能感、有意味感に与える正の影響が確認され、構成概念妥当性が示された。そして、対応のないt検定あるいはウィルコクソンの符号付順位和検定を行った結果、本尺度及び「親からの意思決定の尊重」について、男性よりも

女性の方が有意に高いことが確認され、妥当性が示された。

また、第3章（調査1分析2）において、本研究では、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方尺度（以下、本尺度）を作成し、その信頼性及び妥当性を検証した。その結果、「人生ストレス経験からの成長」、「人生の目的の明確化」及び「周囲との関係性の再認識」という3因子が抽出された。これらは、意味づけ研究の理論や実証研究を支持しており、青年期の自我同一性の形成と関連する青年期に特徴的なものであったことから、本尺度の構成概念妥当性が示された。本尺度及び各下位尺度のCronbachの α 係数は.88～.94であり、信頼性が示された。また、相関分析を行った結果、本尺度及び各下位尺度はSOC-13との間に有意な正の相関（ $r=.29\sim.49$ ）、「人生の目的の明確化」は人生ストレス経験の深刻度との間に有意な負の相関（ $r=-.14$ ）を示したことから、本尺度の基準関連妥当性が示された。また、3つの下位尺度のうちの2つの下位尺度を制御変数とし、残り1つの下位尺度と上記の外的基準との偏相関係数を算出した結果、「人生の目的の明確化」がSOCと正の中等度の偏相関を示しており、本尺度の3つの下位尺度の中でも「人生の目的の明確化」がSOCと関連していることが明らかになった。

子育ての質への意味づけ方に関する先行研究では、既存の尺度（木村ら2001；Garcia-Moya et al. 2012）や独自に作成した項目（Volanen et al. 2004）を用いており、青年期のSOCと関連する、子育ての質への意味づけ方を包括的に測定評価する尺度は殆どなかった。また、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方に関する先行研究は国外で多数みられるが（Tedeschi & Calhoun 1996；McMillen & Fisher 1998；Holland et al. 2010；Gan et al. 2013）、国内では殆どなかった。特に、意味づけ研究の理論（Park & Folkman 1997；Neimeyer & Anderson 2002：47-51；Gillies & Neimeyer 2006；Park 2010；Hibbert 2013）で得られた有益な知見を踏まえた上で、青年期の人生ストレス経験に対する意味づけ方を明らかにした研究は国内外でも殆どなかった。

このような先行研究の問題点を基に作成した上記の2つの尺度の内容は、子育ての質や青年期の人生ストレス経験に対し青年が生成しやすい肯定的意味づけ方を示している。よって、支援の初期段階等において、青年がどのような意味づけ方を生成しているのか確認していくというアセスメントを支援者が行う際に参考にできると考えられる。また、支援の中で青年と対話を行っていく中で、青年の意味づけ方の内容の変化、並びに青年が自覚していないが存在する肯定的意味づけ方を把握する際の参考にできると考えられる。

2) 人生ストレス経験への意味づけ方と青年期のSOC形成との関連性

第4章（調査1分析3）において、青年期のSOCと関連する要因として人生ストレス経験への意味づけ方、すなわち子育ての質への意味づけ方及び青年期の人生ストレス経験への意味づけ方を取り上げた。そして、支援者の中の特にソーシャルワーカーが青年の意味づけ方生成をどのように支援していくかの知見を得るために、これらの要因間の関連につ

いて共分散構造分析を用いて検証した。その結果、子育ての質への意味づけ方は青年期の人生ストレス経験への意味づけ方に有意な正のパスを示し、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方は青年期の SOC に有意な正のパスを示すことが明らかになった。よって、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方は青年期の SOC 形成を直接的に促進すること、並びに、子育ての質への意味づけ方は青年期の人生ストレス経験への意味づけ方を介して青年期の SOC 形成を間接的に促進することが示唆された。そして、自身の意思によらず、SOC 形成にとって不利になるような生育環境に置かれ、子育ての質に対し肯定的な意味づけ方を生成できない場合においても、青年が自身の意思と行動により、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方を生成し、SOC 形成を促進していくことができることが示唆された。

SOC は青年のウェルビーイングと心身の健康のために重要なストレス対処・健康生成力概念であり (Mittelmark et al. 2017 : 71) , 青年が形成していくことが望まれるものである。そして、SOC は抽象的概念であるため、SOC そのものに働きかけることが難しい。よって、SOC 形成に関連する要因を高めることで、SOC を高めることが求められる。しかし、先行研究では、青年期の SOC 形成要因に関する研究は殆どなかった (笹原 2015) 。よって、本研究結果より、青年期の SOC 形成に関連する要因として、人生ストレス経験への意味づけ方の存在が明らかになった。そして、意味づけ方と SOC 間の関係についても明らかにされた。

さらに、青年の意味づけ方生成における支援者が、これらの意味づけ方を生成することによって、青年期の SOC 形成を促進していくことができる可能性についても示唆されたと言える。また、青年期の人生ストレス経験に苦しむ青年にとって、人生ストレス経験に直面することは自身にとって否定的影響だけでなく、自身の SOC 形成とも関連していくという、いわば生きる希望にもつながり得ると考えられる。

2. 青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程並びに支援者による効果的支援内容等

1) 青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程並びに支援者による効果的支援内容

第 5 章 (調査 2 分析 1) において、混合研究法を用い、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成の過程並びにそれへの支援者の効果的支援内容を明らかにしたことである。そして、青年は、人生ストレスやストレスへの〈効果的対処の実現〉、その後時間を経る中で行われる〈意味づけし直しの試み〉の中で、長い時間をかけて青年期の人生ストレス経験に対して〈肯定的意味づけ方の生成〉だけでなく、〈否定的意味づけ方の生成〉を行っていた。さらに、〈支援者による効果的支援内容〉は、〈肯定的意味づけ方の生成〉だけでなく、〈効果的対処の実現〉にも影響を与え、意味づけ方生成過程を長期的に支えていた。

先行研究では、質的量的研究法を用いた混合研究法を用いているものが少ないため、青年が青年期に直面した人生ストレス経験直面時からどのような反芻、意味づけを経て、意味づけ方を生成していくかという過程全体が十分には明らかにされていなかった (Park 2010 ; 堀田・杉江 2013) .

このような先行研究における問題点を基に行った本研究の意義として、以下の2つが考えられる。1つ目は、第3章(調査1分析2)の量的研究結果と併合し、混合研究法の視点から考察を行うことで、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程及びその意味づけ方の内容をより詳細に明らかにできたことである。この中では、肯定的な意味づけ方を生成するのは、意味づけだけでなく、効果的対処を行うことである点等、意味づけモデル (Park & Folkman 1997 ; Park 2010) を支持しない実例が示された。これは、混合研究法により明らかになった、青年の実際の一側面であると考えられる。

2つ目は、青年期のSOCを形成していく過程、並びにその過程を促進する要因が明らかにされたことである。第4章(調査1分析3)より、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方は青年期のSOCと直接的な正の関連を有していたことから、支援者の効果的支援を受けながら、青年期の人生ストレスへの意味づけ方を促進することは、青年期のSOC形成を促進することとも関連していると考えられる。よって、本研究では青年期の人生ストレスへの意味づけ方生成過程、並びにその過程における支援者による効果的支援内容を明らかにすることによって、SOC形成の過程、並びにその過程の促進要因が記述的に明らかにされたと言える。

2) 青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程における支援者の種類及び各支援者による効果的支援内容の実例

第6章において、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程における、青年の支援者の実例、並びに各支援者の支援内容の特徴が明らかになった。インフォーマルな支援者として、友人、母親、父親、先輩等の5種類が挙げられた。フォーマルな支援者として、担任教師・ゼミの教員、学生相談室のカウンセラー、担任以外の教師・ゼミの教員以外の大学教員等の6種類が挙げられた。一方、ソーシャルワーカーは支援者として挙げられなかった。そして、フォーマルな支援者である担任教師・ゼミの教員、学生相談室のカウンセラーは、<他の支援者による支援の促進>を共通して行う一方、担任教師・ゼミの教員は【対処への支援】、学生相談室のカウンセラーは【人生ストレス経験への見方・認識への支援】、【感情面への支援】を行う傾向にあることが示された。また、インフォーマルな支援者である友人は多くの種類の支援を行うが、その中でも特に「他愛無い雑談」は特徴的な支援であることが示された。さらに、インフォーマル及びフォーマルな支援者に共通する支援内容として、「気持ちの理解」が挙げられた。各支援者及び支援内容において、男女どちらかに特徴的なものは確認されなかった。

先行研究では、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程の中でどのような支援者が存在し、各支援者がどのような支援を行っているか等の、支援者による効果的支援内容の実態は十分には検討されていない（堀田・杉江 2013）。そして、このような先行研究の問題点を基に行った本研究の意義として、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成に対する、各支援者の効果的な役割を示すことができたことである。青年が効果的だと感じた各支援者の支援内容が明らかになることにより、どの支援者がどのような支援を行うことが、青年の意味づけ方生成過程において重要であるかが示されたと考えられる。

第2節 人生ストレス経験への青年期における意味づけ方生成過程での支援方法に関する示唆

第6章（調査2分析2）の中で、意味づけ方生成過程におけるフォーマル及びインフォーマルな支援者の種類が示された。先行研究では、フォーマルな支援者が、インフォーマルな支援者の支援内容を理解し、確認し、創出し、活用していくことが重要であると指摘されている（小松 1988）。よって、本研究結果を基に、フォーマルな支援者が、インフォーマルな支援者の支援内容を把握した上で、どのような支援を行っていくべきかについて示唆を行うことが必要である。

第6章（調査2分析2）の中では、フォーマルな支援者として、担任教師・ゼミの教員、学生相談室のカウンセラー等が挙げられていた。一方、支援者としてソーシャルワーカーは指摘されなかった。この原因として、学校や大学におけるソーシャルワーカーであるスクールソーシャルワーカーやキャンパスソーシャルワーカーは配置が進みつつある段階にあり（牧野・杉本 2011）、研究対象者となった青年の身近にソーシャルワーカーがいなかったことが考えられる。

しかし、第5章（調査2分析1）の中で明らかになった支援者による効果的支援内容の総体は、人と社会との相互関係が不調和である状態と考えられる人生ストレス経験を、人生ストレス経験への見方・認識、感情等の個人的心理的問題から、必要な支援者など資源が不足していること等の社会的問題まで多次元に理解し把握した上で、その理解に基づき心理社会面への複合的な支援を行うというジェネラリスト・アプローチ（副田 2005:138）と類似していた。そして、このような支援を受ける中で、人生ストレス経験に関する首尾一貫したライフストーリーが構成され、意味づけ方が生成されていくと考えられる。この生成された意味づけ方は青年のストレングスである内的及び外的対処資源への気付きへとつながる点でエンパワメントとも関連している。このような中で、青年のストレス対処・健康生成力概念であるSOCの形成が促進されていくことにつながると考えられる。

よって、ソーシャルワーカーは、今後配置が進む中で、意味づけ方生成においてソーシャルワーカーは重要な役割を果たし得ると考えられる。したがって、2つの調査に基づく5つの分析を踏まえ、人生ストレス経験への意味づけ方生成過程における、ソーシャルワ

一カーを含めたフォーマルな支援者による効果的支援方法として、以下の5点を提起することとする。

第1に、人生ストレス経験に対し青年が適応し、SOCを形成していくためには、青年が否定的意味づけ方を受容することを通じ、肯定的意味づけ方を生成しながら、自分らしく、いきいきと生きていくことを支援者が支援していくことが重要である。第2章（調査1分析1）、第3章（調査1分析2）より、人生ストレス経験への肯定的意味づけ方と青年期のSOC形成との関連が示された。一方、第5章（調査1分析1）より、青年は、後悔や自責感などの否定的意味づけ方を抱えながらも、肯定的意味づけ方を生成していくことが示された。よって、支援者は否定的意味づけ方を減らすよう支援するのではなく、青年の否定的意味づけ方を受容していく中で、青年が肯定的意味づけ方を生成していくことを支援することが重要である。

そのためには、支援者は青年との対話の中で、青年の人生ストレス経験への意味づけ方の内容をアセスメントする必要がある。そして、青年の意味づけ方に関する語りを傾聴し、否定的意味づけ方に共感し（Germain & Gitterman=2008:57）、その存在やそれを抱えている青年自身を肯定する言葉かけを行う必要がある。このような支援を通して、青年は人生ストレス経験の否定的意味づけ方やそれを抱えている自身のいわば弱さを認める中で、人生ストレス経験の肯定的側面に目を向ける余裕が生じていくと考えられる。さらには、青年が様々な経験をしながら成長していく中で、物事を多面的に捉えることが可能になっていくと考えられる。そして、支援者はこの青年の変化・成長を把握し、青年が自覚していない肯定的意味づけ方を自覚できるような問いかけを行っていくことが重要になる（Saleebey 2013:107）。その結果、青年は人生ストレス経験の肯定的意味づけ方を自覚し、それは自身の内的・外的対処資源への気付きへとつながり、ストレス対処・健康生成力概念であるSOCが形成されることが考えられる。

清濁併せ呑むという言葉があるように、青年が物事や人間という存在の否定的側面・弱さを受容する中で、それらの肯定的側面を見出し、意味づけ方を生成することによって、自身らしくいきいきと生きていくことこそが、SOC形成につながるのだと考えられる（山崎 2011a:12-3）。そして、青年は青年期以降の人生の中で人生ストレス経験に直面した場合においても、青年期に形成されたSOCを基に効果的対処を行い、この効果的対処によってさらにSOCを形成していきながら、自分らしく、いきいきと生きていくことが可能になると考えられる。

第2に、支援者は青年に多様な意味づけ方の提案を行い、青年が自覚していないが、存在する意味づけ方を引き出す問いかけを行っていく必要がある。第2章、第3章で明らかになった意味づけ方は多くの青年が共通してもつ傾向ではあるが、必ずもつべき目標としての意味づけ方ではない。青年のライフコースは多種多様であるがゆえに（Germain & Gitterman=2008:27）、生成されやすい意味づけ方は異なるだろうし、どの意味づけ方を

生成していくかを決めるのは青年自身である。支援者が、このような意味づけ方をもつべきだという一義的な考え方をもちことは好ましくないと考えられる。

先行研究においても (Laird 1995) も、支援者はクライアントの経験の解釈の方法についてストレングスにむすびつくような様々な考え方をクライアントに提案するという多様性を重視している。支援者は青年との対話の中で、青年自身が親の子育ての質や青年期の人生ストレス経験に対して現在有している意味づけ方を本研究で開発した尺度を基に把握する。そして、青年の語りの中から、青年自身が自覚していないが、青年の直面した子育ての質や青年期の人生ストレス経験に関する肯定的側面を把握した上で、その肯定的な側面への青年の気づきを引き出すような問いかけを行い (Saleebey 2013 : 107) , 青年が自身で意味づけ方を生成することを支えていくことが求められる。すなわち、人生ストレス経験に対しどのような肯定的意味づけ方を生成していくかという答えは青年自身がおもっており、その答えに対する青年の気づきを促すことがソーシャルワーカーの役割だと言える。

そして、このような役割を果たすために、支援者は、協働性 (collaboration) , 反射性 (reflexivity) , 多様性 (multiplicity) を重視していく必要があるだろう (Laird 1995) 。協働性とは、客観的事実ではなく、ソーシャルワーカーと青年との対話の過程の中で見出される局域的な意味づけ方を重要視することである。そして、反射性とは、青年と支援者との対話を第三者が反射することで、クライアントと支援者との間主観的な空間において新しいストレングスやストーリーが形成されることである。このためには、支援者がスーパービジョンを受けるなどして自身の対話の内容を客観的にみつめ、自身の言葉の背後にある理解の枠組みがクライアントのストーリーを理解するために適切であったのかを確認していくことが必要だと考えられる。そして、これは支援者自身の自己覚知にもつながると言える。さらに、多様性とは、支援者が青年の人生ストレス経験の解釈の方法について、青年の強みであるストレングスにむすびつくような様々な考え方を青年に提案することである。青年との対話は、様々な考え方、可能性に基づく方法で構成されるため (Laird 1995) , 支援者は絶対的に正しい理論としての知識はないことを認識し、青年に合った理論としての知識を活用していくことが重要である。そのためには、支援者自身が多くの理論としての知識を学び続け、その長所および短所を理解していくことが求められる。そして、本研究結果についても、支援者の理論や知識を構築するものであるが、先述したように絶対的なものとせず、青年自身をみつめ、その語りに耳を傾ける中で、本研究結果を必要に応じて利用していくことが重要となる。

第3に、人生ストレス経験への意味づけ方生成のためには、青年の意味づけ方生成に直接的焦点を当てた個人的心理的側面への支援だけでなく、必要な支援者につなげること等の適切な資源の提供、青年が状況や見方・認識を変えていくという行動的認知的対処への支援という心理社会的側面への複合的支援を行っていく必要がある。第5章 (調査2分析1) でも、同様の結果が示されている。

すなわち、人生ストレス経験に対し意味づけ方を生成していくためには、人生ストレス経験直面時から時間を経る中で意味づけ方を生成していけるような支援を行うだけでなく、人生ストレス経験直面時に効果的な対処ができるような心理社会的側面への複合的支援を行い、青年が納得のいく対処ができるようにしていくことが重要である。

そして、このような支援を行っていくためには、支援者が青年と社会との相互作用の中で人生ストレス経験を捉え、青年の個人的心理的側面だけでなく、環境の資源の有無等の社会的側面まで多角的に把握する視点をもつ必要がある。

第4に、支援者は各人生ストレス経験への意味づけ方と青年期のSOCとの関連を把握した上で、意味づけ方生成の支援を行っていく必要がある。第4章（調査1分析3）より、子育ての質への意味づけ方は、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方と正の関連を示し、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方は青年期のSOCと正の関連を示したことが明らかになった。よって、子育ての質への意味づけ方が肯定的であるほど、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方が肯定的であることが示唆された。子ども時代の親の子育ての質への意味づけ方は実際の子育ての質を反映しており、それは青年の意思に寄るものではない可能性が高い。そのため、実際の子育ての質が良質ではない場合、それへの意味づけ方も肯定的ではない場合が考えられる。そして、青年期の段階で、子ども時代の子育ての質を変えることはできないため、子育ての質への肯定的な意味づけ方を生成していくことが困難な青年もいると想定される。

一方、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方は、周囲の支援を受けながら、青年の意思と行動により、生成していくことができる。そして、青年期のSOCと直接関連していたのは、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方であった。よって、支援者が青年の意思と行動を支援することで、青年期の人生ストレス経験への肯定的意味づけ方が生成され、生成された意味づけ方は青年の内的及び外的対処資源となり、ストレス対処・健康生成力概念であるSOC形成へとつながっていくと考えられる。

第5に、フォーマルな支援者は、フォーマル及びインフォーマルな支援者の支援内容の特徴を把握した上で、インフォーマルな支援者による支援体制を整えること、さらには自身の専門性を活かした支援を行っていくことが重要である。第6章（調査2分析2）では、インフォーマルな支援者として、友人、母親、父親、先輩等の5種類が挙げられた。そして、友人は様々な支援を行っており、特に「他愛無い雑談」を行っていることが特徴的であった。また、母親は、青年の話に耳を傾け、気持ちを理解しながら、青年が学校の中で人生ストレスサーに対処していくことを、家庭の場で後方的に支援していた。このように、友人や母親などのインフォーマルな支援者は、人生ストレス経験に直面することで感じていたストレスから気をそらし、それを緩和させるような支援を行う傾向があった。

一方、フォーマルな支援者は、青年の支援体制全体を把握した上で、必要な支援者を紹介し、既存の支援者の支援の質を高めるような働きかけを行うようなく他の支援者による

支援の促進>を共通して行っていた。また、個々の専門性を活かした支援も行っていた。すなわち、担任教師・ゼミの教員は、青年の身近におり、青年の学校生活を具体的に把握できるため、青年による「対処行動への支援」を行っていた。また、学生相談室のカウンセラーは、青年の人生ストレス経験の見方・認識、感情をより正確に把握し、その変化に向けて働きかけるといふ心理学の知識や実践経験をもっているため、「信念の転換への支援」や「原因理解への支援」といふ【人生ストレスの見方・認識への支援】、「気持ちの理解」や「自身のペースの尊重」といふ【感情面への支援】を幅広く行っていた。

したがって、フォーマルな支援者は、青年の支援体制全体を見渡し、青年がストレスから気をそらし、緩和させることができるよう、インフォーマルな支援者による支援体制を整えていく必要がある。例えば、青年が気持ちを受け止めてもらえるよう母親の支援の質を高めるアドバイスを行うことや、友人関係を築けるよう青年と気の合う友人が交流できるようにすること等が考えられる。また、フォーマルな支援者が、個々の支援者の専門性を把握し、それを活かした支援を行っていくことも重要である。

特に、先述したように、第5章（調査2分析1）の中で明らかになった支援者による効果的支援内容の総体は、人と社会との相互関係が不調和である状態と考えられる人生ストレス経験を、人生ストレス経験への見方・認識、感情等の個人的心理的問題から、必要な支援者など資源が不足していること等の社会的問題まで多次元に理解し把握した上で、その理解に基づき心理社会面への複合的な支援を行うというジェネラリスト・アプローチ(副田 2005:138)と類似していた。よって、ソーシャルワーカーは、カウンセラーが主に行っていた心理面への支援、並びに教師が主に行っていた社会面への支援を複合的に行うことができ得る存在であると考えられる。

第3節 本研究の限界と今後の展望

1. 本研究の限界

本研究の限界として、以下の6点がある。第1に、第2章、第3章で開発した、子育ての質への意味づけ方尺度、並びに青年期の人生ストレス経験への意味づけ方尺度の信頼性及び妥当性検討については、本研究で初めて行われている。よって、今後はサンプルを変えかつ増やして検証を行っていくことが期待される。

第2に、第4章では、子育ての質への意味づけ方、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方及び青年期のSOCとの関連を横断的研究で明らかにしたため、因果関係までは言及できない。よって、今後は意味づけ方と青年期のSOC形成との双方向の関連を明らかにするために、介入研究デザインに基づく縦断的研究を行っていくことが望まれる。この際、第6章では、当初の予想と反し、ソーシャルワーカーが支援者として確認されなかった。その原因として、学校や大学におけるソーシャルワーカー、すなわちスクールソーシャルワーカーやキャンパスソーシャルワーカーは配置が始まってきている段階にあり(牧野・

杉本 2011), 青年の身近にソーシャルワーカーがいなかった可能性が考えられる。しかし、今後配置が進むにつれ、青年の身近にソーシャルワーカーがおり、青年の支援者として機能していくことが十分に想定される。よって、今後は、ソーシャルワーカーが青年の意味づけ方生成に対して行う効果的支援方法を考えていくため、ソーシャルワーカーと支援を行う青年との事例研究を行っていく必要がある。

第3に、第3章、第5章、第6章では、限定せず、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方に焦点を当て、その内容や生成過程を明らかにした。そして、第3章では、青年期の人生ストレス経験の種類を測定したが、その意味づけ方と人生ストレス経験の種類との関連はあまりみられなかった。しかし、先行研究では人生ストレス経験の種類と意味づけ方との関連が指摘されている(宅 2005)。人生ストレス経験への意味づけが人生ストレス経験の種類という客観的な内容ではなく、出来事の意味の評価と目標や信念等の包括的意味との不一致という個々人の認知によって生じるものであること(Gillies & Neimeyer 2006; Park 2010)であるためだと考えられる。そして、先行研究では自由記述データをもとに、人生ストレス経験の種類をコーディングしているのに対し(宅 2005)、本研究では種類の選択肢を用意し、そこから選んでもらうという形式をとった。よって、人生ストレス経験に関する詳細な認知を考慮した上で、その種類のコーディングができていないために、人生ストレス経験と本尺度及び各下位尺度との間の関係が正確に測定できなかったと考えられる。よって、今後は、人生ストレス経験の種類についての質問形式を再考した上で、それと意味づけ方との関連や意味づけ方生成過程を検証していく必要がある。

第4に、第3章、第5章、第6章では、青年期の人生ストレス経験を取り上げたが、その人生ストレス経験の直面時期を青年期と設定した。しかし、人生ストレス経験の直面時期が青年期前期の思春期か、その中でも中学生か高校生か、また青年期後期か、その中でも大学かそうでないかで、意味づけ方の内容や生成過程、頼ることができる支援者が異なってくると考えられる。よって、今後は人生ストレス経験の直面時期を限定していく必要があると考えられる。

第5に、第5章(調査2分析1)、第6章(調査2分析2)より、大学生6名を対象とした半構造化面接による質的データを基に、青年期の人生ストレス経験への意味づけ方生成過程、並びにその過程における支援者による効果的支援内容の実例を明らかにした。そして、第6章では、当初の予想に反し、各支援者及びその支援内容において、男女どちらかに特徴的なものは確認されなかった。しかし、本研究は6名の青年を対象とした実例であり、青年にみられる一般的な実態を明らかにできないと考えられる。よって、支援者及びその支援内容の実態について男女差を含めて検討していくためには、今後研究対象者の人数を増やした質的、量的研究を行っていく必要があると考えられる。

第6に、第3章の量的研究で明らかになった青年期の人生ストレス経験への意味づけ方の内容と、第5章の質的研究で明らかになった青年期の人生ストレス経験への意味づけ方

の内容を併合し、混合研究法の見地から第5章において考察している。しかし、第3章では青年期の中の過去5年間の間にかかえた人生ストレス経験の中で、一番深刻であった内容を尋ねている一方、第5章では、第3章においても研究対象者となった青年に対し、面接者に話すことのできる青年期の人生ストレス経験を尋ねている。これは、面接時における研究対象者の精神的苦痛を低減させるためにとった措置であるが、これによって、本研究の研究対象者が語った青年期の人生ストレス経験は第3章で答えたものと異なっていた可能性がある。また、第5章では面接者に話すことのできる青年期の人生ストレス経験を尋ねている一方、第3章では一番深刻であったものを尋ねており、第3章と第5章の青年期の人生ストレス経験の深刻度についても異なる可能性がある。よって、厳密に混合研究法を行っていくためには、今後は同一の人生ストレス経験についての内容、その生成過程を質的量的に研究していく必要がある。

2. 今後の展望

今後の展望として以下の3点がある。第1に、近年では、Meaning in Life (MIL) という概念を用いた新たな理論枠組みを用いた研究が行われてきている。George & Park (2016a) のレビュー論文によると、MIL とは、自分の人生が、理解でき、価値のある目標によって志向され、動機付けられ、世界の中で重要なものとして経験される程度のことをいう。MIL の3要素には、人が自身の人生について、一貫性の感覚を認知し、理解する程度である理解 (comprehension) 、人が人生を価値づけられた人生の目標によって志向され、動機付けられていると経験する程度を指す目的 (purpose) 、人が、自分の存在は意義があり、重要であり、世界の中で価値があると感じる程度である自身の重要性を感じること (mattering) があると言われている。そして、大学生を対象として、この3要素に対応する3因子からなる MIL を測定する尺度の開発が行われている (George & Park 2016b) 。

そして、物事が世界の中でどのようにあるが、どのように今後なるのかについても、複雑な考え方を意味する意味の枠組み (meaning framework) は、MIL に影響を与えると考えられている (George & Park 2016a) 。そして、意味づけは、人生ストレスが意味の枠組みをどのように侵害し、個人が意味の枠組みを適用することによって、どのように人生ストレスを理解するのか、この過程の中で、どのように新しい意味の枠組みが作られ、あるいは古い意味の枠組みが修正されるのかについて焦点が当てられると整理されている (George & Park 2016a) 。すなわち、意味づけモデル (Park & Folkman 1997 ; Park 2010) における、包括的意味と意味の枠組みは類似した概念であり、これを基に、自身が人生全般に対して実際に感じる意味として MIL が想定されていると考えられる。

先行研究での示唆 (George & Park 2016a) に基づくと、この MIL と SOC との関連や、子ども時代の子育ての質や青年期の人生ストレス経験への意味づけ方との関連をみていく必要があると考えられる。

第2に、本研究では、青年期後期の青年を対象にした。しかし、過去の人生ストレス経験と成人期の適応との負の関連についても指摘されている (Suzuki et al. 2015) 。よって、今後は成人期を対象として、過去の人生ストレス経験への意味づけ方と SOC との関係性を明らかにしていく。

第3に、人生ストレス経験への意味づけ方は、汎抵抗資源 (Generalized Resistance Resources; GRRs) への気付きを意味し、GRRs は SOC 形成を促進すると考えられている (Antonovsky 1979 : 123 ; 山崎 2008a : 21) 。そして、本研究では、人生ストレス経験に対する肯定的な意味づけ方が、GRRs の気付き、形成と類似していると想定し、研究を行った。しかし、GRRs の内容を詳細に明らかにした先行研究はあまりない。よって、今後は GRRs の内容をより詳細に明らかにし、それと SOC の関係を含めた SOC のメカニズムに関する研究を行っていく。

謝辞

本博士論文の執筆にあたり、お忙しい中、調査にご協力頂きました研究対象者の皆様にご心より感謝を申し上げます。

また、ご指導いただきました山崎喜比古先生をはじめ、副査でご指導いただきました後藤澄江先生、末盛慶先生に厚く御礼申し上げます。また、執筆活動を支えてくれた夫、長男にも感謝しています。

引用文献

- Antonovsky, Aaron (1979) Health, Stress, and Coping: New Perspective on Mental and Physical Well-being, Jossey-Bass Publishers.
- Antonovsky, Aaron (1987) Unraveling the Mystery of Health: How People Manage Stress and Stay Well, Jossey-Bass Publishers. (=2001, 山崎喜比古・吉井清子監訳『健康の謎を解く—ストレス対処と健康保持のメカニズム』有信堂高文社.)
- 青木邦男 (2015) 「在宅高齢者の主観年齢に関連する要因」『社会福祉学』56(1), 74-86.
- 荒木剛 (2002) 「いじめ被害体験の長期的影響とレジリエンシー (resiliency)」『性格心理学研究』10(2) : 108-9.
- Barni, Daniela and Danioni, F. (2016) Adolescents' basic personal values and sense of coherence, Personality and Individual Differences, 102, 46-50.
- Blattner, Meghan C. C., Liang, B. and Lund, T. et al. (2013) Searching for a sense of purpose: The role of parents and effects on self-esteem among female adolescents, Journal of Adolescence, 36, 839-48.
- Blos, Peter (1962) On adolescence: A psychoanalytic interpretation, Free Press. (=1971, 野沢栄司訳『青年期の精神医学』誠信書房.)
- Bowers, Edmond P., Wang, J. and Tirrell, J. M. et al. (2016) A cross-lagged model of the development of mentor-mentee relationships and intentional self-regulation in adolescence, Journal of community psychology, 44(1), 118-38.
- Brewer, Joanne D. and Sparkes, A. C. (2011) Young People living with parental bereavement: Insights from an ethnographic study of a UK childhood bereavement service, Social Science and Medicine, 72, 283-290.
- Chiba, Rie, Miyamoto, Y. and Funakoshi, A. (2014) The concept of “benefit finding” or people at different stages of recovery from mental illness; a Japanese study, Journal of MENTAL HEALTH, 23(1), 20-4.
- Cho, Dalnim and Park C. L. (2013) Growth following trauma: overview and current status, Terapia psicologica, 31(1), 69-79.
- Cicchetti, Dante, Rogosch, F. A. and Lynch, M. et al. (1993) Resilience in maltreated children: Processes leading to adaptive outcome, Development and Psychopathology, 5, 629-47.
- Creswell, John W. and Plano Clark, V. L. (2007) Designing and conducting mixed methods research, Sage Publications. (=2010, 大谷順子訳『人間科学のための混合研究方法 質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン』北大路書房.)
- Creswell, John W. (2003) Research design Qualitative, Quantitative, and mixed methods approaches second edition, Sage Publications. (=2007, 操華子・森岡崇『研究デザイン —質的・量的・そしてミックス法』日本看護協会出版会.)
- Crumbaugh, James C. and Maholick, L. T. (1964) An experimental study in existentialism: The psychometric approach to Frankl's concept of noogenic neurosis, Journal of Clinical Psychology, 20, 200-7.

- Currier, Joseph M., Holland J. M. and Neimeyer R. A. (2006) Sense making, Grief, and the experience of violent loss: Toward a mediational model, Death Studies, 30, 403-28.
- Darling, Csrol A., McWey, L. M. and Howard, S. N. et al. (2007) College student stress: the influence of interpersonal relationships on sense of coherence, Stress and Health, 23, 215-29.
- Davis, Christopher G., Nolen-Hoeksema, S. and Larson, J. (1998) Making sense of loss and benefiting from the experience: Two construals of meaning, Journal of Personality and social Psychology, 75, 561-74.
- Eider Glen H. and Giele J.Z. (2009) The craft of life course research, Guilford Press. (=2013, 本田時雄・岡林秀樹訳『ライフコース研究の技法 ー多様でダイナミックな人生を捉えるために』明石書店.)
- Eriksson, Monica (2017) 11 The Sense of Coherence in the Salutogenic Model of Health, Mittelmark, Maurice B., Sagy S. and Eriksson, M. et al. ed. The Handbook of Salutogenesis, Springer, 91-96.
- Erikson, Erik H. (1959) Psychological issues identity and the life cycle, International Universities Press. (=1973, 小此木圭吾・小川捷之・岩男寿美子訳『自我同一性 アイデンティティとライフサイクル』誠信書房.)
- Fenstermacher, Kimberly H. (2014) Enduring to gain new perspective: a grounded theory study of the experience of perinatal bereavement in black adolescents, Research in nursing & health, 37, 135-43.
- 藤田長太郎・嘉目克彦・漆間幸一・ほか (2009) 「特集・メンタルヘルス□～相談体制・連携・協働～不登校傾向の学生へのアウトリーチ型支援—キャンパスソーシャルワーカーとの協働による学生の自己選択能力の形成支援—」『大学と学生』69, 43-51.
- 藤里紘子 (2015) 「Sense of Coherence の 3 要素はあらゆる状況で適応的に働くのか?—Sense of Coherence への介入研究に向けて」『応用心理学研究』41(2), 147-55.
- 藤里紘子・小玉正博 (2009) 「首尾一貫感覚 (Sense of Coherence) とストレス反応, および対処方略との関連」『ヒューマン・ケア研究』10(1), 23-33.
- Gan, Yiqun, Guo M. and Tong J. (2013) Scale development of meaning-focused coping, Journal of Loss and Trauma, 18, 10-26.
- Garcia-Moya, Irene, Rivera, F. and Moreno, C. (2013) School context and health in adolescence: The role of sense of coherence, Scandinavian Journal of Psychology, 54, 243-9.
- Gartner, Alan and Riessman, Frank (1977) Self-help in the Human Services, Jossey Bass. (=1985, 久保紘章『セルフ・ヘルプ・グループの理論と実際』川島書店.)
- George, Login S. and Park, C. L. (2016a) Meaning in Life as Comprehension, Purpose, and Mattering: Toward Integration and New Research Questions, Review of General Psychology, 20(3), 205-20.
- George, Login S. and Park, C. L. (2016b) The Multidimensional existential meaning scale: a tripartite approach to measuring meaning in life, The Journal of

- Positive Psychology, 79, 1-15.
- Germain, Carel B. and Gitterman, A. (1996) The Life Model of Social Work Practice Advances in Therapy & Practice Second edition, Columbia University Press. (=2008, 田中禮子・小寺全世・橋本由紀子監訳『ソーシャルワーク実践と生活モデル上』ふくろう出版.)
- Giele, Janet Z. and Elder Glen H. (1998) Methods of life course research: qualitative and quantitative approaches, Sage Publications. (=2003, 正岡寛司・藤見純子訳『明石ライブラリー57 ライフコース研究の方法 一質的ならびに量的アプローチ』明石書店.)
- Gillies, James and Neimeyer, R. A. (2006) Loss, grief, and the search for significance: Toward a model of meaning reconstruction in bereavement, Journal of Constructivist Psychology, 19, 31-65.
- Gillies, James, Neimeyer R.A. and Milman, E. (2014) The meaning of loss codebook: construction of a system for analyzing meanings made in bereavement, Death Studies, 38, 207-16.
- Gillies, James and Neimeyer, R. (2015) The Grief and Meaning Reconstruction Inventory (GMRI): Initial Validation of a New Measure, Death Studies, 39(2), 61-74.
- Grotberg, Edith H. (1995) A guide to promoting resilience in children: strengthening the human spirit the Early childhood development: Practice and reflections series, Bernard Van Leer Foundation.
- 原未来 (2012) 「対象関係組み替え過程としての「ひきこもり」と〈回復〉: 当事者の語りと支援実践から」『生活指導研究』29, 175-93.
- 林仁美・小林美智子 (2006) 「思春期における健康保持能力 (Sense of Coherence) と QOL の関連」『Quality of Life Journal』7(1), 69-77.
- Hazel, Nick, Oppenheimer C. and Technow J. et al. (2015) Parent relationship quality buffers against the effect of peer stressors on depressive symptoms from middle childhood to adolescence, Developmental psychology, 50(8), 2115-23.
- 狭間香代子 (2001) 『社会福祉の援助観 ストレングス視点・社会構成主義・エンパワメント』筒井書房.
- Hibberd, Rachel (2013) Meaning reconstruction in bereavement: sense and significance, Death Studies, 37, 670-92.
- Hiew, Chok C., Mori, T. and Shimizu, M. et al. (2000) Preliminary Results with a State-Trait Resilience Inventory, 『学習開発研究』, 1, 111-7.
- 平野真理 (2010) 「レジリエンスの資質的要因・獲得的要因の分類の試み—二次元レジリエンス要因尺度 (BRS) の作成」『パーソナリティ研究』19, 94-106.
- Holland, Jason M., Currier, J. M. and Neimeyer, R. A. (2010) The Integration of Stressful Life Experiences Scale (ISLES): Development and Initial Validation of a New Measure, International Journal of Stress Management, 17(4), 325-52
- Holland, Jason M., Currier, J. M. and Neimeyer, R. A. (2014) Validation of the

- Integration of Stressful Life Experiences Scale-Short Form in a Bereaved Sample, Death Studies, 0, 1-5.
- 堀田亮・杉江征 (2013) 「挫折体験の意味づけが自己概念の変容に与える影響」『心理学研究』, 84(4), 408-18.
- Idan, Orly, Eriksson, M. and Al-Yagon, M. (2017) 7 The salutogenic model: the role of generalized resistance resources, Mittelmark, Maurice B., Sagy S. and Eriksson, M. et al. ed. The Handbook of Salutogenesis, Springer, 57-68.
- 石毛みどり・無藤隆 (2005) 「中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連」『教育心理学研究』 53, 356-67.
- Janoff-Bulman, Ronnie (1989) Assumptive worlds and the stress of traumatic events: Applications of the schema construct, Social Cognition, 7, 113-36.
- 上條菜美子・湯川進太郎 (2016a) 「ストレスフルな体験の意味づけにおける侵襲的熟考と意図的熟考の役割」『心理学研究』, 86(6), 513-23.
- 上條菜美子・湯川進太郎 (2016b) 「ストレスフルな体験の意味づけに関する質的検討」『筑波大学心理学研究』 51, 35-46.
- Kase, Takayoshi, Endo S. and Oishi, K. (2016) Process linking social support to mental health through a sense of coherence in Japanese university students, Mental Health & Prevention, 4, 124-9.
- Kiang, Lisa and Fuligni A. J. (2010) Meaning in life as a mediator of ethnic identity and adjustment among adolescence from Latin, Asian, and European American Backgrounds, Journal of Youth Adolescence, 39, 1253-64.
- 木村知香子・山崎喜比古・石川ひろの・ほか (2001) 「大学生の SOC と Sense of Coherence (首尾一貫感覚, SOC) とその関連要因の検討」『日本健康教育学会誌』 1・2, 37-48.
- 木村美也子・山崎喜比古 (2014) 「障害児の親の Perceived Positive Change (PPC) 尺度の信頼性と妥当性, 及び関連要因の検討」『社会医学研究』 31(1), 29-36.
- 木下康仁 (2003) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』 弘文堂.
- 木下康仁 (2007) 『ライブ講義 M-GTA 一実践的質的研究法修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』 弘文堂.
- 木下康仁 (2014) 『グラウンデッド・セオリー論』 弘文堂.
- 北川裕子・佐々木司 (2014) 「思春期の若者の精神的不調に対する援助希求行動を促進・妨害する要因 一諸外国の研究動向を概観して一」『精神科』 24(6), 663-9.
- 小松源助 (1988) 「ソーシャル・サポート・ネットワークの実践課題一概念と必要性」『社会福祉研究』 42. 19-24.
- Kroger, Jane, Martinussen, M. and Marcia, J. E. (2010) Identity status change during adolescence and young adulthood: A meta-analysis, Journal of Adolescence, 33, 683-98.
- Kübler-Ross, Elisabeth (1974) Questions and answers on death and dying, Ross Medical Associations. (=1971, 川口正吉訳『死ぬ瞬間 一死にゆく人々との対話』読売新聞社.)
- Kunkel, Adrienne, Dennis, M. R. and Garner, B. (2014) Illustrating an Integrated

- Typology of Meaning Reconstruction in Discourse: Grief-Related Disclosures, Death Studies, 38, 623-36.
- Laird, Joan (1995) Family-Centered Practice In the Postmodern Era Families in Society, The Journal of Contemporary Human Services, March, 150-61.
- Lazarus, Richard S. and Folkman, S. (1984) Stress, appraizal, and coping, Springer Publishing Company. (=1991, 本明寛・春木豊・織田正美監訳『ストレスの心理学—認知的評価と対処の研究』実務教育出版.)
- Linley, Alex P. and Joseph, S. (2004) Positive change following trauma and adversity : A review, Journal of Traumatic Stress, 17(1), 11-21.
- Luthar, Suniya S., Cichetti, D. and Becker, B. (2000) The Construct of Resilience: A Critical Evaluation and Guidelines for Future Work, Child Development, 71(3), 543-62.
- Maguire, Lambert (1991) Social Support System in Practice: A Generalist Approach, National Association of Social Workers. (=1994, 小松源助・稲沢公一訳『対人援助のためのソーシャルサポートシステム』川島書店.)
- 牧野晶哲・杉本豊和 (2013) 「大学ソーシャルワークの可能性に関する試行的研究 —キャンパスソーシャルワーカーの導入に向けて—」『研究年報』16, 77-82.
- 松井美穂・笹井孝久 (2013) 「不登校経験者の不登校経験の意味づけとその影響 —「問題」とらえかたからみる支援のあり方—」『千葉大学教育学部研究紀要』61, 77-86.
- 松本学 (2009) 「口唇裂口蓋裂者の自己の意味づけの特徴」『発達心理学研究』20(3), 234-242.
- McMillen, Curtis J. and Fisher, R. H. (1998) Perceived Benefit Scales : Measuring perceived positive life changes after negative events, Social Work Research, 22, 173-186.
- Mittelmark Maurice B., Bull T. and Daniel M. et al. (2017) 8 Specific resistance resources in the salutogenic model of health, Mittelmark, Maurice B., Sagy S. and Eriksson, M. et al. ed. The Handbook of Salutogenesis, Springer, 71-88.
- Moscardino, Ughetta, Scrimin, S. and Capello, F. et al. (2010) Social support, sense of community, collectivistic values, and depressive symptoms in adolescent survivors of the 2004 Beslan terrorist attack, Social Science and Medicine, 70, 27-34.
- 中村伸枝・金丸友・出野慶子 (2011) 「小児期に糖尿病を発症した青年の糖尿病をもちながら成長する経験 ～小学校低学年で発症した小児糖尿病キャンプ参加者の体験～」『日本糖尿病教育・看護学会誌』15(1), 18-24.
- Neimeyer, Robert A. and Anderson, A. (2002) Meaning reconstruction theory, Thompson, Neil ed. Loss and grief: A guide for human services practitioners, Palgrave, 45-64.
- Neimeyer, Robert A., Laurie, A. and Mehta, T. et al. (2008) Lessons of Loss: Meaning-Making in Bereaved College Students New Directions for students service, Wiley Periodicals.

- Neimeyer, Robert A. and Harris, D. (2016) Breavement and Grief, Friedman, Howard S. ed. Encyclopedia of Mental Health volume1, Academic Press, 163-169.
- Nishiyama, Midori, Suzuki, E. and Hashimoto, M. et al. 2016 Association of low sense of coherence with poor subjective well-being: a three-month cohort study of new medical students in Japan, 『民族衛生』82(1), 20-30.
- 小花和 Wright 尚子 (2004) 『幼児期のレジリエンス』ナカニシヤ出版.
- O'Connor, Meredith, Sanson A. and Hawkins M.T. et al. (2011) Predictors of positive development in emerging adulthood, Journal of Youth Adolescence, 40, 860-74.
- 小川雅美 (1991) 「PBI (Parental Bonding Instrument) 日本版の信頼性, 妥当性に関する研究」『精神科治療学』6(10), 1193-201.
- 小塩真司・中谷素之・金子一史・ほか (2002) 「ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性」『カウンセリング研究』35, 57-65.
- Kroger, Jane (2000) Identity development: Adolescence through adulthood, Sage Publications. (=2005, 榎本弘明『アイデンティティの発達 一青年期から成人期』北大路出版.)
- 大谷哲弘・粕谷貴志 (2014) 「高等学校入学時における学級適応を目的としたグループアプローチプログラムの検討」『カウンセリング研究』47, 96-107.
- Palmer, Michelle, Saviet, M. and Tourish, J. (2016) Understanding and supporting grieving adolescents and young adults, Pediatric Nursing, 42(6), 275-81.
- Park, Crystal L., Cohen, L. H. and Murch, R. L. (1996) Assessment and Prediction of Stress-Related Growth, Journal of Personality, 64, 71-105.
- Park, Crystal L. and Folkman, S. (1997) Meaning in the Context of Stress and Coping, Review of General Psychology, 1(2), 115-144.
- Park, Crystal L. (1998) Stress-Related Growth and Thriving Through Coping: The Roles of Personality and Cognitive Processes, Journal of Social Issues, 54(2), 267-77.
- Park, Crystal L. and Blumberg C. J. (2002) Disclosing trauma through writing: testing the meaning making hypothesis, Cognitive therapy and research, 26(5), 597-616.
- Park, Crystal L. (2008) Testing the meaning making model of coping with loss, Journal of social and clinical psychology, 27(9), 970-94.
- Park, Crystal L. (2010) Making sense of the Meaning Literature: An Integrative Review of Meaning Making and Its Effects on Adjustment to Stressful Life Events, Psychological Bulletin, 136(2), 257-301.
- Park, Crystal L., Mills, M. A. and Edmondson, D. (2012) PTSD as meaning violation: testing a cognitive worldview perspective, Psychological Trauma, 4(1), 66-7.
- Park, Crystal L. and George, L. S. (2013) Assessing meaning and meaning making in the context of stressful life events: Measurement tools and approaches, Journal of Positive Psychology, 8(6), 483-504.
- Park, Crystal L. and Gutierrez, I. A. (2013) Global and situational meanings in

- the context of trauma: relations with psychological well-being, Counselling Psychology Quarterly, 26(1), 8-25.
- Parker, Gordon, Tupling, H. and Brown, L. B. (1979) A Parental Bonding Instrument, British Journal of Medical Psychology, 52, 1-10.
- Pasupathi, Monisha (2013) Making meaning for the good life: A commentary on the special issue, MEMORY, 21(1), 143-9.
- Perris, Carlo, Jacobsson, L. and Lindstrom, H. et al. (1980) Development of a new inventory assessing memories of parental rearing behavior, Acta Psychiatrica Scandinavica, 61, 265-74.
- R Development Core Team. (2016) R: A language and environment for statistical computing, R Foundation for Statistical Computing ([http : //www.R-project.org/](http://www.R-project.org/))
- Rutter, Michael (1987) Psychosocial resilience and protective mechanisms, American Journal of Orthopsychiatry, 57 (3) , 316-31.
- Sagy, Shifra and Antonovsky, H. (2000) The development of the sense of coherence: a retrospective study of early of life experience in the family, Journal of Aging and Human Development, 51, 155-166.
- 坂口幸弘 (2002) 「死別後の心理的プロセスにおける意味の役割—有益性発見に関する検討」『心理学研究』73(3), 275-80.
- 坂野純子・矢嶋裕樹 (2005) 「大学生における首尾一貫感覚(SOC)スケールの構造化」『日本公衆衛生雑誌』52(1), 34-45.
- 坂口幸弘 (2008) 「喪失に対する意味理解と生活・人生志向対処が遺族の精神的健康に及ぼす影響」『社会心理学研究』23(3), 281-89.
- 桜井厚 (2002) 『インタビューの社会学 —ライフストーリーの聞き方』せりか書房.
- Saleebey, Dennis (2012) The Strengths Perspective in Social work Practice SIXTH EDITION, PEARSON.
- Sales, Jessica M., Merrill, N.A. and Fivush, R. (2013) Does making meaning make it better? Narrative meaning making and well-being in at-risk African-American adolescent females, MEMORY, 21(1), 97-110.
- 笹原信一郎 (2015) 「<特集 I >第 33 回日本思春期学会総会学術集会 メインシンポジウム 「思春期における健康生成論と SOC (Sense of Coherence) へのアプローチ」 1. 思春期問題と SOC の関連」『思春期学』33(1), 11-4.
- 佐藤文子 (1975) 「実存心理検査—PIL—」岡堂哲雄編『心理検査学—心理アセスメントの基本—』垣内出版, 323-43.
- 佐藤みほ (2011) 「第 8 章 高校生の SOC と幼い頃の家族の習慣」山崎喜比古・戸ヶ里泰典編『思春期のストレス対処力 SOC —親子・追跡調査と提言』有信堂高文社, 137-66.
- 嶋信宏 (1992) 「大学生におけるソーシャルサポートの日常的ストレスに対する効果」『社会心理学研究』7(1), 45-53.
- Simon, Valerie A., Feiring, C. and McElroy, S. K. (2010) Making meaning of traumatic events: youths' strategies for processing childhood sexual abuse are associated with psychological adjustment, Child Maltreatment, 15(3), 229-41.

- 副田あけみ (2005) 「第8章 ジェネラリスト・アプローチ」久保紘章・副田あけみ編『ソーシャルワークの実践モデル 心理社会的アプローチからナラティブまで』川島書店, 135-158.
- 染矢俊幸・高橋三郎・門脇真帆 (1996) 「EMBU 尺度 (養育態度認知に関する自己記入式調査票) の日本語版作成と信頼性検討」『精神医学』38(10), 1065-72.
- 高辻千恵 (2002) 「幼児の園生活におけるレジリエンス—尺度の作成と対人葛藤場面への反応による妥当性の検討」『教育心理学研究』50, 427-35.
- 宅香菜子 (2005) 「ストレスに起因する自己成長感が生じるメカニズムの検討—ストレスに対する意味の付与に着目して」『心理臨床学研究』23(2), 161-72.
- 宅香菜子 (2010) 『外傷後成長に関する研究—ストレス体験をきっかけとした青年の変容—』風間書房.
- 谷冬彦 (2001) 「青年期における同一性の感覚の構造—多次元自我同一性尺度 (MEIS) の作成—」『教育心理学研究』49, 265-73.
- Tedeschi, Richard G. and Calhoun, L. G. (1996) The posttraumatic growth inventory: Measuring the positive legacy of trauma, Journal of Traumatic Stress, 9, 455-471.
- 戸ヶ里泰典・山崎喜比古 (2005) 「13項目5件法版 Sense of Coherence Scale の信頼性と因子的妥当性の検討」『民族衛生』71(4), 168-82.
- 戸ヶ里泰典 (2008a) 「第3章 SOC の形成要因—SOC はいかにして育まれるのか—」山崎喜比古・戸ヶ里泰典・坂野純子編『ストレス対処能力 SOC』有信堂高文社, 39-54.
- 戸ヶ里泰典 (2008b) 「第4章 成人の SOC は変えられるか」山崎喜比古・戸ヶ里泰典・坂野純子編『ストレス対処能力 SOC』有信堂高文社, 55-68.
- 戸ヶ里泰典 (2011) 「第2章 思春期の SOC は形成途上にある」山崎喜比古・戸ヶ里泰典編『思春期のストレス対処力 SOC—親子・追跡調査と提言』有信堂高文社, 39-58.
- 戸ヶ里泰典 (2015) 「<特集 I >第33回日本思春期学会総会学術集会—メインシンポジウム「思春期における健康生成論と SOC (Sense of Coherence) へのアプローチ」3. 高校生における SOC の変動とその要因」『思春期学』33(1), 21-8.
- 豊田秀樹 (2014) 『共分散構造分析[R編]—構造方程式モデリング—』東京図書.
- Volanen, Salla-Maarit, Lahelma, E. and Silventoinen, K. et al. (2004) Factors contributing to sense of coherence among men and women, European Journal of Public Health, 14(3), 322-30.
- Waters, Theodore E.A., Shallcross J. F. and Fivush, R. (2013) The many faces of meaning making: Comparing multiple measures of meaning making and their relations to psychological distress, MEMORY, 21(1), 111-24.
- 山田剛史 (2005) 「過去体験に対する意味づけの肯定的構成要素とその構造および変容過程—ライフストーリーグラフによる青年理解の試み—」『神戸大学臨床心理学研究』4, 13-24.
- 山岸明子 (1990) 「2章 青年の人格発達」無藤隆・高橋恵子・田島信元編『発達心理学入門 II—青年・成人・老人』東京大学出版会, 11-30.
- 山下格 (2010) 『精神医学ハンドブック [第7版]』日本評論社.

- 山崎喜比古 (1999) 「健康への新しい見方を理論化した健康生成論と健康保持能力概念 SOC」
『Quality Nursing』 5(10), 825-32.
- 山崎喜比古 (2008) 「第 1 章 ストレス対処力 SOC とは」 山崎喜比古・戸ヶ里泰典・坂野純
子編『ストレス対処能力 SOC』 有信堂高文社, 3-24.
- 山崎喜比古 (2011a) 「第 18 回日本産業精神保健学会：基調講演 健康生成モデルの中核
概念 Sense of Coherence (SOC) とその向上策を探る」『産業精神保健』
19(4), 270-5.
- 山崎喜比古 (2011b) 「序章 ストレス対処力 SOC とは」 山崎喜比古・戸ヶ里泰典編『思春
期のストレス対処力 SOC—親子・追跡調査と提言』 有信堂高文社, 3-20.
- 吉井清子 (2007) 「6 ストレス対処力 (SOC)」 近藤克則編『検証「健康格差社会」』 医学書院,
43-52
- You, Ji W. (2016) The relationship among college students' psychological capital,
learning empowerment, and engagement, Learning and Individual Differences, 49,
17-24.

資料

大学生調査へのご協力をお願い

<研究責任者>

日本福祉大学大学院

福祉社会開発研究科

博士課程 1 年

Email : da140022@n-fukushi.ac.jp

小野田加奈子

この調査の内容等は以下ようになります。

- 1. 調査内容：**大学生の過去の親からの関わり、およびのこれまでの人生経験や現在の状態をアンケートにより調べるものです。
- 2. 調査報告方法：**この研究は日本福祉大学大学院の博士論文研究の一環として実施する調査です。この調査結果は、論文投稿および学会発表される可能性があります。
- 3. プライバシーの保護：**この調査で得られた結果は全て研究目的で使用します。研究以外の目的で使用されることはありません。この調査結果は個人情報情報を匿名化し、個人が特定されないかたちで統計的に処理します。データの管理には十分注意し、研究終了次第データは廃棄します。
- 4. 回答の自由：**回答に正解・不正解はありませんので、思った通りに回答してください。調査の中でストレス経験についてお聞きします。不安や苦痛を感じられる場合、記入できる範囲でお答えください。
- 5. 参加・撤回の自由：**この調査への回答は任意ですので、調査協力に同意していただけない場合は回答をしなくてもかまいません。また、気分が悪くなったり、回答をしたくなくなったら、途中で回答をやめてもかまいません。同意しなかったり、回答を途中でやめてもあなたの不利益になることは一切ありませんのでご安心ください。
- 6. 費用・謝礼：**調査費用はかかりません。また、謝礼は出ませんのでご了承ください。

●調査にご協力いただける場合は、以下の「アンケート調査協力に同意する」の欄の() に○印をご記入ください。「同意する」に○をつけた後でも、回答を途中でやめることはできます。

アンケート調査協力に 同意する () ・ 同意しない ()

●また、該当者の方には後日個別で面接調査をお願いする場合があります。該当した場合、面接に同意していただける方は、以下の「面接調査協力に同意する」の欄の() に○印をご記入いただき、ご連絡のできるメールアドレスをご記入ください。なお、アンケート調査のみのご協力でも大丈夫です。

面接調査協力に 同意する () ・ 同意しない ()

メールアドレス [@]

●属性

性別 (男性・女性) 年齢 () 歳

●回収方法

配布の際に口頭でお伝えいたします。

<設問1> あなたが幼児期から12歳までの、あなたの親の関わりについて、覚えている通りにもっとも適当と思われる数字に○をつけてください。

	全く そう 思わない	あまり そう 思わない	どちら とも いえない	少し そう 思う	とても そう 思う
(1) 親はどんな時も、できる限り私の傍についてくれた。	1	2	3	4	5
(2) 親は、私がやりたいことに対して、無視や拒否をすることが少なかった。	1	2	3	4	5
(3) 親は、私のすること全てをコントロールしようとしなかった。	1	2	3	4	5
(4) 親は、私となるべく接する時間をもつようしてくれた。	1	2	3	4	5
(5) 親は、私に対していつも一貫した基準にそって対応していた。	1	2	3	4	5
(6) 親は、私がやりたいことを行うことが難しい時、他のことを提案するなど代替案を出して、私を新たに方向づけてくれた。	1	2	3	4	5
(7) 親は、私のプライバシーをおかさなかった。	1	2	3	4	5
(8) 親は、私が困った時相談にのってくれた。	1	2	3	4	5
(9) 親は、私の手に負えないことが生じた時、きちんと責任をとってくれた。	1	2	3	4	5
(10) 親は、私がやりたいことを達成できた時、褒めてくれた。	1	2	3	4	5
(11) 親は、私を依存させようとしなかった。	1	2	3	4	5
(12) 親は、私に優しく、慈愛があった。	1	2	3	4	5
(13) 親は、何を大切だと考えているか、私にはっきり伝えてくれた。	1	2	3	4	5
(14) 親は様々な関わりを通して、私のことを大切に思っていることを伝えてくれた。	1	2	3	4	5
(15) 親は、過保護ではなかった。	1	2	3	4	5
(16) 親は、私の抱えている問題や心配に理解を示してくれた。	1	2	3	4	5
(17) 親は、私が悪いことをした時、過剰に叱ることはなかった。	1	2	3	4	5
(18) 親は、私が困った時助けてくれた。	1	2	3	4	5
(19) 親は、親の意見を押しつけなかった。	1	2	3	4	5
(20) 親は、私が悲しい時、よく私を慰めてくれた。	1	2	3	4	5
(21) 親は私を叱る時、きちんと理由を話してくれた。	1	2	3	4	5
(22) 親は、学業やスポーツの成績において、私に能力以上の高い期待をもっていなかった。	1	2	3	4	5
(23) 親は、私自身に決定を下させた。	1	2	3	4	5
(24) 親は、私を褒めてくれた。	1	2	3	4	5
(25) 親は、兄弟や姉妹と私を区別することなく、皆に対して平等に接してくれた。	1	2	3	4	5
(26) 親は私に、親のかなえたかった夢をかなえるように期待しなかった。	1	2	3	4	5
(27) 親は、私が好んでしたいと思うことをさせてくれた。	1	2	3	4	5
(28) 親は、友人と比べて私が劣っている時でも、私を責めることはなかった。	1	2	3	4	5
(29) 親は、私が望む夢をかなえることを応援してくれた。	1	2	3	4	5

<設問2-1> あなたが過去5年間の間にかかえたストレス経験の中で、1番深刻であった内容についてお聞きします。その内容について、以下のア～クの中から当てはまるものに○をつけてください。

ア	進路・就職について	
イ	性格について	
ウ	友人関係について	
エ	恋愛について	
オ	家族関係について	
カ	成績・能力について	
キ	健康について	
ク	その他	

<設問2-2> また、そのストレス経験の内容を書くことができる範囲で下の枠の中にお書きください。

<設問2-3> そのストレス経験は今までの悩みの中でどのくらい深刻に感じましたか。当てはまる数字に○をつけてください。

全く深刻ではなかった	あまり深刻ではなかった	どちらともいえない	少し深刻だった	とても深刻だった
1	2	3	4	5

<設問3> 設問2でお答えいただいたあなたのストレス経験に基づいて、今の気持ちにもっとも適当と思われる数字に○をつけてください。

		全くそう 思わない	あまりそう 思わない	どちらとも いえない	少しそう 思う	とてもそう 思う
(1)	私は、この経験に納得できるようになった。	1	2	3	4	5
(2)	この経験によって、私は強くなった。	1	2	3	4	5
(3)	私は、この経験を何とか切り抜けることができたと思う。	1	2	3	4	5
(4)	私の人生は、自分の力で十分やっていける。	1	2	3	4	5
(5)	この経験によって、私は人生において何が大切なのかが分かった	1	2	3	4	5
(6)	この経験は、私にとって意味があると思うようになった。	1	2	3	4	5
(7)	この経験によって、私は成長できた。	1	2	3	4	5
(8)	私は、この経験を乗り越えることができたと思う。	1	2	3	4	5
(9)	私の生き方から言えば、世の中は、非常にしっくりくる。	1	2	3	4	5
(10)	この経験によって、私の人生の優先順位は変わった。	1	2	3	4	5
(11)	私は、この経験を受け入れられるようになった。	1	2	3	4	5
(12)	この経験によって、私は自信がついた。	1	2	3	4	5
(13)	この経験は、私の中の重要な一部となっている。	1	2	3	4	5
(14)	私には人生の意義、目的、使命を見出す能力が、十分にある。	1	2	3	4	5
(15)	この経験によって、私は自分の人生は価値のあるものだ気付いた	1	2	3	4	5
(16)	私は、この経験がなぜ起きたのかが分かるようになった。	1	2	3	4	5
(17)	この経験によって、私は忍耐強くなった。	1	2	3	4	5
(18)	この経験によって、私は今までとは違った、新しい自分に変ったと思う。	1	2	3	4	5
(19)	私には支えとなる家族がいる。	1	2	3	4	5
(20)	この経験によって、私は1日1日を大切に過ごすようになった	1	2	3	4	5
(21)	この経験によって、私は周囲の人々の温かさが分かった。	1	2	3	4	5
(22)	生きていく上で私には、非常にはっきりした目標や計画がある。	1	2	3	4	5
(23)	この経験によって、私は後悔なく日々の生活を生きたいのだと分かった。	1	2	3	4	5
(24)	この経験によって、私はより深い人間関係を築くことができた。	1	2	3	4	5
(25)	私という人間は、目的をもった非常に意味ある存在だ。	1	2	3	4	5
(26)	この経験によって、私は自分の人生をよりシンプルに生きるようになった。	1	2	3	4	5

(27)	この経験によって、私は周囲の人々に思いやりをもって接するようになった。	1	2	3	4	5
(28)	私は人生の目標の実現に向かって、着々と進んできている。	1	2	3	4	5
(29)	この経験によって、私は家族の大切さに気付いた。	1	2	3	4	5
(30)	毎日の生活(仕事や勉強など)に私は、大きな喜びを見出し、また満足している。	1	2	3	4	5

<設問4> 以下に、私たちの人生に関する質問があります。1から7までのうち、あなたの感じ方を最もよく表している番号に一つだけ○をつけてください。最少の数字は1、最大の数字は7です。1の上を書いてあることが、あなたに完全にあてはまるならば、1に○をつけてください。7の上を書いてあることが、あなたに完全にあてはまるならば、7に○をつけてください。1でも7でもないように感じるならば、あなたの気持ちを最もよく表す数字に○をつけてください。

(1)	あなたは、自分の周りで起こっていることがどうでもいい、という気持ちになることがありますか？	まったくない	とてもよくある	1	2	3	4	5	6	7
(2)	あなたは、これまでに、よく知っていると思っていた人の、思わぬ行動に驚かされたことがありますか？	まったくなかった	いつもそうだった	1	2	3	4	5	6	7
(3)	あなたは、あてにしていた人ががっかりさせられたことがありますか？	まったくなかった	いつもそうだった	1	2	3	4	5	6	7
(4)	今まであなたの人生は、	明確な目標や目的はまったくなかった	とても明確な目標や目的があった	1	2	3	4	5	6	7
(5)	あなたは、不当な扱いを受けているという気持ちになることがありますか？	とてもよくある	まったくない	1	2	3	4	5	6	7
(6)	あなたは、不慣れな状況の中にいると感じ、どうすればよいのか分からないと感じることがありますか？	とてもよくある	まったくない	1	2	3	4	5	6	7
(7)	あなたが毎日していることは、	喜びと満足を与えてくれる	つらく退屈である	1	2	3	4	5	6	7
(8)	あなたは、気持ちや考えが非常に混乱することがありますか？	とてもよくある	まったくない	1	2	3	4	5	6	7
(9)	あなたは、本来なら感じたくないような感情をいだいてしまうことがありますか？	とてもよくある	まったくない	1	2	3	4	5	6	7
(10)	どんな強い人でさえ、ときには「自分はダメな人間だ」と感じることもあるものです。あなたは、これまで「自分はダメな人間だ」と感じたことがありますか？	まったくなかった	いつもそうだった	1	2	3	4	5	6	7
(11)	何かが起きたとき、ふつう、あなたは、	そのことを過大に評価したり、過小に評価してきた	適切な見方をしてきた	1	2	3	4	5	6	7
(12)	あなたは、日々の生活で行っていることにほとんど意味がない、と感じることはありますか？	とてもよくある	まったくない	1	2	3	4	5	6	7
(13)	あなたは自制心を保つ自信がなくなることがありますか？	とてもよくある	まったくない	1	2	3	4	5	6	7

以上で質問は終了になります。

ご協力ありがとうございました。

最後に記入漏れがないかどうかの確認をよろしくお願いいたします。

この調査に関して、ご意見や感想などがありましたら、ご記入お願いいたします。また、表紙にあります研究責任者のメールアドレスまで送っていただくことも可能です。

ご協力ありがとうございました。

<これまでの人生経験に関する意識調査>

ご協力をお願い

<問い合わせ先・研究責任者>

日本福祉大学大学院福祉社会開発研究科
社会福祉学専攻 博士課程

E-mail: da140022@n-fukushi.ac.jp

小野田加奈子

この調査は、大学生の方のこれまでの人生経験をうかがうものです。以下の内容について充分ご理解いただき、同意をされた方にご協力をお願い申し上げます。

1. 調査目的

本調査の目的は、青年期のストレス経験を乗り越え、自分の人生を切り開いていくプロセスの実態やその際支えとなる要因を明らかにすることです。この目的のためデータ収集の必要があり、今回の調査を行うことになっています。

2. 調査方法

調査に同意していただいた方に、インタビュー調査にご協力いただきます。時間は約30分～2時間を予定しております。インタビューは個室で、担当者と1対1で行い、インタビュー内容を丁寧に整理させていただくために、お話を録音させていただきます。

3. 調査内容

大学生の方のこれまでのストレスフルだと感じた出来事や状況についてお聞きします。ネガティブな経験を語ることに不安や苦痛を感じる方もいらっしゃるかもしれません。その点は十分に配慮しながらお話を伺う所存ですが、以降にありますように、話しづらいことを話していただく必要はなく、また途中で調査への参加自体を中止することも可能です。

4. 参加、撤回の自由

本調査に参加されるかどうかは、貴方様の自由です。参加されない場合でも、不利益となることはありません。また、本調査への参加に同意された後、また途中でも、自由に同意を撤回することができます。その場合には、調査を中止したい旨を調査者にお伝えください。参加されない場合、撤回した場合でも、貴方様が不利益を受けることはありません。また、撤回された場合データは廃棄します。

5. 回答拒否の自由

発言は、貴方様の自由意思によるものですので、答えられない質問、抵抗のある質問への回答を拒否することができます。回答を拒否された場合でも、不利益となることはありません。

6. プライバシーの保護

インタビューにつきましては、厳重に秘密が守られます。面接の記録は、分析後、博士論文としてまとめる予定です。一部を学会等で発表もしくは論文投稿する可能性があります。ただし、調査結果の報告や発表に際しましては匿名化されますので、貴方様のお名前や個人を識別する情報が使用されることは一切ありません。また、貴方様の許可なくデータを第三者に渡すことはございません。データの管理についても、厳重にさせていただきます。なお、貴方様から希望がある場合、調査内容の情報を公開させていただくことも可能です。

7. 費用・謝礼

今回の調査において、貴方様が負担する費用はございません。また、調査にご協力いただいた謝礼はございませんので、ご了承ください。

8. その他

本調査への参加に同意するかどうかは、貴方様の自由な意思にお任せいたします。ご不明な点につきましては、いつでもご遠慮なく調査者にお尋ねいただくか、または E メールでお問い合わせいただければ幸いに存じます。

面接調査インタビューガイド

(1) 属性

- ①年齢は何歳ですか。
- ②現在大学何年生ですか。

(2) ストレスフルな出来事や状況について

①中学校入学時から今までの中で、ストレスフルだと感じた出来事や状況が色々おありだと思いますが、その中で今回の面接の中で面接者に話すことができる辛かった内容について教えていただけますか。

②その出来事や状況はあなたが何歳の時起きましたか。

③その出来事や状況を経験した直後、どのように感じましたか。

④その後、その出来事や状況に対しどのように対処してきましたか。

⑤どの程度、うまく対処できましたか。0点から10点までの間で何点だと思いますか。

全 く 対 処 で き な か っ た						ど ち ら と も 言 え な い							と と も う ま く 対 処 で き た
0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10			

⑥対処をする際、助けになった人や物事（例えば、書籍、名言、格言など）はありましたか。もしあれば、教えていただけますか。

⑦今は、その出来事や状況を通じてどの程度成長できたと思いますか。

<問い合わせ先・研究責任者>

日本福祉大学大学院福祉社会開発研究科
社会福祉学専攻 博士課程
小野田加奈子

電話：(052)242-3022 e-mail：da140022@n-fukushi.ac.jp